

交通・交易

はじめに

妙義町は、妙義の山裾の丘陵地帯で、その丘陵を侵蝕した細長い低地に田畑があり、旧高田村地帯はその中心地となっている。旧妙義町はその上部の丘陵の平地に多くの集落がある。

町の四方には、松井田町が北に約一里、東の富岡市が二里〜三里、南の下仁田町が約三里の距離にある。これらの町が妙義町の主な商圏地域で、それらの町との交通路が主要道になっている。

この町の南北を結ぶ県道は、下仁田―松井田道であり、丘陵の上部



妙義通り（妙義）（撮影 阿部 孝）



昔の宿屋（妙義）（撮影 阿部 孝）

を横断し、中央部には宿がつくられ、屋並みも宿場風に立並んでいる。もう一本の主道は、妙義神社の門前町から東に町の中心部の高田地区を通り、富岡に通じ、現在ではこの県道が町の中心道路になっている。

これらの道が、かつては妙義山や妙義神社への道であり、神社の下の門前町には旅館や土産物の店も並んでいるが、かつて妙義講のさかんなころは宿泊する人も多かった。いまでは自動車の発達により宿泊客も減少したが、夏には学生などの合宿所として一時的には賑う。一般の参詣人はやはり秋の妙義に訪れる人が多い。

このような妙義山・妙義神社という特殊な条件を除いては、一般的な山麓の村で、松井田や富岡などの商圏地域で、行商、遊芸人などが訪れてきた。しかし、第二次大戦後はほとんどなくなり、それらの山麓の村らしい交通・交易の民俗も忘れ去られようとしている。幸い、安藤重太郎氏が『うつり変る農村と私の記録』をまとめている。なお、そのなかから交通・交易の関係部分を引用することとする。なお、妙義講なども交通とは深い係りがあるので、信仰の部など参照せられたい。（近藤義雄）

一、交通

交通関係は、大きく分けて村から遠方などへ旅をする場合と村内及び近町との交通路、宿泊施設・運搬関係などの報告が集められた。旅は以前は代参講なども各種のものがあつたのであろうが、今回は伊勢講の場合だけである。峠講、榛名講などの存否は不明であつた。

交通路については、橋に関係した調査が特筆される。大雨で度々橋が流失し、その永い経験のなから生まれた村の仕組み、架橋の技術など注目すべきことだった。

もう一つの今回の特色は、妙義山という名山の麓村だけに、登山者の案内及び荷物運搬のことで、そのために「同盟組合」がつくられたことは、普通農村と異なる観光地特有の交通資料といえよう。

なお、観光地は宿泊、土産屋などが門前町として特色あったのだが、妙義神社の門前町に関する資料は僅かに旅館のこの他は得られなかった。

輸送関係では、前期の「同盟組合」の他に、下仁田、松井田、富岡を結ぶ地内のため、行沢には立場もあり、物資の輸送状況も記録された。近世は坂本まで伝馬助郷があり、松井田方面との関係が深かったようである。

伊勢参り 戦争前は、伊勢参りに行く時は出かけたあとで家族が足日神社の境内にお飯屋をつくった。屋敷神くらしいのもので、麻がらでつくる。家の人は毎日拜みにゆき、伊勢参りから帰ると家へ行かずにお飯屋のところへ行き、お飯屋に腰をかけ、家族の者がお飯屋に火をつける。燃えたのを見届けてから家に帰る。

伊勢参宮に出かける時は村の衆から餞別がおくられた。隣り組は全部くられたものである。

祖父の代には、伊勢参りに行く時は、ユツツケゾウリというのでボロで編んだわらじをはき、余分に持って行ったりした。薄い足袋にユツツケゾウリをはいた。

伊勢参りに出かけたあとは、家族はかけ膳をつくって無事を祈った。本人が使っていた箱ぜんでお膳立てをする。

伊勢参りから帰って来ると、家族はもちろん、村の人たちが部落境まで出迎えにゆく。これを坂迎えといった。

伊勢参りのお土産はお札とかお守りで、子どもがやって来たときな

どはみかんを買って配ったり、菓子をくれたりした。帰って来る日はみんなが待っていたものである。(八木連)

むかしは、伊勢参宮には一カ月以上かかった。隣組の人とか、近い親戚の人は、お見舞(餞別)をやった。

参宮に行ってきた人は、お見舞をもらった人に、土産を買ってきて配った。またお札を受けてきて配った。(上高田)

かけ膳 兵隊に出征した家では、箱膳でかけ膳をした。(八木連)

立場(タテバ) 行沢は道路端にあり、松井田へ一里、下仁田・富岡・安中・坂本へ三里、高崎へ五里、前橋へ八里の道のりだった。そこで、運送引きをする人が多かった。松井田―下仁田間を運送車で荷を運んだが、大正時代まで行われていた。多い時には一日に三十台の運送車(荷馬車)が通った。行沢にも五、六人いた。米・麦・うどん・日用品などを下仁田に運び、帰りは石灰・木炭などを積んできた。運送引きが休む立場が行沢にあつて盛った。酒・うどん・まんじゅう・鉄砲玉(あめ玉)・ニシンの煮付けなどを売り、馬には湯をわかしてフスマを入れてくれた。酒一杯十銭の時、フスマ代が八銭だった。大正八年ごろが最高の景気だった。うどんはミヨリガエシといって、三倍に売らねばもうからなかった。(行沢)

橋掛け 古立では、久保田橋、上橋(上古田橋)、天沢橋の三つの橋掛を毎年行なっていた。毎年このことなので専門家が何人か出来た。

本式の橋掛は十一月頃で、その外は仮橋を作った。

材料は古立に山林を持つ丹生の岡部氏、高田の須藤氏、黛氏(神社の林の下草刈り奉仕を村中で行なつた関係)から、それぞれ貰つて使した。切口八寸の長さ六、七間の木材であった。

中央に鳥居を立て両側から掛けた。昔は両方の根元を固定して中央を継ぐ、はね橋を作ったが骨が折れて大いへんだということをやめてしまった。

鳥居は草刈りかごの中に石を入れて固めた。一番むずかしかった。

底を掘ればよいのだが、流れがあるので、このかごで固定するぐらいしか出来なかつた。

橋を掛けて、やれやれよかつたと酒を飲んでいるうちに流れたこともあつた。

大水が出るとすぐ流れてしまうので苦しかった。そのために古立は団結もよく、人氣もよかつた。流れた翌日は世話人が流れた橋の材木を見つげに出かけた。富岡の黒川まで行つたこともあつた。見つかるも村中で出て川の中を引き上げて来た。水が増しているうちに引けば簡単に運べた。流れた木に石を上げられると、その人のものになるが、世話人が頭を下げてもらつて来た。

橋木には、みんな「古立」と彫つておいたので一目でわかつた。

村人足に出ない時は出不足金を納めた。夏の忙しい時出ない場合は半人手間、寒いときは三分の一人分位であつた。一人手間が五〇銭位と見ていたから、二十五銭か、十五銭位出した。その金で酒を買つて飲んだ。

橋掛け人足は、何事をおいても大体出た。他村の人は利用するが手を貸さなかつた。古立にとつては死活問題であつた。

本式の橋は、川の水が一定して、増水しないことを見定めてから掛けた。

材料は鳥居はクリの木、ヒキワタシの木はスギだつた。さしわたし八寸の長さ七間位のもので八本必要だつた。片方へ四本使つた。

有効巾が七尺あつた。したがつて横になる木は八尺なければならなかつた。

そだを上げて、土を一尺の厚さに盛つた。

馬でも、荷車でも通れる橋だつた。(古立)

橋木を運ぶときの唄と音頭 「川うなぎ、そろそろと、みなさんのおおかげで、おさとへと、向つたぞ、エートサ、エートサ」(川の中を川上に向つて引く時)

「はなついた、てこの衆、たのむがさあ、エートサア、エートサア」
(石にあつた時)

「動くはさあ、動くはさあ、……」

「山うなぎ、そろそろと、お里へと、おもむいた。エートサ、エートサ」(山から里へ向う時) (古立)

同盟者組合 妙義登山の案内者の同盟者組合があつた。昭和十八年までつづけられてきた。この組合には、出番があり呼び出し番号があつた。

昭和三年頃、石門まで子供を背負つたり、荷物を持つて案内に行つて来ると一円五〇銭、頂上までは二円だつた。一日三回位往復した。門前のどこの旅館でも頼む人が多かつた。当時、汽車の終りは赤羽だつたので泊る人が多かつた。

登山者用の駕籠があり、使用料一回五銭で貸した。十五個ぐらい用意されていて、後には貸出しも高くなつて十銭になつた。

外人も来て駕籠に乗せて運んだこともある。堀りがあるので、またぎながら「こんちきしょうの、ばかやろう、重たいもんだ。」と日本語でいったら外人がわかり笑つていたという。大地震以後は外人は来なくなつた。

当時は職業によつて休日があつた。何日は床屋の休み、何日は魚屋の休みと決つていた。(妙義)

馬入れ道 どんな田や畑にも馬を引いて入れる道があるわけで、これをウンマイレとかウンマイレミチとかいう。しかし、どうかすると横領されたり、流れたりして馬入れ道がない田畑があることがある。こんな時は隣接の田畑の持主に話して通してもらう。(上高田)

雪かき 昔は雪が降つたので、雪が降ると一戸一人ぐらゐ出て自分の部落の中をかき、部落境まで、通学路優先で雪かきをした。大久保の人たちは、下八木連まで二キロメートルほどの道を、村中総動員で(学校子のあるなしにかかわらず)雪かきしてきた。先祖代々そうし

ているという。(八木連)

妙義の女郎屋 妙義神社の下に女郎屋が四、五軒あり、出し張りの家が並んでいた。女郎は美濃の大地震のとき、生活に困って売られてきた人がいた。村には遊女を身受けした人も五人ほどいる。この地の女郎は普通の仕度にお白いをつけた程度だった。(菅原)

旅館 「ひしやの蚕屋」といわれ、旅館をしたり養蚕をしていた。三十六人位手伝っていた。一年中百姓専門でいる人が男女いた。一人は越後の小千谷の十作、女の方は越中のばあさんといっていた。

当時はメド飼いで、メドの木があった。(妙義)

二、交 易

買物 行商だけでは日用品も不足するので、松井田と富岡、下仁田などに買物に出かけた。特に大字妙義は松井田の商圏地域であり、高田などは富岡、宿などは下仁田、松井田ともに買物にいった。購入の時期は、主に市日を選ぶことが多かったようで、大字妙義などは松井田の暮市(十二月二十六日)に日用品などを買物、初市には年始客を迎える食品や日用品などを購入した。市日が村人にとっては楽しみの日であり、時には生産品をこの日に売りに行って帰りに日用品を購入してくる場合もあった。大字妙義ではコウズを切つて松井田の暮市に持参し、コウズの問屋にそれを売つて、その金で買物をしてきたという。

村内での買物、昭和初期までは益・暮勘定のように、帳面買物が多かったようである。第二次大戦を境にこの習慣も大きく変つてきたようである。

初市 正月二日の松井田の初市はにぎやかで、人が人見に行くくらいのにぎやかだった。年始客のための魚を買つたりして一杯飲んで帰つてきた。塩引きが七ひきも入つて一袋三円五十銭だった。アンペ

ラに包まっていた。(八木連)

帳面買物 戦争前は十二の店でも、松井田の店でも通い帳で買物をして、現金買いはしなかった。昭和初年ころは、土方が一日の賃金五十銭、バットが五銭(タバコ)、酒は一升五十銭だった。「一升二十銭の米を一ノ宮で売るから買物に行くべえ」という時代だった。(八木連)

盆暮勘定 通い帳で買物をしているから勘定は盆とか暮にした。持つて行かないと店からカケトリが来た。払えないと繰越にしてもらったが、他の店に代えたこともある。(八木連)

買物 戦後バスが通るようになってからは富岡へ行くようになったが、それ以前は盆暮の買物も松井田へ行つた。当時は歩いて行つたもので、娘を嫁にやる御祝儀道具も松井田だった。まとめて買うと持つて来てくれた。(八木連)

日用品の買物といえは松井田ですることと決つていた。乗物が便利になつてから富岡に行くようになった。(上高田)

村から売り出す物

近年コンニャク栽培がさかんになり、特産物の主なものとなつたが、昭和初年までは養蚕関係と和紙原料のカズ(楮)などであった。カズは暮に刈り取り暮市に出した人もあるが、村内にもカズ屋があった。

養蚕もさかんであり、繭の出荷期は賑わつたようであり、それに関連して、繭や熨斗買物もきた。熨斗を売つていたので糸を繰つたのであろうが、生糸で売つたのか絹織物で売つたのか定かでない。玉繭を自家用に用いる場合もあったろうが、農閑期に白絹も織つたと思われる。それらは近くの町の市に売り出されたのである。西上州は絹にして売ることが多かった。

カズ屋 昔は妙義にも高田にもカズ屋が何軒かあつて、冬、カズを買つて出荷した。紙の原料の楮をカズというもので、昔は土手がたく

さんある家ではカズを植えておいて三十束ぐらい出した。十貫の束を三十束だから三百貫もあるが、秤にかけて目見当のまま売った。カズ屋は生木を買って、ふかして皮をむいて売っていた。(八木連)

マイ(繭) 買い マイ買いはセリともよばれた。秤を持って農家を訪問して上まゆから中まゆ、ハマイ、クズマイまで買って行つた。現金で支払うから、五銭でも高いと売った。ふつうは組合製糸に出したが、都合でセリに売ったこともある。(八木連)

くず繭はビシヨ繭といひ、熨斗買いがいつしよに買つていつたこともあつた。熨斗買いは糸とりがはじまるとやつてきた。(菅原)

桑の取引き いつでも余つた桑は、仲買人が買いつて行く。十二のタバコ屋の主人が仲買人で、仲買人どうしの組合があるらしい。足りない時はそこへ話せばみつけてくれる。桑は切つて束ねて出す。カンカン渡し(目方取引)で、一束五貫、一駄三十貫(いまは一キログラムいくらとなつてゐる)、束にした中の太い枝をけずつて目方を書いておいた。他県(信州)の人が多いが、農協よりも情報が早いから農協を通じない。(八木連)

行 商

妙義町は山村のため店も少なく、様々な行商人がやつてきた。これらのなかには、毒消し売りのように遠方から来るものと、テントウガシヤのように近くの町や村から来るものがあつた。

遠国からくる行商人は、ほとんど季節が一定してゐて、越後の毒消し、富山の薬屋、越後の刃物売り、江州の呉服売りなどである。これらの行商人は主に一之宮や松井田などの行商宿のある町に泊つて売りにきた。なかには、村に懇意の家ができて毎年泊つていく行商人もあつた。

特定の季節に限らず物売りに来るのは、主に日用品、食糧品である。これらのなかで、醤油売りはやや特色あり、従来余り調査報告に出て

きなかつた行商である。味噌からオスマシをつくつて醤油の代用にした話などが出ていないから、結いで醤油しぼりもしないで専ら行商の醤油に依存していた地帯である。

季節に係なく来る行商人

醤油売り 松井田から醤油売りがきた。醤油は大きな壺に入れてあり、それを天秤棒でかついで売りにきた。一合二銭ほどであつた。一合枘ではかり売りしてくれた。時には売り切れそうになると水を入れて増したのをみたこともある。当時は醤油が高級の調味料であり、家の鶏の産んだ卵と交換したこともある。卵は食べたいが、卵を食べると醤油が交換できないので我慢した。(菅原)・(妙義)

牛乳売り 一合三銭位で売りにきた。

テントウ菓子屋 毎日売りにくるのでテントウサマ(太陽)のようだという意味、夏でも綿の入つたチョッキを着ていて、鉄砲だま(一厘で一個)、駄菓子など売りに来た。毎日くる時間は一定していた。松井田の人で背負梯子で背負つてきた。

魚屋 干物ばかりで、自転車につけてきた。乾物屋は高崎からきた。しみ豆腐 信州から売りにきた。(菅原)・(妙義)

シヨイアキナイ 行商人のことをシヨイアキナイという。魚屋、化粧品屋、衣料品屋などが来た。化粧品屋はつめかえ用のクリームやポマードなどをもつて来て、びんにつめて売つて行つた。衣料品屋は、野良着とか股引、シャツ、前かけ、はんでん地などを商つた。それぞれ定期的にやつて来て、注文もきいて次の時間に合わせてくれた。

行商に来て苦労した人は定店を持つても失敗しない。どんな不況にも耐えられる。(八木連)

あめや へえあめや(へえへえいうのでこう言つた)が松井田から来た。太鼓たたいて子供を集め、水あめの固いのを売つた。買うと旗をくれた。またかちかちはたきながらくる朝鮮あめやもあつた。これ

はブツカキといった。身体の前後にあめを入れるものをつけ肩にかけていた。(下高田)

テントウガシヤ お爺さんで毎日売りに来たので、お天道様のようだった。(菅原)

遠くから来た行商人

金物や 信州、越後から庖丁や鎌、鋸をもってきた。久原の高橋さんの家に泊ることになっていて、各家を廻って売った。品物をもってきて次の注文をとっておいて春になると来た。帳面に記しての貸売りで、蚕と米の出来どきに来る。鍛冶屋は遠くは金古、安中、間仁田に注文していた。(下高田)

毎年同一人で、村の懇意な家に泊っていた。大正期までのことである。(上高田)・(妙義)

葉売り 置き葉は越中から年二回来た。春置いて秋来て整理する。

松井田、富岡、一之宮などの宿に泊っていたようであり、一之宮の下り松の付近に住みついた人もいる。(上高田)・(菅原)

毒消売りは越後西蒲原郡から娘がきたが、泊る所は本村の懇意な家で、いつも決っていた。(下高田)

呉服売り 江州屋が春に貸売りし、秋に代金を取りに来た。(上高田)

値引き 行商に来る人は、定価を少し高めにしていた。気はこころというもので、マケタ(値引きする)方が気持ちがいから少しだけ高目にして来るわけである。店へ行っても昔は今よりも値切ったものである。(八木連)

ムラに来た人 秋口から春さきまでの粋な毒消し売り娘、ごぜ、こんぶ売り、たらいを頭に乗せて日の丸や軍旗などをそのたらいのまわりにさして飾ったあめや、屋台のブツカキ氷を売る「コーリコリ」と高声で呼んだ氷屋、朝鮮人の朝鮮飴売り等……また、「鋸の目立屋」、「剃刀や鋏の研屋」、「棒屋」と言つて鋏、サガラ、草搔(かき)を主として農

具の柄造職、そういった職人が一軒一軒を廻った。これ等の人達が伝えてくれる話が新聞と等しい役割にもなった。また時季的であるが、真竹の竹皮買も来て、子供達は僅かでも竹やぶから拾っておき、それを集めて売り、農休みの小遣いの足にした。

油売りは桶から柄杓でその家から出した容器に油を注ぐ。昔は食用でトロトロしていたため柄杓から出切るのに手間(時間)が掛る。その間話をする。だから時間のかかることを手間とするという。悪く言う

と閑人を油売りと言った。

「篩屋」も今は見かけない。粉は日常食用にかかせないもので、この職人もあった。「胴直し」は今は全くない。「下駄の齒入れ」。煙管の「らおのすげ替え屋」。らおの黒、赤い斑点もまた、風味があった。「嘶家」と言つて「大岡政談」とか「伊達騒動」とか「鍋島猫騒動」などの昔話をする人が村々を廻った。子供の頃二、三回聞いた事もあるが、今では無くなつてしまつた。それと「祭文読み」と言つて、物語に一定の節づけをし、調子よく語り歩いた人もあつたという。

冬期はながく雪も多く働く事が無かつたためと思うが、「大工」「木挽」は主として越後者が多く、中には信州の者もあつた。上州者は少なかつたようだ。

「鑄掛屋」は、昔、殆どの鍋釜が鉄製の時代に無くてはならない職業で、鍋釜、鉄瓶、その他お勝手道具など全部鉄製だったので、こわれたり穴があいたりしたのをなおした。物を大切にしていた時代には鑄掛屋の回つてくるのを待っていたものだ。

道普請は春、秋行われたが、この時部落の青年会は「道路標識」つまり道教えを建てた。

村へ来た遊芸人

第二次大戦前までは、正月を中心に農閑期に各種の遊芸人が村へやってきました。今回の調査では、春駒、ごぜ、大神楽、三河万才、猿ま

わし、越後獅子、豆ぞう小僧などが報告された。これらの遊芸人は、村の民家や安宿屋などに泊って次々と村を巡っていったのだが、三河万才以外の遊芸人がどの地方から来たか不明である。遊芸については、春駒がややよく調査され、その春駒歌に本場の蚕種が信州とあるのも特色ある春駒歌である。古くは結城種が本場であったが、江戸後期に信州、奥州種が本場となるので、そのころから歌がかえられてきたのかも知れない。

これらの遊芸人は、戦時体制が強化されると次第に巡って来なくなり、今回の調査報告もほとんど昭和初期までのものであった。

なお、初絵売りなども、正月の縁起売りであるが、遊芸人の項に入れておいた。

春駒 正月ではなかったが春先のころ、春駒がやって来た。五十年前前のことでよくおぼえてないが、馬の首と鈴をもつて歌をうたつて部屋の中をまわった。歌は「のりこめはねこめ蚕飼いの三吉、しつかりとのりこめ、春の始に蚕が当る。当時すぐれて蚕の本場というて、信州信濃路、浅間の種で、八十八夜はお蚕のシンで、雲か霞か青のすとの：」というようなものだった。村のある家へ泊めて、その晩教えてもらったものである。(八木連)

いくらかおぼえがある。どちらから来たかは知らないが遠くの方から来たようだった。どんな歌だったかも記憶がないが、その後はまったく来ない。(上高田)・(菅原)

ごぜ 子どものころ(大正)来た。村の中に泊った。吉田市五郎さんの家にとめたことがある。夜、村の人が集まり、ごぜが口説きのような歌をいくつも歌った。いくらかの銭をもらった。(八木連)

万才と獅子 昔は名古屋万才がよくきた。今は年一回桐生か伊勢崎の人で世帯持っている五十年配の人がくる。シミみたいなカシラを持ってきて、払い給え清め給えなど言い、終りにおめでとうなどという。除けを頼むと家や金をくれそうな家へ寄るのだろう。(行沢)

越後獅子・三河万才・大神楽などもきた。(菅原)

初絵売り 元日早々どこからか初絵売りが来た。縁起のいい絵をもつて来て売ったが、土地の人ではなかった。小遣いどりに来たものだった。(八木連)

豆ぞ小僧 正月に竹を割ったのをたたきながら「豆ぞ小僧が来たならば……」といいつつ各家に門付けして歩いていった。大正初期のことである。どこから来ていたのかは判らない。(下高田)

虚無僧 僧が着る黒い着物を着て、深い笠をかぶって一軒一軒の軒下に立って、尺八をふいていった。虚無僧で多野の山の方からやって来て本村の後家の人の婿になった人がいた。(上・下高田)

社会生活

はじめに

社会生活に関する調査資料を、ムラの生活とイエの生活とに大別してまとめみる。調査報告資料が少なく、内容的にも、地域的にも片寄っていたので、若干の補充調査を行なつて、資料を整えるように心掛けた。

本章のまとめは、提出された資料に従つて、便宜的な方法をとつた。したがつて、体系的な形でまとめられていないことを、あらかじめ断りしておく。

次に、妙義町における社会生活について、今回の調査によつて得られた特徴的な点を列挙してみる。

（ムラの生活について）

ムラの生活に関する事項について、問題となる点をとり出してみると、次の如くなる。

一、ムラの組織の中で、現行の行政組織と、古くからの慣行的なムラ組織との並存的な形がみられること。

全町的ではないが、若干の大字では、町の末端組織としての区長制と、大世話（大当番）、小世話（小当番）というムラごとの自治組織とが並存している形がみられる。区長は町役場からの委嘱により、町行政の末端機関としての性格を持つている。

大世話・小世話は、高田地区の上高田・下高田と妙義地区の中里におかれている。区長が町の委嘱による行政的な役柄であるのに対し、

大世話・小世話は、各ブラク（コウチ）の祭りとかケイヤクなど、いわば生活的な役柄であるようである。

新しい妙義町の成立する前は、旧高田村（三大字）と旧妙義町（八大字）に分れていたが、その頃も、前者は大字内をいくつかの区に分けて、一区から十六区まで分けて、区長を置いたが、妙義地区は、ブラク（コウチ）ごとに区長を置き、ブラク名をつけて呼んでいた。この形は、現在でも踏襲されている。また、区の数も、妙義地区のほうが多く、同地区が小ブラクによつて成立していることを示している。

こうしたムラの成立事情の違いが妙義地区と高田地区の、区の役員の名称とか形の違いをあらわしているとも考えられる。なお、妙義地区の中には、副区長とか、連絡員といわれる区長の下役を置いているところもあつて、高田地区との違いを示している。

このように、二つの地区を合併して、新しい町を形式しながらも、それ以前の習慣をそのまま認めているところに、本町における行政機構の、新旧のミックスされた性格をみる事が出来る。

二、隣組制度がまちまちであること。

これは前項に記した大字の行政機構と関連して、各大字ごとの仕組の違いによることである。しかし、全般的にみれば、本町においては、隣組の形なり性格は、大字ごとにそれぞれの特色を持つて存在しているように思われる。コウチが十数軒くらいの家によつて成立している場合には、コウチと隣組との性格（区分け）がはっきりしないし、生活の単位として、無理にこの中を分けて考えなくともよい場合もあるようである。また、もつと小さい、日常的な生活の中での、向う三軒

両隣的な性格のほうが強く出ている場合もあつて、いわば、かつての人工的な隣組を置く必要もない場合もあるようである。

第二次世界大戦中までは、各大字とも、隣組制度は時局柄きちんと行われていたようであるが、昭和二十年代後半になると、隣組はあつても、隣組長がいらない(大久保)とか、戦争中はあつたが現在はない(行沢)、隣組とはいわれないが、近隣の人たちが向う三軒両隣のに、相互扶助的な役割を果しているところもある(妙義・中里)。あるいは、隣組の組織がすっかりして、現在でも、近隣の相互扶助的な役割とか、区の下部機関として役割を果しているところもある(大牛・諸戸・菅原・大久保・上高田・下高田)。昭和十六年から隣組というようになったが、その前は五人組(五軒組)といつていた。隣組になつて、一つの組の戸数が多くなつた(岳)ということである。

三、契約が各地区においてさかんに行われていること。
契約についての報告は全地区にわたつていないが、その後の報告も含めてみると、各大字とか、ブラク(コウチ)単位に、二月に行われている。この席では、年間の事業計画とか、役員改選などを行い、会食を共にするムラの総会である。本県では、北毛から西毛にかけて広く行われていて、中毛から東毛にかけてみられるウタイゾメと比較される会合である。米と小豆を持ち寄せ、ムラの生活に関連あることを協議しながら、餅を搗いて食べ、あるいは申込の口数(米一升一口とする)に応じて分けて、各家へ持ち帰るといふ。なごやかな会合である。しかし、一面に、下高田本村の報告にもあるように、きびしいムラの生活規制の性格も持つていたのである。ここでは、ケイヤクの席上日常生活でのいろいろの取極めをしたり、「警察の一步手前まで」というきびしい生活規制も持つていたのである。他村でもこのような面を持つていたと考えられ、ケイヤクの自治的な性格をよく示しているといえよう。

四、その他

お精進・石尊ぎょう・ミチアエマツリなどが、ムラの行事として行われていることも、西毛における村落生活の一つの性格を示していることである。くわしくは、べつのところでも取上げているので説明は省略する。

珍しいところでは、相互扶助に関する習俗として、マワリブチの習俗をとりあげることが出来た。このことは、すでに、『横野村誌』(勢多郡赤城村)や、『甘楽町史』においてとりあげられ、その後、県史の調査によつて、県内に広く行われていた習俗であることが明らかにされている。それは、組内に生活困窮者がいる場合に、五人組の人たちが交代で食べ物(扶持)を与えて、その人を援助してやつたということである。

女性による天神講も、西毛地方の各地にみられることである。念仏組については、報告例が少なかつたが、かつてはもつと広く行われていたようである。

講組については、庚申講以外は、意外に報告が少なかつたし、内容がはつきりしなかつた。あるいは、この面での詳細な調査が必要であつたかも知れぬ。

へイエの生活について

イエの生活に関する資料は、量的にも、内容的にも少なかつた。ムラの生活と同様に、報告も断片的であり、まとまつた資料が得られなかつた。その後の補足調査資料をふくめてまとめたものである。その中で、やや特徴的と思われる事項をとりあげてみる。

一、家長と主婦の役割について

かつての家長と主婦についての、家庭内での役割とか地位についての、下高田の報告に注意したい。

イロリの座席のうち、家長(主人)の坐わるるるを、本町ではテイザシキとよんでいる。これは、亭座敷であろう。この座席は、他地区の場合と同様に一般的には東向きになっており、最上位の席であり、

他の者が無断で坐ることを許されなかった。かつての家長の地位を象徴しているともいえよう。

主婦については、オカタという言葉が聞かれたが、この言葉は、北毛から西毛にかけて聞くことが出来る。なお、利根郡新治村などでは、トリムスビのことをオカタといい、東毛地方では、トリムスビの座敷を、オカタザシキとよんでいる。このことは、ここでいうオカタ(主婦)とどのような関連があるか。まだはつきりしないことで、今後の課題である。

二、先祖祭祀が目立ったこと

このことも、本地区の一つの特徴と考えられる。先祖祭祀は、北毛から西毛地方にかけて特に目立つ習俗であるが、本地区においても、旧高田地区を中心に、先祖祭祀の形をとらえることが出来た。各一族ごとに、先祖様と称する石宮をまつり、一定の日を決めて、一族の者がそこへお参りするという形をとっている。これは、同祖観念を、一族結合の中心としてしていること、具体的なあらわれであるといえよう。このことと関連して、一族の結合について、本地区では、イツケとかイチマケという言葉がみられたが、それほどはつきりしなかった。報告例が少ないので、はつきりしないが、本地区では、一族については、イツケというより、イチマケといういい方をしてるように思われる。

三、家族の私財について

このことについては、キュウデという言葉に注意したい。この言葉は、本県では、吾妻郡南部から碓氷郡・甘楽郡・多野郡にかけて、いづれも、長野県よりの地区に、南北にわたってみられる。この分布に東接する地域では、コデという言葉があり、ほとんど同じ意味に使われている。同行変化の言葉とも考えられるが、言葉の分布の上からも注意したい。

ほかに、フンドシゼニとネズミヒキという言葉も報告されている。

この言葉は、家族の私財の性格をあらわす言葉として注意しておきたい。

四、その他

親類のことをあらわす言葉として、オヤコというのがある。これも、県内各地から採集例が報告されている。この言葉は、親子という場合とは、アクセントを変えて発音して区別している。この場合のオヤコは、平らに発音して、親子の場合のオにアクセントを置くのとは、区別している。

もう一つ、注意したい習慣がある。不幸な子供が生れると、その子は、その家の不幸を一身に引き受けてきたのだから、大事に育てなければならぬというのが、県下各地で聞くことのできることである。体が不自由のため、他に就職もせず、結婚もせずに、一生を生家で送るといふ不幸な人がいる。このような人がいると、世間では、あの家にはカネバコがいるといつて、うらやんだという。その本人にとつては大変お気の毒なことではあるが、家のために一所懸命働いてくれるので、身上があがるというのである。このようなことは全国的にみられることであつて、あるいは、古い信仰に根ざしていることであろうか。今後の課題としたい。(井田安雄)

一、ムラの生活

(一) ムラの組織

本項では、ムラの組織に関する資料をまとめた。内容としては、おもな大字の組織とムラ役の二項目を中心とした。

村境 ムラ(大字)の境には、特に目立った標識のようなものはない。大体、道路が境になっている。

各小学校(ブラク・コウチ)ごとに、境界の道の端に、境しめを立

てた。もとは、七月十八日に、竹を二本立てて、その間にしめを張った。そこへ、竹の皮に包んだお札（寒神のお札）をさげた。これを立てるのは、ブラクの神社の当番（宮番という）の人。厄病がよそから入って来ないようにということで立てた。七区では三カ所、九区では二カ所に立てた。（下高田）

菅原では、一月十四日の道祖神祭りのときに、尾崎・内越・下宿・中宿・上宿の五つのコウチの人たちが共同で一台中の屋台を出す。屋台には、道祖神の夫婦（村の人が紛する）が乗っている。祝いごとのあつた家を屋台がまわって行つたのち、この屋台をひいて、諸戸との村境まで行き、悪魔つばらいをしてきたという。自分のムラから、悪魔をよそムラへ追い払つたものという。悪魔を村境から外へ追い出したのである。（菅原）

ムラの組織 大字の中がいくつかのコウチに分れている。コウチの中がまたいくつかの隣組に分れている。役場の関係では、大体コウチを基準にして区に分け、そこに区長をおいている。隣組には隣組長（班長）がいる。

下高田の中は九つの区に分れ、九人の区長がいる。もとは区長代理がおかれていたが、現在はない。心要があれば、総代や隣保班長が区長の相談役をとめた。区長はコウチの推せんによる。（下高田）

菅原には下宿、中宿、上宿、打越（城下）、寺山、尾崎の六つのコウチがあり、各コウチに世話人が二名いた。世話人が部落の行事は中心でやってきた。

下宿、中宿、上宿には、それぞれ三つの隣保班がある。一つの隣保班は、五軒から七軒くらいで組織されている。（菅原）

上高田次の五つのコウチから成り立っている。

山下、川幡、茶屋、上十二、下十二

各コウチの中はいくつかの隣組に分かれている。隣組は家の並びで組んでいる。隣組には小当番がいる。（上高田）

下高田の村組織は次のようになっている。

一 四区 本村

五、六区 新光寺（明戸は五区）

七 区 千福寺・虻田

八 区 久原

九 区 三ツ屋

右のうち本村の組織

一区 諏訪（オクリ・クネ下）・東村

二区 宿・下宿・道場

三区 中西・前村

四区 天神下・西村

五区の村組織

明戸組 二〇戸

東 一〇戸

西 一〇戸

団地 一四戸

八幡組 一七戸

中組 九戸（下高田字新光寺）

← 組またはコウチという。 隣保班という。

八木連は、大久保（十六区）・上八木（十五区）・下八木連（十四区）の三つの地区に分れている。軒数は、大久保が二十八、上八木が三十三、下八木が二十である（昭和五十七年）。各地区の中が二組から四組の隣組に分れている。下八木の場合は、二十軒を二つの隣組に分けている。むかしは、上組・下組といったが、戸数が少なくなつたので一つにし、再び、戸数が増えたので、むかしと同じように、上と下の二組に分けている。隣組長は二年交代、順番制である。各区には、区長と区長代理（大きい区におく）が一名ずついる。区

これは隣組でもあり、ここから大世話が計八人（各組から一人）でる。また小世話も八人である。

長は、各区の推せんを経て、町役場から委嘱した。任期はともに二年。推せんは、各区（ブラク）のケイヤクの席で行う。

ほかに、神社に係属した当番がおかれている。各区とも二人ずつ。任期は一年である。

なお、ケイヤクとはべつに、必要に応じてヨリアイが開かれる。これは各区ごとに開かれ、区長が召集する。一戸一名ずつ出席。会場で鈴を鳴らして召集した。（八木連）

下高田の新光寺は、現行の町の行政区では、五、六区に分れている。各区には、区長と大世話がおかれているが、仕事の内容は違う。区長は町役場に係属する行政的な仕事を行い、大当番は昔からのムラの世話役的な仕事をしている。隣保班（六区の中は四班に分れている）の班長は小世話といひ各班一名ずつである。

たとえば、ケイヤクの座長、基本財産（山林）の下刈り、手入れの世話、稲荷様の祭典の世話（小世話と一緒に）などをしている。

大世話・小世話ともに任期は一年。大世話は三月に投票によって選んでいる。小世話は輪番制である。

隣保班（隣組）は家の並びによって十二、三軒ぐらいつで組んでいる。分家に出た場合には、出た先の組に加入する。

なお、葬式組は、六区の中は三つに分れていて、隣保班の数より少ない。したがって、一組あたりの軒数は隣保班より多い。これは不幸の場合に人手を要するためという。葬式組の仕事の分担は、例えばA組に不幸があればB組がニワバを受持ち、C組はハカバ（アナバ）を受持つようになっていて。ツゲはB・C組の人の中から二人ずつ組んで頼んだ。A組の人は帳場を担当した。（下高田字新光寺）

中里では五十戸（昭和五十七年）。この中が次のように分れている。東…十四戸 中…十五戸 上…二十戸

この三つの組から二名ずつの炊事当番が出る。この順番は、家並できまつているので、二月のハルカイのときに確認することになってい

る。炊事当番の仕事は、ハルカイとか、阿弥陀様のお十夜（十月十五日の秋祭りの翌日）のときのお勝手仕事（茶をわかしたり、出したりする。お十夜のときは、大世話の家で餅つきの手伝い）をする。一年交代である。

右の三つの組から、一名ずつ小世話人が選ばれる。この役も一年交代。大世話人の補助役。輪番制です。

小世話人の上に、一名の大世話人が選ばれる。これも二月のハルカイのときに選ぶ。仕事は、ハルカイ、村祭り、お十夜、道普請（道普請は、最近は道路愛護の立場から、町役場から区長に対して連絡がくるようになっていて）などの、古くからのムラ（大字）の伝統的な仕事の主宰者となる。

なお、大世話・小世話・炊事当番の三者をまとめて、祭世話人といっている。これらの役員の交代は、二月十一日のハルカイのとき、最近はこの頃の雪の日に行くことになっている。

行政的な面（町役場とのつながり）での役員としては、区長と区長代理（各一名）がいる。隣組については、むかしからの組織はあるが、隣組長のような形はない（中里）

行沢は戸数が約六十戸。上・中・下・大竹の四つのコウチから成り立っている。上と下のコウチは、中がそれぞれ二つの組に分れている。中と大竹はそれぞれ一つの組になっている。

各コウチには、区長と連絡員が各一名ずついる。区長の任期は二年。ここには、大世話とか小世話という役はない。隣組（という名称）は、昭和十年代（戦争中）まではあったが、その後はない。

ほかに、祭り世話人が四名いる。任期は一年である。

ケイヤクは、一カ所で行っている。時期は二月十一日。会場は、もとは大きな家を借りていた。各コウチごとに、順番に四軒一組にして宿の候補をきめ、四軒のうちで話し合って、その年の宿とした。つぎの年はべつのコウチで同様の形で宿をきめていた。公会堂が出来てか

らは、公会堂を会場としている。

出席者は各戸一名ずつ。十数年前までは、餅米と小豆を持ち寄せて、餅を搗いて分けたり、食べたりした。餅は一口一升、小豆はその四分の一ずつとした。申込みは何口でもよかった。搗いた餅を、口数に応じて分配した。最近では、会費を徴収して、簡単な宴会にしている。

ケイヤクの席では、一年中のムラ(大字)の事業計画とか、役員の変更などを行なった。(行沢)

岳と大牛は、本来はべつべつの大字であったが、岳が十二戸、大牛が四十二戸(昭和五十七年)という小集落であるので、この両者を合せて、あらためて、大牛西と大牛東の二区に分けている。集落は、東西に長く発達しているので、東西に二分して、それぞれに区長を置いている。大牛西が岳の六戸と大牛の二十三戸とを合わせており(計二十九戸)、大牛東は、岳の六戸と大牛の十九戸(計二十五戸)によって成立している。農事組合や養蚕組合も、行政区に従って大牛西と大牛東とを名乗っている。

役員としては、西に区長一名、区長代理一名、協力員三名が、東には、区長一名、区長代理一名、協力員二名がそれぞれおかれている。

隣組は西東ともに三組置かれているが、特に隣組長は置いていない。組内で話し合つて物事を処理している。区長は隣組単位の推せんにより選び、協力員は冠婚葬祭にあつては、隣組中心に行つては、人数の不足の場合には、隣の組から応援をたのむことになっている。当事者の組を本組といひ、手伝の組のことは、隣組といつては、香典とか見舞の額などは、春のケイヤクの折りに相談してきめては、

る。

なお、ここは妙義神社の氏子で、祭世話人は一年交代で四名ずつ、東から順に家の並びによつて組んでいる。(大牛・岳)

日影と日向 日影集落は諸戸川の南にあり、妙義山に近く現在二十三戸。もとは川北の日向に出て仕事を一緒にしていたこともあつた。

日向集落は移住者が多く四十七戸あり、日向の者が日影の地名を呼んだという。日影は全部農家でまとまりがいい。(諸戸字日影)

日向の構成 上組十八戸、下組十二、中組十二、南組十三、計五十五戸である。(諸戸字日向)

上野東叡山領 日影・日向・岳などは江戸時代に東叡山領だったので、他と違って一枚上で年貢は軽く、お伝馬はなかった。日影は十三軒にみな倉があり、百姓が羽織を着て遊んでいたもので、貧乏したという。(諸戸字日影)

岳 岳と書くムラは、旧幕時代東叡山寛永寺の寺領だった。年貢は寛永寺に納めたので、安中藩のオテンマからまぬかれた。(妙義)

コウチ 人家のあるところを〇〇コウチと呼んだ。北山の菅原は、大字菅原の飛地であつた。(中里字北山菅原)

小字のことを、コウチという。大字の中がいくつかのコウチに分れている。コウチの中はさらにいくつかの隣組に分れている。コウチの境は、人家がいくらかあいている程度になっている。コウチの中には、いくつかの苗字の家が含まれている。(下高田)

隣組 五、六軒から十軒くらいで組んでいる。家のならびでは、いくらかとんでいる場合もある。(下高田)

隣組(隣保班) は、家の並びによつて組んでいる。軒数は十二、三軒くらい。ここに小世話がおかれて、組の世話をしている。(下高田字新光寺)

イチドナリ 家の一番近い、すぐ隣りの家のこと。他人様でもなにか出来事があつた場合に、一番先にとんで行つたり、来てもらつたりした。イチドナリから組内の人に話してもらつた。

この隣同士の家は、おたがいに助け合つた(世話しあう)。振舞のときには、親類づきあいをしている。(下高田)

イチドナリとは、すぐ隣の家のことである。組がちがつている場合でも、出来事があつた場合には話す。手伝にもきてくれる。(上高田)

イチドナリとは、すぐ隣の家のこと。たとえ組が違っても、出来事があったときに相談した。また手伝にも来てくれた。(上高田)
イチドナリとはいちばん近い隣家のことをいう。上下二軒とか左右二軒など。むこう三軒両隣りともいう。

なにごとかあったときには、一番先にこの家に相談をかける。たとえ、親戚でなくとも、同じ隣組でなくとも相談する。

イチドナリは、振舞のときには皆さんよびにする。(下高田)

町村合併 妙義町と高田村は、合併前まではあまり交流がなかったようだ。妙義町は松井田の方に出かけたし、こちらは富岡に出た。合併後、神社のお札を配るのに、高田の人は妙義神社のお札はいらないというし、妙義の人は、貫前神社のお札はいらないという。そこで今でもこちらで妙義のお札を受けている人はいないだろう。(下高田字本村)

村役 区長、区長代理、世話人の役員がいる。世話人は上・中・下の各組に一名ずつである。

三組あるので葬式の場合は、葬式のある組、ニアバをする組、穴掘りをする組に分れる。(古立)

村役としては、区長、区長代理(各一人)、連絡員(四人、班長を兼ねる)のほかに、衛生委員(委員長一人、委員二人)、農事実行組合(東・西)、養蚕実行組合などがあり、堰世話人、祭世話人、寺世話人などの役もある。毎年二月十一日のケイヤクに行沢二十七戸(現在五十八戸)が寄り合って、その年の村役を決める(行沢)

村役交代 区長、農事組合長、養蚕部長、衛生部長などの村役は、二月八日の春祈禱の日にきめるが、当日引継ぎをするのは年番だけで、あとの村の役は四月一日から交代して仕事をする。(八木連字大久保)

年番 区長の下に二人の年番がいる。二月八日の春祈禱の日に、昔からある帳面をみて順番にあたる二人の組に年番をあてる。あつた人は翌日から年番をするので、その席で前に出て、前の人と向き合っ

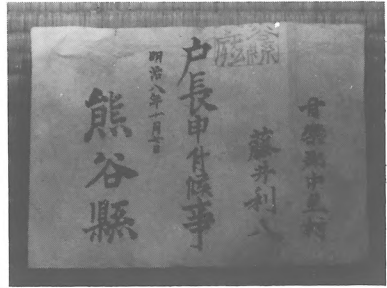
て座り、引継ぎをする。昔からの書類が入っている行李があつて、これの引渡しをする。年番は、区長のきめたことを村中に伝えたり、共同作業の人数割りをしたりする。また春三月十五日、秋十月十五日の足日神社の祭典には村を代表して神社へ行く。近年は二人で相談してどちらか一人ずつ行くことになっている。(八木連字大久保)

大当番(大世話)、小当番(小世話) 川幡と下高田の山下が一緒になつて(川幡の人は山下から移った人なので行事も一緒にやる)大当番が四人いる。普通区長を経験した者となる。小当番は隣組に一人ずつ、(山下は三十五戸で三人)十区、十一区で五人いる。一年交代の年番で、隣から隣と順番でやる。これらは役場の行政機関につながるものではなく、部落内のことに関わる役である。村から話があると区長は大世話に相談する。春祈禱で選挙されるもので、道普請や堰のことなど、部落共通の事には命令を出したり先立ってやる。監査は二人、これも川幡と山下が一緒(村仕事は両部落一緒にやる)で、投票で選んだ。(上高田)

部落全体のこと、神社の祭りや芝居をぶつとき、道普請などは大世話の許しを得てやる。大世話は年輩で、事が起きたときそれを解決できるような人となる。予め口頭で部落の人の了解を得ておいて、ケイヤクのとき推薦の形をとる。順ぐりにすることもあるが何れにしてもこの役は無報酬の名誉職である。部落の連絡機関で、区長が行政関係のことをするのに対し、大世話人は総代で、連絡し合うこともあるが主に部落のみのことをする。(下高田)

区長の下に総代(七区一人、九区二人)がいるが、これは行政関係はない。その下に大世話(七区、九区に二人ずつ)小世話がいる。総代はケイヤクなどを召集、石尊行などは大世話が主体となり、祭りや獅子をやるときは小世話に相談し中心になつてもらう。(下高田)

大世話は契約で承認される。本村全体のことを考えるが、小世話はほとんど順番によつて出される隣組班長に相当するものである。八人



明治8年の戸長辞令 (中里)
(撮影 阿部 孝)

の大世話の中から互選で大世話長を決める。(下高田字本村)

戸長さん 明治のはじめに竹田福松という戸長がいた。大変頭のよい人で、小幡の殿様のところへ手紙がきて読めないときは呼ばれて仮名をふってきた。殿様は夜帰るのに大変だろうといいい馬の鞍をくれた。

このじいさんは年中遊び用が忙がしく、ワラジをはくことがほと

んどなく、最後までチョンマゲを結っていた。(菅原)

寺世話人 随応寺(天台宗)、陽雲寺(禪宗)の檀家があり、二派に分かれているが、以前は東光寺があつて墓は一か所だった。統轄する寺世話人が二人いる。(行沢)

祭り世話人 神社の氏子総代(三人)の下にいて、祭の世話をやく。以前は二人だったが、今は四人いる。(行沢)

堰世話人 竹松から水をあげる行沢堰の世話をする人が三人から六人くらいいる。毎年田の水をかける時に、話をして水あげをする。(行沢)

七人衆 村に七人衆という世話人がいた。村の中から推せんによつて選ばれる。大体は長老格の者が推せんされ顔役となる。仕事は家庭争議の仲裁、田畑山林の境界争いの仲裁、共同墓地の世話などであった。(妙義)

区費 区費として特別に徴収しないで、納税報奨金をあてている区もある(六、七、九区)。区費の徴収の基準としては、資産割りと平等割りの二本立てとしている。資産割りは簡単に三段階くらいにしている。

集金はケイヤクのとき、勘定(清算)はもとは十二月、今はケイヤクのとき、これをカンジヨウウといっている。(下高田)

むかしは、必要に応じて区長が触れて、区費を徴収したという。もとは共有山があつてその木を切つて売つたり、寄付金をあてたりした。今から二十年ほど前(昭和三十年代)からは、納税組合の報酬金が役場から千分の三還付されてくるので、これを区費にあてている。(八木連)

(二) ムラの機能

本項では、ムラの生活の中で、ムラの働きに関する資料をまとめてみた。内容としては、ムラの共有林・共同水車・共同作業(オテンマ)・ケイヤク・お精進などである。これらは、ムラの人たちの日常生活に大きな役割を果してきた諸習俗である。

ヨリアイ山 ムラの共有山のこと。明戸に山林一町歩くらい、原に三反余、赤坂にもある。これは本村全部のものだ。本村に住居すれば自動的に権利がつくし、ここから出れば権利がなくなる。そのため、昔はよそから来た人には差別があつて、新しく住居した人は、神社に寄附しろなどといわれたものだ。

利益は大世話が管理している。たいした利益もないが、ふだんはこの公会堂の維持にもつかった。もつともこの公会堂を建てる時はヨリアイ山を伐つて建てたのである。

刈り払い七月の第何日曜かに、一戸一名かならず出て行う。(下高田字本村)

共有山は、中ウネに雑木山が一反くらい、御嶽山に雑木山が一・三反、稲荷様の山が一・二、三畝で同じく雑木山である。雑木だから、これを伐つて椎茸の樽木などに売つて、神社の修理費や橋代などにあてた。ケイヤクでそういうことは決める。(下高田字新光寺)

共有田 大正八年頃まで中里には、共有田があり、個人に貸してお

いた。電気を引くため負担金を出すために売った。(中里)

共同水車 共同水車は、大体コウチごとにあつた。そのコウチの人だけが利用した。

水車を利用する順番はきまつていた。コグチまわりになつていた。番になつても、搗くものがなければ順番を譲つた。忙しい家では、人の番を借りて、米を搗いたり、粉をひいたりした。使用する権利は、朝の六、七時ごろから一昼夜(二十四時間)であつた。それには仲間の名前が記されていた。他所から移住してきた者は権利がなかつた。必要があれば権利をもつてゐる人の了解を得て借りた場合もあつた。

水車の休日とはくになかつた。

千福寺や三ツ屋の場合、米搗きの白二斗ばりが四つと、粉ひきの白一つあつた。

水車を使用している間、とくに番はしてゐなかつた。粉ひきのときには女性の番が多かつた。(下高田)

共同の膳椀 振舞の膳椀は各コウチごとにあつた。祝儀・不祝儀のときに利用した。千福寺と三ツ屋には、二十人分の膳椀が二組ある。祝儀用と不祝儀用と二色ある。これを利用した者からは使用料をとつて、維持費にあてた。(下高田)

オテンマ 村の勤勞奉仕のことをオテンマといつた。一軒一人出た。男女は問わなかつた。昔は出不足をとつたことがある。今はとらない。税の奨励金を一括して下十二の収人にして、ムラの運営資金にあててゐる。オテンマの作業として、道普請を十月の祭の前にやつた。むかしは村全体でやつたが、今は農家の者だけがやつてゐる。また七月十一日頃、河川の清掃をやる。(上高田字下十二)

オヤクまたはオテンマ。これで行うものに共有山の管理・堰普請(これは関係者だけ)火事のあとの灰よせなどあり、こういうところに欠席するとデブソクを出す。たいてい千円くらいであつた。(下高田字新光寺)

ムラの共同作業のことをオテンマという。これは無料奉仕のことである。定期のオテンマには、道路普請がある。これは春と秋で、一戸一人ずつ出た。男女の区別をつけず、誰が出てもよかつた。むかしは、オテンマに出ないと過怠金(出不足)をとつたという。

このほかに河川の修理があつた。これは大降りのあと臨時にしたことである。むかしは橋が流されると、橋木をみつげに川下までさがしに行つた。木にはブラクの名がほりつけてあつた。高田川の川下までコウチの世話人がみつげに行つて、そのあと荷車をひいてひきあげに行つた。橋の修理のことを橋普請といつた。(下高田)

現在では道路普請を春と秋の二回、オテンマでやつてゐる。最近、勤め人が増えてきて、出る人が少ない傾向になつてゐるので、出不足金をとつてゐる。男の出る仕事に女が出た場合には、半分に見なされる。男一日千円位だが、女が出た場合は、差額の五百円をもらう。しかし、女世帯の場合はとらない。以前は妙義神社の境内の清掃や山林の下刈などもオテンマ仕事でやつたが、四、五年前からやめてゐる。また「川幡橋」の橋普請も、大正頃までつづけていた。むかしこの橋は大水にたびたび流されたことがある。(上高田字上十二)

道普請 春は四月中旬、大世話が司つてやつたが、今は役場でやる。秋は十月十日ごろ。役場でやる。昔は、各小部落ごとにとどの範囲かきめて、部落ごとに行つた。フソク金はとる場合ととらない場合とある。

このような仕事をオヤク・オテンマといつた。昔のオテンマ(伝馬)には、ここから碓氷峠のゴカザカまでいつたという。(下高田字本村)春は三月十五日の祭りの前にする。ほぼ三月一日ごろが時期で、秋は九月十一日ごろする。昔からきめられてゐる部落境までの間の道路の手入れをするもので、一戸一人ずつ出る。下八木連では母子家庭は免除してゐる。出不足金をとつたこともあり、これで飲んだこともあつた。今は春、秋とも道路愛護の日にしてゐる。(八木連)

道ごせえはコウチごとに行つてゐる。名戸一人ずつ出る。むかしは

オテンマといった。

区長が中心になって行っている。時期は、四月の道路愛護の日（四月十日前後の日曜日をあてている）。これには、出るのがあたりまえで、出ない場合には、出不足金をとるところ（山下）もある。出られない場合には、区長のところへ行って断ってくる。

男女いづれが出てよかつた。特に差をつけることはしない。（上高田）

堰普請 高田川の堰普請は、水田耕作者のなかから堰世話人が出て、その人を中心として行つた。（下高田字本村）

ムラの休日 ムラの定期の休日としては、農休みがある。これは、七月十八・十九・二十日の三日間である。他に秋まつり、七夕などがある。（下高田）

農休み 七月十八・十九・二十日の三日間である（普通は、この近くの日曜日をふくめる）。

最初の日は、かいこがあがつた祝いというので、コアゲといって祝う。こわめし（小豆を入れる）をつくって祝っている。

二日目には、ふかしまんじゅうかぼたもちをつくつた。三日目が石尊ぎょうで、米の飯を食べる。（上高田字山下・川幡）

農休みは、最近はこの農業委員会できめて大字に連絡し、全町一斉に行っている。

雨つぶり祝い 雨乞いをしたところ、雨が降ったときには、雨つぶり祝いといって、ムラ中で仕事は休んだ。（上高田字山下・川幡）

ケイヤク 以前は二月初旬の雨雪の日（現在は二月初めの日曜日）に行つた。大・小当番が各戸五合ずつ持寄つた米で餅をついた。五合ずつで不足と思う場合は、内証で増量してついたことがある。川幡は山下（約四十戸）と一緒にするので、ケイヤクが終つて川幡に帰つてから持寄つて搗くか会食した。（上高田）

以前は二月四日であつたが、今は二月の第一日曜日にやる。（下高田）

ケイヤクは山下と川幡で合同で行っている。

もとは二月の節分の翌日に行つていたが、昨年（昭和五十七年）から、節分あけの日曜日に行うようになった。会場は大きい家々を借りた。（現在五十五戸）。朝から一戸一名ずつ集まる。くじを引いて、隣組ごとの席をきめた。

この席でブラクに関係する一年間の規約をきめた。三年ごとに役員改選をする。前年度の事業報告、新年度の行事予定、会計報告、予算審議、日常のいろいろな問題（馬入をつくれ、出水箇所があるから修復せよなど）などについて協議した。なお、川幡については、共有林があるので、その関係のことをべつに協議する。

契約のときには、当番の隣組の人たちが世話をする。三日間くらいかかつた。一日目に米（二合三合ずつ）と小豆を集めて歩いた。二日目にあんこ煮。三日目が当日でもちをついた。一合もちをついた。このもちを食べたり、家へ持ち帰つたりした（上高田字山下・川幡）

ケイヤクは春祈禱ともいう。コウチごとに開く。二月の節分のつぐ日に開くときまつている。出席者は各家の主人（二戸一名）。宿は個人の家をまわり番にしているが、とくに祝いごとのあつた家を頼んだ。

節分の日に、小世話の者が米をあつめて歩いた。米の量はコウチによつてちがう。久原の場合にもち米五合ずつ、千福寺の場合にもち米一升ずつであつた（もちをついて食べた残りを家へもち帰つた）。

ケイヤクの席では、役員改選やコウチ内のことについてのとりきめをしたり（他人の山をあらさない、コサガリの日時など）、問題事項（桑畑の境目をたてどおしにしないなど）について解決策を相談したりした。注意事項があれば、区長なり総代が当事者に注意した。

雨でも降れば、宿をかえて、二番ケイヤクをした。このときは、簡単なご馳走であつた。ふつう、行事は一日で終る。（下高田）

ケイヤク（契約）は昔は節分のつぐ日だったが、だんだんその後の雨、雪の降つた日などでするようになった。公会堂ができる前までは、

嫁をもらつた家とか、新築した家をヤドにした。一軒一人ずつ出ればよい。餅をついたが、その材料は小世話が集めた。それを若い衆がついた。鮭をずたずたに切つてアラ汁もつくつた。昔は、本村だけで二つに分かれて契約をやつた。公会堂から上は三、四区、下は一、二区で、二場所であるのでめんどうなこともあつた。各組から一人、一場所ので四人ずつ候補者を立ててそこで承認を得ても、他の場所の承認を受けなければならぬから、それぞれから使者がたつて、自場所からの候補者の承認を他場所の者にもしてもらわねばならなかつた。

契約でのだいじなことは会議であつた。村には規約があつた。例えば桑のタテドオシをした場合も、隣接の作物の邪魔にならないようになど。会議ではそうした場合桑をきれなどとみんなという。昔は、契約の際、警察の一步手前までくらい詮議した。人の物を盗つたとか盗らないなどと糾明した。上の地区の契約で行うと、下の地区契約でも行つた。

契約でのだいじなことは、共有地の管理があつたが、これは大世話が行つた。決算報告やとくにその年度の方針、ことしは歌舞伎や競馬を行うかどうかなど、だいじなことがここで決つた。

今は公会堂で、上・下いっしょになつて行つた。酒は昔から飲んだが、ほとんど寄附されたものである。(下高田字本村)

ケイヤクはもとは二月の初午、最近は三月三十日ころ行つた。ここでは村役の選出が行われる。村役人には大世話がある。大世話は五区の小コウチから一人ずつ計四人、六区から三人合計七人、任期三年で、七人のうち年番が三人ずついる。小世話は、各コウチから出るもので、任期一年である。

なおほかにケイヤクの時は、年度の経過報告、会計報告、新しい年度の計画(防火用水をどうするか、土木関係、カーブミラー、神社関係のこと)など何でも話しあわれる。

その日には、餅米三合ずつ持ちよりで餅をつく。小豆は一合くらい。小世話が集める。ヤドは順番であるが、大きい家でないといふ具合が悪い。餅は小世話がヤドでつく。一軒前に餅を分け、食べながら会議をする。餅は前日についておき、当日は朝から一日かかる。規約はあつたが、読んだりすることはなかつた。会議では、冠婚葬祭のことはここできめる。最近の新生活運動は実施していないで、ケイヤクで決めたことをやっている。ほかにごみを出すのはどこにするかなどの細かいこともここできめる。(下高田字新光寺)

ケイヤクは、二月八日に行つてゐる。以前は二月八日前の、雪の降つた日に行ふことになつてゐた。また以前は、宿はまわり番で、大久保全体の家が、まわりもちをした。現在は公会堂でやつてゐる。村の係をきめたり、ムラ仕事の「出不足」の精算をしたりする。むかしは餅やケンチン汁を作つて、食べ合つた。(八木連字大久保)

春祈禱 ケイヤクともいふ。もとは、節分の翌日、現在は、節分の近くの日曜日に行ふ。

宿は、もとは当番の家、現在は飼育所である。山下・川幡の人たちが参加している。もとは、ムラに共有地があつて、その土地を貸して小作料をとつてゐた。小作米が一俵半ほどあつた。それをもとにして餅をついて分けた。戦後は、もち米を集めた。一口六合、あずきは三合。番にあつた者が袋を持って、各戸をまわつて集めた。最近金は集めてゐる。

ケイヤクの餅は大きかつた。一合餅はゆつくりあつた。

宿にあつまつて、一年中の約束事をきめたり、共有山の会計報告などを話し合つた。具体的にいへば、道こしらえ、畑のまわりの桑をたてどおしにするな、こさぎりのこと、共有山の草刈り、堰普請のことなどを話題にした。(上高田)

ハルカイ 村中で集つてハルカイ又はケイヤクといふ会合を開く。この日には一口五合の糯米を出し合つて餅をついた。あんを入れた餅

を作った。

まつり世話人の交代を行った。大体二月十一日頃だった。(中里)

イイツギ 緊急の時、たとえば突発事故とか、火事、災難のような時とか、道こしらえとかのかんたんなことを急いで伝え合うときに利用する。順序がきまつていて、昔から今もある。区長からの字まわりで、回らん板に書いてある名前の順と同じ順である。イイツギは、難しい中身のときなどはまちがいやすいが、かんたんなことは早く伝えられる。(上高田)

フレゴトは、大当番で決めて小当番に告げてやる。イイツギでやった。小当番は大当番の小使役のようなものであった。(上高田)

高田には定使いという役はない。隣り組の班長が組の中をふれて歩く。二年交代だから誰でも班長をやるわけである。(八木連)

ヨセ太鼓 寄合のとき区長、世話人などその寄合の中心になる人がたたいた。(下高田)

ムラの会議 ムラの会議のことは、よりあい(寄合)とか集会といった。

集会時間の合図としては、太鼓をはいたり、鈴を振ったりした。召集者が時間前に合図した。

会議の前ぶれはいいつぎだった。

会場は区長宅とか総代の家などであったが、現在は公会堂で開いている。(下高田)

お精進 コウチごととやるが、新光寺はいっしやになつてやる。百姓仕事が一番落してからで、七月十七日から十九日が農休みであるが、その中日ごろ、米三合くらいを持ちよせて、ヤドで五目飯などつくつて食べた。肉など買つたり、缶詰めの飯やサンマ飯もよくした。

これと石尊行は別であるが、ほとんど同様にした。ただ、竹にしめをきつてつけて川へ持っていった。それをボンデンといった。戦争中じゃんだ。(下高田字新光寺)

お精進(ミチアエ祭り)は七月二十日ごろ、二区(宿・下宿・道場)がいっしよになつて行う。昔は、米を集めて混ぜ飯をした。酒飲んで、食いくらべのようなこともした。三合集めた米を残らず食べた。現在はこれを料理屋に行つてやる。

神社の方で行うミチアエ祭りはこの一〜二日前である。竹を伐つてきてしめをつくり、道路に下げる。ヒトガタが神社からくる。チガヤを束ねたものといっしよに各戸へわたす。家々では、チガヤとヒトガタでからだを清めて高田川へ流す。(下高田字本村)

ミチアエマツリ 土用に行う。竹に縄としめをつけて、それに神社から来た神札をつけて道に立てる。新光寺では、富岡境の明戸、中野谷境のコロナザワ(衣沢)、六区境の三ツ屋の三か所に立てる。悪い病気が入らないように。

またこの日、神社からチガヤ一本の上部を切つたものとお札がくるので、これで身体をこすつて高田川に流す。これらの世話は大世話・年番がする。(下高田字新光寺)

石尊ぎよう 区単位に行われる行事。もとは七月二十日に行われていたが、五十七年から、この近くの日曜日に行うことになった。

隣組の人が寄つて、おしめをつくつたり、竹を切つてきたりして準備をする。竹にしめをはつて、それを、川の中(浅瀬)に立てたり、ムラ境(この場所は毎年きまつている)に立てたりした。山下・川幡で一カ所に立てる。

ブラク(区)の人が裸になつて川へ入つて、しめを張つた竹に、「大山石尊大権現、大さんげ、大さんげ」といいながら、おしめに下から水をかけた。

この行事を、道饗祭りと呼んでいる。

この行事の目的は、よそから悪い病気が入つて来ないように、清めるためという。行事のあと、現在では公会堂で、もとは小当番の家で会食をしてい

る。費用等はもちよせ。米の飯を食べる。(上高田字山下・川幡)

念仏組 念仏組はブラクごとにあつた。

宿をきめて念仏をした。女性の先輩の人たちが参加した。十六日念仏といって、月の十六日に念仏をした。

中心になる人のことをホウガンサンといった。それは一名で他にツキホウガンが一名いた。

葬式のときには、この人たちが送り念仏をした。鉦をたたきながら「ナムアミダ」といっていた。(下高田)

念仏組は下高田本村のうちオクリ六軒、道場九軒、宿八軒、下宿一〇軒で構成している。葬式ができるとこの四組が集まって、その都度相談して、ツゲ、穴掘り、ニワバ、葬儀の四班に分かれて仕事をする。ほかの部落でもかつてそうだったが、今はそれぞれの隣り組ごとにするようになってしまった。(下高田字本村)

村八分 言葉としては聞いている。ムラの中でおつきあひしないことで、仲間はずれとか、仲間つばずれという。しかし、この具体例はない。(下高田)

(三) ムラの集団

本項では、ムラの集団関係の資料をまとめた。調査が不十分であったが、若い衆の組織と、請の組織に関する資料をとりあげた。青年会の組織として、上高田の交友会のように、地元ごとの組織があつて、それぞれユニークな活動を行い、自己修養とともに、地域社会への貢献も大きかった。

若い衆 よく夜あそびに行った。丹生、一の宮、馬山などへ行った。そういうところに先輩につれて行かれると、向うの若い衆にあいさつしたし、先輩は後輩を紹介したりした。向うの店などに寄っていると、向うの娘が出てきたり、また若い衆が来る。若い衆は、自村の娘の家などに案内していっしょにてんぶらをご馳走になったり、蚕あげを手

伝ってきたりした。そうして好きあつた娘に結婚の申しこみして、親が承知しなくても、ワケエシがひきうけて結婚させる場合もあつた。

(下高田字新光寺)

青年会 新光寺の青年会を農友会といった。小学校が終つたところ



青年会が夜番に使用した。ムラにも使われた。(下十二)

(撮影 金子緯一郎)

で四月入会し、二十歳まで会員であつた。事業として桑原うない、大桁山の下刈り、草刈りなどを請け負つた。冬には寒いこで柔剣道、

夏は、八幡様の下に土俵ついて相撲をやつた。お盆休みなどに行つた。誤楽としては、山登りに稲舎、榛名、浅間山などに登つた。また映画を富岡に見に行つた。これをソウケン(総見)といった。結婚式などとの関係はなかつた。(下高田字新光寺)

昔、クラブとか貯蓄会、勤儉貯蓄会などといった青年会があり、積み立てをして三〇円くらいたまると関西旅行などしたことがあつた。ワカシガシラなど知らない。(下高田字本村)

交友会 山下と川幡は一緒に若衆は三十人位いた。高等二年を卒えてから三十歳までの間入つている。入会は四月八日、特別の挨拶はなく、よろしくお願ひしますという程度である。退会は三月三十日での日次の会長(年輩者で三十歳の人が一交代で就任する)を選ぶ。総会は一月二十日の午前中、このとき一人二貫目の乾菓をもつてきて、

午後はマブシを織つて売つた。町の半植で評判がよかつた。また会として村の基本財産二反歩借りて耕作し、桑を売つていた。金銭は入営者の旗代、小作料、花見の酒代に用いた。畑の肥料は堆肥をビクに二つ即ち一駄、堆肥のない人は糞を一駄(六束)を四月中旬に供出した。着物に徒歩で一泊の伊香保旅行もやつた。朝八時頃村を出て、松井田

後閑く三の倉く榛名神社く榛名湖く旅館には午後三時頃到着して一泊した。この交友会は昭和十九年か二十年頃解散した。十二では青年団といつていた。(上高田)

講 下高田本村の講についてみると、次のとおりである。

古峯講 なし。

上岡の観音講 馬持ちが二人ずつ代参。

下仁田の山際稻荷講 あった。

黒滝山の講 あった。

伊勢講 知らない。

御嶽講 あった。

二十二夜講 なし。

子安講 なし。

十九夜講 なし。(下高田字本村)

観音講は馬を所有している人たちの講だった。

不動講は代参が行った。交代で行き十年間で一回りするようになっていた。

天神講は女衆が行っていた。現在は東組だけが行っている。各組毎に行なった。餅をついて食べる程度であった。(中里)

伊勢講 お伊勢参りに歩いて行った頃は田の端などにオカリヤを造ったという。二人で行くときは二戸、三人で行くときは三戸つくったという。(上高田)

上岡観音講 十五年程前まで農家では馬を飼っており、馬頭観音様を信仰していた。上岡には二人の代参が詣り、お札や絵馬を受けてくと、その代金と旅費を頭割りにした。(上高田)

庚申講 昔の五人組でやった。道場では、五人組に十一屋を加えて六軒でやった。終戦後までやったが、その後止んでしまった。春は三月ごろ、秋は十月中の申の日をやった。酒と豆腐は買ったが、あとはヤドで用意した。掛軸があった。火事があった場合はそのヤドで二回

やることになっていたが、十一屋のときちょうど火事があったので、やり直したことがある。(下高田字本村)

庚申講は下十二の中で三組くらいの講組があつて、別々にやっていた。八人の組で、年八回、全戸が一年一回の宿をして、庚申または申の日にやった。掛軸をかけて線香を立て、お膳立てをして供え、年長者が供えものをしたり、拝んだりした。掛軸を外さないうちに火事があるともう一回やり直しをしなければならず、次の申の日にやった。

夜は泊るのでふとんを背負って行ったものである。

料理は飯、およごし(皿)、煮しめ(おひら)、豆の煮たもの(つぼ)で、あぶらげを切らずに一枚ずつ煮たものをつけた。汁はとうふ汁で、酒はなく、魚は食べてはいけない。進めるものはつくりながら味見をしてはいけないので、別にとつておいて進めた。食事はこぼしてもいけないといわれ、最初の食事は腹いっぱい食わずに用意しておいて、次のオシイのとき、山盛りのものを食べた。翌朝はオマル(だんご)をつくって食べて解散になった。(上高田字十二)

庚申さまは、つんぼでめくらで人のいうことを聞かないいんごうな

神さまだという。お産があると食い口がふえるのできらくといわれるが、ご不幸はかまわないといつた。(八木連)

庚申マチを十月か十二月のカノエサルの日に行なう。輪番で宿に集まり、うどんなどを作つて一晩中飲み食ひした。この日にはどんなに大食をしても、アタルということはないと言われ、宿に泊つて、翌朝残りものをオジャにして食べた。庚申さまのものは残してはならないという。(妙義)

庚申待は、庚申組(ムラから難れたところに住む者も参加)がきま

っていて、お姿(掛軸)をまわして、輪番で宿をする。当番にあたって

いて、お産があるとか、遠くに火事があつて半鐘が鳴ると、やりなお

しをして二度する。庚申待をする日は、必ずしもカノエ・サルの日は

かぎらず、ヒノエ・ヒノトがつかない日ならいつでもよい。ミスノエ

のつく日がよい。ナマグサを食わないように、前の日にふれて歩いた。
(中里)

庚申様は百姓の神様である。ご飯・汁・ヨゴシ・煮豆等を供える。昔は魚を庚申様は嫌うというので供えなかったが、今は供える。(中里) 庚申待のとき魚は供えない。出産のあった家の者は出席できない。不幸はかまわない。庚申様は百姓の神様で、食い口の増えるのを嫌う。庚申待に白米のご飯を大きな茶碗に山盛りにして供える。その時、遠くで火事があつて、半鐘が鳴ると、すぐ下げて、やりなおしをする。輪番で宿をし、宿に泊りこんで、翌朝宿で小豆粥を作って食べた。庚申の日に外泊するのは、妻と寝ない為で、庚申さまは子供ができるのを嫌うからである。庚申待には米三合とお金を出し合つた。庚申様の掛軸をかけて、ごちそうを供え、外の庚申塔にも供えた。この日には互に強制して食い合う。食いきらぬと帰さぬと言つて、腹いっぱいごちそうを食べた。(古立)

庚申祭は正月の都合のよい日、米・麦を収穫したアガリの時期に、部落で米を三合ずつ順番制の宿に持寄り、掛図をかけて線香を立てて拝む。食事は宿の女衆が作る。昔はオシイをしながら泊りがけでやつたが、今は十時頃までで終りとする。参加者の男女は問わない。久原部落は四組あるが、どの組でも庚申様をやつていた。(下高田)

庚申待は十二月申の日にやる。年一回。庚申組ができていて、五人組で宿に集まる。宿で煮しめを作つて出す。米飯に豆腐汁で夕食を食べる。子供は先に呼んで食べさせて帰す。庚申様は仏なので魚は進ぜない。飯を三杯食べて、さらにオシイ(無理じい)をして食べさせた。道具は掛軸・お膳・お椀・竹箸などがあり、宿に回す。「話があつたら庚申待にしろ」といつて、一晩中夜明かしをして話をした。終らないうちに地震があるとやり直しするという。(諸戸字木戸・久保)

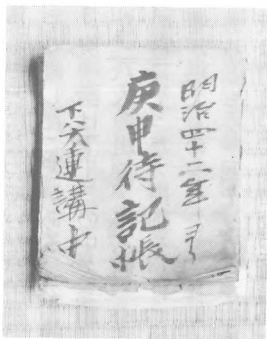
十一月の庚申の日に庚申待ちをした。十年位前までやつていた。宿はまわり順。男だけ参加した。もとは五人組の家単位でやつていたが、

戦時中に隣り組ができてから隣り組(九人〜十人)でやるようになった。

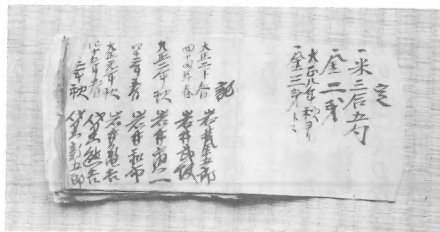
猿田彦の掛軸をさげ、大きい椀で大めしを食べ合つた。一晩中ぬむらないでいた。朝になつてからオカユを食べて解散した。掛軸はおがんでしまつたら、なるべく早く早くしまえといわれていた。地震と講との関係は知らない。

猿田彦はオサキを飼っているという。オサキは目に見えないが、ネズミのような小さいものだという。粉がなくなると持つてきてくれるので、猿田彦を信仰している。茶わんを箸でたたいてはいけないのは、こうすると、自分の家のオサキが逃げてしまふ。逃げるとき自分の家のものを、持つていってしまうからだといわれている。(上高田字上十二)

下八木連では、十三戸で春秋の庚申の日に庚申祭が行われている。宿は順番制で、米三合五勺、お金いくらかを負担した。明治四十二年からの記録があり、それによると、明治四十二年は金二銭、大正八年秋から金三銭、昭和十年秋十銭、三十年春五十円となり、現在は一切宿持ちということになっている。(昭和四十五年以來そうにきめた)。



庚申講の帳面 (下八木連)
(撮影 阪本英一)



庚申待記帳の内容 (下八木連)
(撮影 阪本英一)

昔は一升餅をついて、白ぬきにしてアンなしのお供えとし、これを切つてオゴフとして配つた。酒はないが魚は食べる。講の時は掛軸をかけ、お灯明を上げ、年長者が掛軸の前に坐り(上座)、上座の音頭で、二礼二拍手で拜礼したあと施主(宿の主人)の挨拶があつて会食した。掛軸には一人分のお膳をつくつて供え、先に供えて先に下げることにしていた。おこもりといつて宿の家に泊り、帰つてはいけない。その日女と交わるなどいい、子どもが始まるといけない日とされた。宿になる家で、庚申のある月に子どもが生まれると次の番の家が宿になつた。

上八木連では、今は庚申の日でなくも都合のいい時にやつている。道こしらえのあとにやることもある。(八木連)

庚申は百姓の神様で、米がさんざん食えるようにお祭りする。モヨリモヨリでやる。米を持ちより混ぜ飯などたべる。年一回くらいだったが、昔は年二〜三回はやつたらしい。(下高田字新光寺)

庚申講はコウチの中がいくつかの組に分れて行つていた。これを開く時期や形なども組によつて異なる。庚申様をまつるのは、春と秋のサルの日など。一戸一人ずつ男性が参加するのがふつう。米を三合ずつ(組によつて差がある)もちよせて会食した。仲間に入つていない家もあった。むかしから古い家が中心になつて行つていた。

庚申様は百姓の神様とされ、その晩にたくさん食べると、農作物がたくさんとれるといつた。当日は、五目飯とか、かんづめ飯などをして食べた。なお、庚申様にしんぜないうちに食べると、庚申様に髪をつるされるといわれている。(下高田)

庚申の夜伽 庚申さまは男だけでやる。精進料理で、夜は泊らず、十二時すぎまで夜伽をせず。夜食は出さない。(上高田字上十二)

天神講 若い娘たち同士で行つていた講である。その家に姑がいても嫁が参加した。二月二十四日に、宿になつた家に集まり、餅をついたり、ケンチン汁を作つたりして食べ合った。餅米は一口一升で、家

族の数によつて何口でも持ちよつた。餅は三本ぎねで、寄つた者がついた。また、宿の神棚にはオソナエ餅をふたかさね作つて供えた。餅ができる、それぞれの家族にとどけてから、また宿にもどり、みんなして食べ合った。宿は字日影、中、日向と順番につとめた。(八木連字大久保)

天神講は、女衆の会合で二月二十四日であつたが、今は二月十五日ごろ。部落ごとに順ぐりにヤドをきめて行ふ。

そのうち道場の例をあげる。天神講につく餅は、五合が一口で、いく口でもよい。小豆が二合。ヤドの両側の家が手伝いいつしになつてついで丸めたが、前日から集めたり、ほとぼしりの準備をしなければならぬ。当日の夕方ごろ集まる。野菜をたくさん入れたけんちん汁に豆腐を入れて、汁を吸いながらアンピン(五合で十五、六個できる)を食べる。子供もつれてくるから賑やかであつた。宿の家では、みかんやつけもの、酒なども出した。とくに余興などはなく、食べておしゃべりするだけだった。とくに天神様を祭ることもなかつた。「天神様にあげます。」などといつて、餅を神棚に供えることはあつたが、今は餅をつかない。二月十五日ごろの日曜日に、温泉などに行つてゆつくりしてくる。子供はつれて行かない。最近いつたところは水上、戸倉、近くでは一の宮、碓氷、妙義神社下の旅館などである。

子供の行事でこのように一緒に飲みくいする行事はない。(下高田字本村)

女の子の天神講は昔は二月二十五日。今は二月十五日。餅米は一口五合といつたが、大人数の家では六口三升くらいずつ出す。前日に集めた。コウチや組ごとに行つた。ヤドは順。子供まで集まる組もあるが、子供のない組もある。餅は口数に応じて分ける。たくさん頼んでおいて親類や嫁の生家に届ける家もある。嫁はそれを持って家に帰れるから、嫁の命のせんたくだともいつた。しかし、餅をつくことは、十四、五年前になくなつた。そしてよそへ出て遊んでくる。ことしは富岡の

大島鉱泉だったが、去年は東武のセンターであった。そうした会合でいろいろなことを話しあう。お産見舞のこと、病氣見舞のことその他祝儀、不祝儀のことなど。また天神講のために月千円ずつ積んでいる。出席は一戸一人ずつであるが、ほかに出席してもかまわない。(下高田字新光寺)

子供の天神講 二月二十五日に行ったが、昭和三十五、六年のころで終わった。学校から帰ってくるが、当番の家が集まった。餅ついてけんちん汁をした。(下高田字新光寺)

天神講は女人講である。二月二十四日一口一升の米を出し合い、餅をつけてたべ、残りは持帰る。宿は順番で、子供もごちそうになりにくる。(下高田)

天神講は子供たちの祭で、小学校の上級生がシン(中心)になって、母親たちが宿で五目飯や餅をついたり、赤飯をふかしてくれたこともある。子供たちは奉納天満宮と書いた旗を朝早くに納めにいった。字が上手になるようにと祈つてのことである。(菅原)

ウの日待ち 月一回、ウの日の前日、村中集まって会食をした。日の決定は妙義神社で行なった。兎は妙義神社の御眷属ということだった。(妙義)

太子講 大工や板割りなどのカネ尺を扱う職人が聖徳太子を祭る。毎年一回、二月ごろ祭る。石碑が随応寺の西、若宮八幡宮の石段の途中の左側にある。妙義地区全域から参加する。(諸戸字日向)

(四) その他

本項では、前記三項とは別の内容で、それぞれ重要な習俗であるが、調査資料が不十分で、独立した項目を立て得なかつたものを一括した。つきあいについては、一項目をたてて、ムラ、イエ単位のつきあいつか、冠婚葬祭のつきあいなどについて個別にまとめるべきであったが、資料不足でここに入れた。このほか日常生活でムラの生活に関係

深い事項をとりあげてみた。

つきあい 振舞のときには、呼ばれた人は親類づきあいにするか、近所づきあいにするかをきめた。親類づきあいという場合には、実際の親類でなくとも、親類と同じようなつきあいをするということ。たとえば、香典の場合、親類づきあいでは一円とすれば、近所づきあい(他人づきあともいう)は、五十銭という形になる。なお、隣組など近所の人は、手伝いもするので特別だともいう。

つきあい、金額をきめる場合に、あそこの家は、ジンギが高いとか、低いといういい方をする。これは、前にどのくらいもらったかを記しておいて、それ相当の金額を持つてゆくということで、金額の高低を、ジンギが高いとか低いとかいったものである。(上高田字山下・川幡)

この地区では、香典は全部金銭であった。

香典の金額は、近所づきあいが五十円なら、親類づきあいは一〇〇円くらいであった。年忌供養のときには、小麦粉を持つて行った。粉は、めしつぎに入れて、その上にお金をのせて行った。

新盆見舞のときには、近所づきあいには、うどん二把でお金は持つて行かない。近親者は、ひやむぎなど五把とお金を持つて行った。

つきあいの場合は、前にもらった程度の金額を持つて行くのが例となつている。これをカリがあるといった。(下高田)

近隣の人たちのつきあいつか手伝いの形をあげると次のとおりである。

葬式のつきあい 葬式は、むかしからのつき合いの仲間としてつづいている「モト組」と称する組の者が主体となつて行われる。モト組は五、六軒が一組となつていて、むかしの「五人組」の仲間であるといわれている。もし、自分の組だけで手が足りないときは、「むこう組」(他の近隣の組)にも手伝ってもらう。

人の呼び方には「一人呼び」と「二人呼び」とがあり、ただ「おねがいします」というと一人呼びで、「みなさんに……」というのと二人の人にきってもらうことになっている。

人が集まると、モト組の人が中心になって、葬式に関する仕事の分担を相談する。決め方としては、まず帳場の者を決め、あとは穴掘りとか、ニワバンに廻ってもらう。穴掘りにも順番はなく、その場で話し合っただけだ。(上高田字下十二)

葬式の場合 隣組の人は、夫婦で手伝いに行く。振舞には、家中呼びになる。香典は、隣組のお手伝いといって、隣組の人たちは同額の金額を持って行く。隣組の人たちの仕事としては、ニワバといって花籠、手バナ、杖などづくりをしたり、帳場の役とか、ツゲに行ったりする。

隣りの隣組の人たちは、最近では頼まないが以前は穴掘りを頼んだ。香典は、隣組の人よりは少ないのがふつうであるが、めいめいのおつきあいによって持って行く。

葬式のときの隣組の人の手伝いは、二日間がふつうである。

葬式のときに、人手の関係で隣りの組(コウチ)の人を頼んだが、手伝いを頼む組はむかしからきまっていた。この関係を、組内とよんでいる。たとえば、山下の上の組(十三軒)は、茶屋の組と組み、山下の中は下と組んでいる。相手の組の人には穴掘りをしてもらった。最近では葬法が変わったので、見送りだけになっている。(上高田)

山下は上・中・下の三つの組合に分れている。上組は茶屋組と組んでいる。中組は下組と組んでいる。たとえば、上組に出来事があると、茶屋の人が手伝い(穴掘り)にきてくれる。茶屋に出来事があれば、上組の人が手伝いに行った。この関係を組内とよんでいる。このつきあいは、葬式のときの協力関係である。もとは、ご祝儀のときも同じように手伝いあったという。(上高田)

結婚式の場合 隣組の人は家中呼びである。手伝いは二日間。お祝

いは、現在では三千円ときめている。おつきあいによって差をつけることもある。お祝いの金額をあげるときは、関係者が話しあう。ほかの組の人は、手伝いがないので、隣組の人よりは多くお祝いを持つて行く。

葬式とか結婚式の場合など、おつきあいの記録をつけておいて、それをみて金額をきめて持つて行く。あすこんちには、いくらいくらのじんぎがあるからといって、それにあわせて持つて行く。

病氣見舞 隣組の人は、相談して見舞に行く。病人が出た場合には、病人の様子をみて、相談して見舞に行く。病人が入院したときとか、病氣が長びきそうなときに見舞に行く。見舞に行くのはおもに女衆である。

子供の祝い 長男長女については、歳暮、初節供、初誕生のときにお祝を贈った。

子供の歳暮としては、隣組の人とか親類の人が羽子板とか掛軸を贈ってくれた。

初節供のときには、隣組の人は金を出しあって、祝いの品物(ひな人形など)を贈った。親類からは、ひな人形とか、鯉のぼりなどを贈ってくれた。親元からは、のぼりとかよろいかぶと、あるいは五段かざりのひな人形を贈ってくれた。

初誕生の祝いは、隣組の場合は特に祝をやらなかった。親類の人たちが祝ってくれた。産見舞などのお返しは、誕生祝のとき餅をついて配った。

隣近所とか親類の人は、子供が生まれると、初誕生までのお祝をした。

隣組の人は、最近では現金で祝ってくれるようになった。(上高田)

お産見舞 これには、産婦に対するものと、あかんぼうに対するものとある。

産婦のところへは、お産見舞といって麩(隣組の人)とか缶詰(親

類の人)、米(産婦の里から、力米といって一斗二升くらいの分量。これでおかゆをつくって産婦に食べさせた。これを食べて力をつけるという)を持つてきた。

あかんぼうのところへは、アカダキといって、親戚の人とか隣組の人などが、きれ(布)とか着物を持つてきてくれた。ただし、これは、長男長女に限るといふ。

隣組の人は、きれ(よくてネル)を一丈、親類の人はきれ(メリン)とか新モスなど、メリンはいい親類の人が持つてきた)を一丈、産婦の親元とか兄弟など特別の親類はメリンなどを一反くらい持つてきた。親元からは、おはつぎといつて、紋付の着物を作つて贈つてくれた。これは子供が宮まいりのときに着た。この着物は、大きくこしらえて、三歳から五歳まで着られるようにしておいた。(上高田)

お産見舞として、隣組の人は産婦のところへ、麩を持つて行った。子供のところへお見舞に行くことは、アカダキといつた。これは、一七夜前に、お産見舞として、お祝の品物(きれなど)を持つて行った。ただし、これは長男長女の場合に限るのがふつうである。以前はきれを一丈ほどもつて行ったが、最近はお金を持つて行くようになった。親類の人はいい品物(メリンなど)を一丈とか一反くらい持つて行った。

隣組とか親類の人は、このほかに子供のお歳暮と初節供のときには、それぞれお祝いの品物を持つて行った。これは、長男長女に限られていた。(隣組の人は初誕生の祝いはしない)

このようなお祝に対しては、お祝をもらつた家からおかえしをする。このような場合隣組の人は相談をして、金を出しあつて祝の品物を贈るかお金を贈るとかしている。

屋根葺き もとは、隣組の人が手伝いに行った。もとは、エエ仕事でしていた。隣組の人は、一日手伝いに行くくらいだった。そのほかは、親類の人が手伝いに行く。

新築の場合 隣組の人は、家こわし(バラシという)とたてじ(上棟)くらいは手伝いに行く。もとは、バラシ、地ならし、たてじ、こめかき、あらかべぬりなど、二、三日くらいは手伝った。

農作業 特別の事情で手不足の家があると、隣保班(隣組)とか、親類の人が手伝いに行った。農作業は、隣近所二、三軒でエエ仕事にすることが多かった。

伊勢参宮 このような長期の旅行の場合には、隣組の人とか親類の人たちは、もとは饞別をやつた。参宮に行った人は、お土産とかお札をおかえしとして配つた。(上高田)

親類づきあい 親類づきあいは、ふつうはいとこくらいまで。新しい親戚ができてくるので、親類づきあいは、三代くらいでやめにしていく。(下高田)

振舞の招待 振舞のときには、皆さん振舞と旦那呼びがあつた。皆さん振舞は、隣組の人とか近い親類の人。旦那呼びは遠い親類の人たちに対してである。

皆さん振舞のときに、うち中で来てくださいといつて呼ぶが、夫婦で呼ばれるくらいである。(上高田)

家中招び 昔は御祝儀や御不幸の時は、クミ中の家々を家中招びをしたので、子どももみんな招ばれて行き、ごちそうになった。朝飯から招ばれ、弁当におむすびをもらつて学校へ行った。御不幸の時など、子どもにもヒキモンがついた。(上高田)

人寄せと野菜 人寄せをする時は野菜など計画的に蒔いておく。祝い事にはミズ菜を使った。株がすぐ大きくなって、子孫繁栄にもつながらるものと考えたらしい。今は何でもホウレン草を使う。(諸戸字日影)

お茶呼び 子供が生まれたとき、嫁をもらったときには、近所の女の人を呼んだ。これは、お茶呼びといつて、簡単なご馳走を出した。呼ぶのは隣組の人たちである。

子供の場合には、オビヤ(産明け)のときに呼んだ。

嫁をもらつたときには、何日の何時ごろ、わざとお茶を飲んでもらいたいから来てくださいと呼んだ。このときは、嫁の名前を書いた手拭を配つたりした。近所の女衆と嫁との顔合わせであった。(上高田) 嫁をもらつて三日目に、隣組の人を呼んだ。一戸一人、おんなしゅを呼んだ。これをお茶呼びという。よばれてくる人は、手拭を台にしてご祝儀を包んで行った。

呼ぶほうは、赤飯と煮しめを作つて、酒を添えて出した。嫁はその席に出て接待した。お客には、名刺代りに手拭に嫁の名を書いてくばつた。(下高田)

あいさつ 朝「お早ようがんです。」

日中「あついのー」「さぶいのー」「こんちゃー」「いたかい」(訪問)

「いねえかい。」

食事時の訪問「めしくつたかい。」

夕方より夜半「おぼんでがんです。」「おつかれさん。」「ねたかい。」

(中里字北山・菅原)

互助関係 生活の中での幸不幸の際の互助関係についてみることにする。

葬式のときには、隣組の人は全戸手伝いに行く。二日間手伝いに行くのがふつう。振舞には全部よばれる。隣りの隣組の人は、もとは穴掘りの仕事をしてくれた。結婚式のときには、隣組の人は二日間手伝った。振舞には全部よばれる。

屋根葺きの場合には、もとは隣組の人が手伝いに行った。これは順番がきまつていてエエ仕事でしたので、隣組の人が全員で手伝つたわけではない。葺き番というのがきまつていた。仕事は大体一日で終わった。手伝いは一日がふつうであった。そのほかは親類の人が手伝つた。

新築の場合にも、隣組とか親戚の人が手伝いに行った。たてじ(上棟式)と家こわしくらいを手伝つた。むかしは、こまいかきからあらかべぬりくらいまで手伝つた。

農作業の手伝いもあった。第二次世界大戦のころ、働き手が出征した家で農作業が手遅れになつていたので、隣保班(隣組)の人とか、親類の者が手伝いに行った。(上高田)

火災の場合 出火すれば早くとんでいって家財道具を運び出す。焼けてしまつたときには、あとかたづけの手伝いに行く。一日か二日間手伝う。なお、このとき近所とか近親者はおにぎりを持つて行った。

隣組とか親類の人は、釜、鍋、バケツなどをお見舞として持つて行った。本分家などは金を持つて行く。近所の人たちは家を建てるときには、上棟式くらいまで手伝いに行った。

葬式の場合 隣組の人は、三日間手伝つた。葬式の前日はツゲに行つたり、つくりものをしたりした。当日は帳場の役などで、三日目はあとかたづけをした。

祝儀の場合 隣組の人は、三日間手伝つた。三日目はあとかたづけ。新築の場合 組内の人たちは、延十日間くらいは手伝つた。新築のときには、ムラ中の人を頼んで、お祭りのようなさわぎだった。木出しから、地形、棟上げ、屋根葺き、こまいかき、壁ぬりまで手伝う。

(下高田)

火災・災害などは大世話が担当して指揮にあたる。炊き出しとか酒を出すとか、お礼に行くことなど。(下高田字本村)

無尽 親類同志間で行われた。ある人がある事情で困つてるとき、その人が早く立ち直るために、親類がお金を出しあつて掛け金とし、まず困つている人にとらせる。無尽はかけ棄てが多い。タチグサレが多い。取つた人はよかつた。(下高田字本村)

無尽のことは頼母子講ともいつた。災難のあつたときに助けあつたもので、火事などがあつた場合にまわりの家のものが集つて、金を出しあつた。たとえば、十人いれば十年で満金になる。金額とか、掛金の出しかたについては話しあつてきめる。毎月だすとか、三カ月ごと、

六カ月ごと、一年に一度出すなどいろいろのかたちがあつた。

掛金を受取る順番は、宿に集まってくじ引きできめるとか、特別に必要な人が申出て一番先に受取るようにした。その場合には、とくに値引きした金額を受取った。千円の掛金のところを、八百五十円とか、八百円だけとつてのこりは、他の人に配当金として配った。希望者が多ければせつてきめた。

金を集める方法としては、請元の家を宿にして、そこに参加者が集まつて金を出し、簡単な飲食をした。

利息は一割くらい。配当は農閑期（十二月ころ）におこなつた。無尽は、大正のはじめごろまで行われていたことである。（下高田）

マワリブチ むかし行われた近所（五人組）の人たちによる救済の
ならわしである。

むかし、五人組の中に生活難の人が出た場合に、五人組の人が交代で食事の世話をしてやつたという。これは、明治のころのことで、話に聞いている程度である。（上高田）

組の中に、一人暮して生活に困っている人が出た場合に、五人組の人が相談して、交代にその人の食事の世話をしてやつた。その人がなくなつたときも、五人組の人が埋葬の世話までしてやつたという。このことは、大正末ごろまでの話である。このことをマワリブチといつた。

なお、むかしは、牛や馬に餌をくれることをふちをするといつた。
（菅原）

生活に困っている人が組内にいると、五人組の人たちが交代で面倒をみた。一日ずつ交代で、その人のところへ食事を運んでいつたといふ。これをマワリブチといつた。明治末ごろまでの話という。（八木連）
親族の中に、身寄りのない人がいる場合に、身内の者がその人を交代で世話をすることを、マワリブチという。身内の者がにきとつて、一定の期間をきめて、交代で世話をした。他人様に迷惑をかけないよ

うにしたという。（岳）

猪土手 猪は明治初年までいたので、これを除く土手があつた。上は、三ツ屋の上まで続いていた。小山みたいになつてはいたが、これは原の水がおし出すのでそれを防ぐ意味もあつた。猪にはイモを食われたという。（下高田字新光寺）

名主の家 むかしは、名主などの村役をつとめた家はきまつていたという。家柄もよく財産もある家だつた。（下高田）

シバオコシ 下高田に十六人とかのシバオコシがあつたというが、その家どの家か不明。ただ、横尾・真砂はこの村の二大派閥をなしていた。小作米が横尾は一〇〇〇俵、真砂は六〇〇俵も入つたという。（下高田字本村）

ムラを開いた家のことをシバオコシとかクサワケという。（岳）

草分け ここでは、どこの家が草分け（芝おこしともいふ）だかわからない。（下高田）

お堀の屋敷 日影には古い屋敷跡があり、石山家の先祖が落人として一番早く来て開拓したという。お堀が回っている屋敷跡で駒場にあつたが、今は絶えた。（諸戸字日影）

堀の内 田村家の屋敷跡の地名で、堀があつたという。ケヤキ製の院号付の位牌があり、新しく系図を作つたという。（諸戸字日影）

上八木時間 村の集会などのとき、上八木連は決つた時間が集まりが悪い。どうしてもいろいろがおくれてしまう。（八木連字上八木連）
妙義の気風 観光地で昔は遊郭もあり、生活が派手な方だつた。米もとれるし山が近くたきぎにも困らず山菜も豊富ですべて恵まれていた。一人前の仕事量など決めてガツガツ働くようなことはなかつた。

カズ（コウゾ） 屋もあつたが紙もすかなかつた。行商の人がきても割合よく売れるそうだ。（諸戸字日向）

上州名物 この辺では、「上州名物、かかあ天下に屋根の石」といっている。

むかしは、現在のようなたん屋根とか瓦屋根の前は、ほとんど板屋根であった。板屋根にはおさえとして石をのせておいた。そのためこのようなことがいわれていたものである。(菅原)

裸でバラをしよう 高田では「高田に嫁に行くか、裸でバラをしようか」といわれた。高田は田が多かったのでよく働いたところである。

(下高田)

「高田、田の中、米の中」とか、「大久保よいとこ、金の中」などともいった。(菅原)

経済 行沢は道路に面して交通の便がよく、事業家が多かった。カズ屋(コウゾ)の皮を集める人、乾めん屋(干しうどん作り)、マユ買い、その他工場もあった。養蚕家も二十九戸あったが、現在は八戸になった。(行沢)

千人祝い 菅原は大村であった。もとの妙義町の人数と戸数で三分の一を占めていたといわれている。

むかしの話であるが、菅原の人数が千人になったら、千人祝いをすることになっていた。ところが千人になったときに、一人の村人が山へ焚木を拾いに行つて、はやり病にかかつて死んでしまった。そのために千人祝いが出来なかったという。(菅原)

診療所の変遷 戦後昭和二十三年ごろ診療所を作つた。補助金が出ず、寄附を集めて作つた。下仁田の厚生病院の副院長や群大から医師が来た頃はよかつたが、辺鄙な所で患者も少なく採算がとれず廃止した。建物は役場へ百万円で売つて今児童館になっている。町民は今、松井田の医者へも行くが、自家用車で富岡へ行くのではないか。少し遠いが医者も多いし店も多く、ついでに買物もしてくる。(諸戸字日影)

二、イエの生活

(一) イエの組織

本項では、イエの生活の中で、イエの組織に関係する事項をまとめてみた。内容としては、家長と主婦、隠居、家族の呼称などである。本分家関係については別項とした。

家長 昔流にいえば、家長である者が身上しんしやうまわしをしている。家長に対しては、家人はおやじといつたりする。

家長は、ムラの寄合に出席する。

祝儀、不祝儀のときには、近所の家へ挨拶に行つた。

ムラ祭りのときにも出席した。

食事のときには(お勝手)中央に東向きに坐つた。東向きのごとは、くだりむきといつた。イロリの座席は、テイザシキに東向きに坐つた。テレビを見ると、比較的いい場所に坐っている。

家長(主人) 夫婦の寝室はオクノヘヤ(ナンド)である。

風呂に入るときも一番先である。(下高田)

テイザシキ イロリの座席で、その家の主人の坐るところを、テイザシキといつた。もとは、主人は、ここへくだり向きに坐つた。ここへまちがつて坐ると、米を買えと言われた。ここへ坐る者は、ネコと馬鹿が坐るなどと、むかしの人は言つたものだ。また米の買えないやつは、テイザシキに坐るものではないといつた。(岳)

年男 正月三が日は、主人が年男として、煮炊きをして、年神様などに供え物をした。

年男は、正月三が日は早起きをして、若水を汲み、湯をわかし、神様にお茶をしんぜ、また、料理をして、供え物をした。(岳)

主婦 主婦のことは、オカタという。

煮炊きはオカタが中心であったが、最近嫁がするようになった。食事のときのもりつけはもとオカタ（炊事をする者）がしたが、最近嫁がするようになった。一番はじめにもりつけてやるのは主人、そのつぎがオカタである。

葬式ときには主人が見舞に行くが、病氣見舞にはオカタ（女衆）が行く。しかし、遠距離の場合には男衆が行く。ご祝儀のときのお祝いは主人が行くが、そのあとのお茶呼びのときには、オカタが呼ばれて行った。お茶呼びは、新しい嫁が近所の女衆の仲間入りをするこゝとであった。（下高田）

オカタ おかみさんのことを、他人がいう。あれは、誰そのオカタだというようにいい方をする。（上高田）

隠居 この村にあつた例。その人は二回隠居している。はじめは家が多人数になつて困つたので、二番目の男の子を連れて隠居したが、財産はおよそ半分くらい持つて出た。ところが、出て間もなく細君に死なれたので後妻をもらい一人子が生まれたので、こんどは、田一反、原一反五畝くらいの畑をもつて隠居した。（下高田字新光寺）

「隠居」という屋号の家はあるが、実例を知らない。隠居免ということばはある。（下高田字本村）

うちのわかいしゅ（あとつぎ）に身上まわしを譲つて気楽になると、隠居といつた。これは、同じ家に住んでいても隠居といつた。隠居した人は、したいことをしてよかつた。村役からも身をひいた。

農協の貯金など、名儀を交える場合もある。

本当の隠居は、家を別につくつて住んだ。屋敷内に別棟をたてて住む人もある。

土地を持つて隠居に出る人もあつた。その土地のことを、隠居免といつた。隠居免は、家の財産に応じて広狭があつた。二、三反とか、五、六反とか持つて出た。隠居がなくなつた場合とか、後継ぎがない場合には、その土地は本家へもどした。後継ぎがいれば後を継がせ

た。

年をとつて隠居した場合を楽隠居といつた。なお隠居で一軒前はつていると、オテンマに出た。

隠居に出る理由は、それぞれの家庭の事情による。子供がなくて養子をもつたような場合には、隠居に出たりしない。

隠居に出るときには、身内の者などの位牌を持つて出た。（下高田）年をとつて、息子に身上まわしをまかせて別暮しをする人がある。

これは楽隠居といい、財産を分けて出るようなことはしない。生活の面倒は、息子にみてもらつてゐる。このような場合には、ムラのオテンマは免除された。

妻をなくした人が、後妻をもらつた場合、家庭の円満をはかるといふことで、息子（先妻の子）に財産を譲つて隠居に出ることがあつた。この場合は、分家と同じように、土地を分け、家を別に建てて別に暮すようになる。目上の者が家を分けるので、分家といわずに、隠居するといふ。隠居に出るときに持つて出る土地は家の事情によつて広狭はあるが、それほど広くはない。この土地のことは隠居免という。隠居がなくなつて、後継者がいなければ、この土地は本家にもどる。（八木連）

家族間称呼

家族の間で使われる言葉は、おおよそ次のとおりである。

子↓親	オトツチャン・オツカチャン。
孫↓祖父父母	オジイ・オバア。
孫↓曾祖父父母	ヒネジイ・ヒネバア。
夫↓妻	よびすて・オイ・オツカア。
妻↓夫	ヨーヨー・名前にさんづけまたはちゃんづけ、またはオトウサン・オジイサン。
奥さん	オツカア。
主人	オヤジ。

兄 アンチャン。

姉 アネエ・ネーチャン。

弟 よびすて

妹 よびすて

末っ子の異称 ネコノシツポ

マゴ——ヒコマゴ——ヤシヤゴ——クツチャゴ(下高田字本村)

コメノイトコ 血のつながっているイトコのことをいう。父親のほうのきょうだいのイトコについては、父方でコメノイトコというし、母方のきょうだいのイトコについては、母方でコメノイトコといっている。

コメノイトコ同士は結婚してはいけないといっている。血が濃いからという。(下高田)

血のつながりのあるほんとうのイトコのことをいう。血のつながりのないイトコの場合は、義理のイトコとか、ただのイトコという。(八木連)

オヤコ 親類のことをオヤコという。これは年輩者の使うことばである。

親と子の意味である親子とはアクセントをかえて、オヤコと平板に発音する。(下高田)

ヤキモチツッコ 子供がいないので養子をしたところ、そのあとに子供が生まれると、その子供のことを、ヤキモチツッコといった。(下高田)
あととり あととりのことは、相続人、カカリット、カカリウツト、カカリゴという。

あととりは、長男がふつうである。(下高田)(八木連)

養子 養子には、子供の場合と、成人の場合とある。子供の養子の場合は、もらいつこといつている。生れてすぐに養子にする場合もあり、そのことを、しびの上からもらつてくるといつた。名前は養子先でつけることになる。成人を養子にするのは、掣養子の場合がふつう

である。

なお、養子をもらうのは、親戚とか知人など縁故者からの場合が多かった。(上高田)

子供のない人が養子をもらう場合がある。

生れてすぐの子供とか、三つ四つの子供をもらう場合もある。あるいは、成人者を養子にすることもある。親類から養子をもらう。弟を養子にすることもある。これを順養子という。同じ日に、夫婦(嫁・掣)を養子にする場合もある。これを夫婦養子という。一般的には、親類内から男子または女子を先に養子にしておいて、一人前になってから相手を選んで結婚した場合に、双方とも養子になるので夫婦養子とよんでいる。

なお、女ばかりのきょうだいとか、上が女ばかりで、一番末の男が幼少の場合には、長姉に掣養子をもらつて後をつがせ、弟が一人前になって、弟が結婚してから、姉夫婦を分家させるという形もみられた。この場合には、ふつうの分家の場合より、いく分なりとも多くの財産を、姉夫婦に分与するのが一般的である。そのために、女ばかりのきょうだいの家では、姉に掣をとるのはしばらくまで、男の子が生れるかも知れないからといつたりした。(上高田)

養子とは、ようしといっている。仲人をたてることもあるし、双方の親が話し合つて養子縁組をする場合もある。(下高田)

居候 家によつては、年輩の未婚者とか、出戻りの家族、他人で縁故のある人などを同居させている場合がある。これを居候という。

年輩の未婚者のことは、おっちゃん、おばちゃんなどと呼んでいる。(下高田)

結婚もしないし、ムラ役もしないで、家の仕事ばかりしている者が、家族の中にいると、あそこの家には、カネバコがいるとムラの人はうわさ話にしたことがある。いわば、おっちゃんといわれる人がいるとそういつた。(八木連)

結婚もしないで、年輩になつても生れた家にいる者(男性)のことを、おっちゃんという。このような人は、よく家のために働くので、あの家はおっちゃんがいるから、お金が残るといわれた。そのような人のことを、カネバコとよんだ。(行沢)

(二) イエの機能

イエを単位とする日常生活に関する資料をまとめてみた。内容としては、身上まわしと身上ゆずり、家族の私財、屋敷神などである。

身上まわしと身上わたし 身上まわしは、世帯主がしている。このことを、財布をにぎっているという。

身上まわしを子供にまかせることについては、特別な儀式はない。家によって形はちがうようだが、この地区では、しゃくしわたしのようなことは聞いていない。「あすこの家は、こんど身上まわしを譲ったそうだ」という話を聞く程度である。年をとつたとか、夫婦の片方が欠けたりすると、身上まわしを子供にまかせるようになる。その場合は、土地の登記簿などの名義を子供の名前に変更する。

最近、一家の中でも、勤め人が多くなつて、家族の収入がべつべつになつたりして、身上まわしの形も大分変つてゐる。(中里)

身上まわしをしているのは、世帯主の夫婦であるが、年をとつたり、夫婦の片方が欠けると、身上まわしを息子夫婦に譲る場合が多い。このことを財布を渡すとか、身上を渡すというくらいで、特別な儀式などはない。

勝手仕事を中心にしているのが主婦で、これをオカタという。勝手仕事することを、ニヤキをするともいう。姑から嫁に身上まわしをまかせると、嫁はオカタになる。(菅原)

身上ゆずり 所得をせがれにまかせることで、金勘定をして渡したり、通帳を渡す。身上渡しをしたとき、主婦のうけつぎをするのが普通である。もつともいつきよに渡さないで、徐々に移行する場合が多

い。たとえば、かつてに倉から米を出してくるのを嫁にまかせるなどである。(下高田字本村)

身上まわしをしていることを、財布じつぽをにぎっているという。

身上わたしの儀式は特にならない。きつかけが出来ると、あとつぎに、「今日から全部やつてみてくれ」といつたりする。財布とか、貯金通帳などを渡す。登記などの名義も変更する。夫婦一緒に渡す。

身上わたしが済むと、わかいしゅ(あとつぎ)が、近所に出来事などがあつた時などに、主人として出席することになる。ムラのケイヤクの席にも出る。

女衆は天神講に出席することになるし(これは嫁の出席者が多い)、近所の出来事ときには、見舞に行つたり、手伝いに行つたりする。

(岳)

ハリキン 親がなくなつた場合に、子どもが協力して、葬式の費用を負担しあうことをハリキンにするといつた。これはむかしからのならわしである。娑婆のならわしだからとて、この金は必ず出すものだといつた。この金の出し方(金額)については、きょうだいで話し合つた。ただし、この金の負担するのは、一人前の者だけである。(上高田字山下・川幡)

親がなくぬつたとき、子供たちが出す金のことをハリキンという。これを葬式代にあてた。(岳)

家族の私財 家族の私財に関する言葉として、次の各語がある。

へソクリ、キユウデ、ヨロク、フンドシゼニ。

へソクリは、内緒にためる金のことである。女衆に関係ある言葉で、大まゆとか中まゆは、男衆からおんなしゅに分けてやつた。へソクリにくれべえ、へソクリに足しておけといつたりする。この金は、孫にやつてしまつたりした。

キユウデは、うちの物を盗みだすようにして、自分で使う金のこと。たとえば、米・サトイモ・コンニャクなど、うちの物を家人に知られ

ないように盗み出して、売って、その金を自分のものにして使う。金が必要なのでキュウデをすることになる。

キュウデは、カカリツト（あととりで、一人前でない者）のわかいしゆがするが、おんなしゆでもキュウデをする場合もある。

ヨロクは、余分の収入のこと。せつこうのいい人は、余分に仕事をす。給金以外に金をとる。これがヨロク。それは、身上まわしをしていない者がする。たとえば、繩をなつたり、ぞうりとかわらじをつくつたりして、それを売って金をとる。この金で、夜遊びのこづかいにしたりしたという。

むかしの人は、六尺ふんどしをしていた。そのふんどしに金をしばつておいた。その金のことを、フンドシゼニといった。ふんどしにしまかりしまいこんでいるぜにのこと。あすこんちのじいさんは、フンドシゼニが、腰がまがるほどあるといたりした。

キュウデ仕事という言葉もある。これは、時間外の仕事のこと。夜なべなどに仕事をするせつこうのいい人がいる。そのような人のする仕事のことをいった。

なお、登記以上の広さがあって、米が余計にとれる田のことは、あの田は、ブが広いから米がとれるといった。（下高田）

家族の私財は一般的にはヘソクリという。べつの言葉では、キュウデという。これはふだん使う金をすこしずつかくしておいてためたもので、なにか買った場合に、キュウデで買ったなどといった。一家の主婦のような人に関係した言葉である。

ほかに、ヨロクという言葉がある。これは臨時収入といった内容の言葉である。主として、男性に関係した言葉である（上高田字山下・川幡）。

家族の私財のことを、むかしはキュウデといい、最近では、ヘソクリといっている。これは、おもてむきでない金のことをいう。家の者（主人）に内緒で米を売って小づかい銭にした。若い者は、うちのお金を

すこしずつへずって夜遊びの時に使つたり、田から稲を持ってくるときに、よその家に頼んでそれをひいてもらつて金にかえて、小づかい銭にしたりした。

ヨロクという言葉もあった。

むかし、隠居に出るときに、インキヨメンを持って出る人もあった。

（菅原）

家人の私財に関する言葉をあげてみる。

ヘソクリ

ヨロク 公認されている。

ネズミヒキ 昔、嫁さんや子供は米を倉から出してこられなかった。それを、許可を得ないで出してきて売つたりする場合があった。これは罪悪である。ネズミヒキといった。

ホマチ これは誰さんのホマチだ、などときいたことはあるが、内容は知らない。（下高田字本村）

キュウデ 親がきびしくして、息子のこづかいが少ないようなときに、息子がうちのものをもちだして売って金にする場合に、その金のことを、キュウデという。

そのほかに、おくれた蚕を飼つてまゆにしてそれを売って金にする場合など、ばあさんのキュウデだといつたりする。これは公けにできない金である。ニワトリの卵を売ってキュウデにする場合もある。キュウデは、家の主人に内緒につくることが多い。キュウデは、それを手に入れた本人の小づかい銭になる。ところが、家の金が不足したときなどに、それを使つたりすることがあるが、こういうことをするのは、おもにおかみさんで、ワカイシユの場合には、キュウデをもつていても、家のために使うようなことはしない。（下高田）

家族の者が、内緒でお金を自分のものにするのを、クスネルという。

おもに、家族の若い者が、副収入的に金を手に入れた場合に、その

金のことをキュウデという。これは、男女共通に使う言葉である。たとえば、玉蘭とか中蘭などを、「これは、おんなしゆのキュウデにくれる」という。あてにしないものを、おんなしゆなどにくれるときにいう。あるいは、コンニャクのいたんだものを、はねだして、それは、おんなしゆのキュウデにやったりする。これを売って(安く買われる)、おんなしゆのこずかいにした。キュウデの場合は、このように主人などが公認である。

しかし、内緒で小づかいを手にする場合には、なにかをくすねて、横流しにしたという話もある。このようにして得た金のことを、クスガネといったり、ヘソクリといったりする。おんなしゆがすることが多い。内緒でごまかす金のことをいう。(岳)

ヨロク これは本職以外の収入のことをいう。あすこんちにはヨロクがあるといたりする。(下高田)

コセツクリ よそのものをとってくるようなときに使う言葉。ひとの畑から農作物などを失敬してやるようなときにいう。(下高田)

屋敷神 屋敷神は稲荷様をまつっているのがふつうで、その脇に平らな石がある。その前に竹を二本立て、しめなわを張った。まつりは十二月十五日で、新わらでおかりやをつくる。もとはいい日をえらんだ。

供え物は二つ分つくり、稲荷様へは、赤飯、いわし(二匹)、もち(ひしがた、二枚ずつ、おかりやの棟にニカ所ならべてあげる)をあげる。もちをあげるのは、棟上げということである。石のあるほうにも同じ物をあげる。ただいわしは一匹、ひしもちは二枚(ひとかさねだけ)である。

屋敷神は、猿田彦をまつているという。

屋敷神をご粗末にするとはたるといった。

おまつりは十二月の一回だけ。

新宅に出る場合には、屋敷神は、本家の屋敷神のところの土を持つ

て行っておかりやをたてた。

屋敷神は、屋敷のイヌイの方角にまつる。

まわりを高くしてまつれといった。

子供が、屋敷神(稲荷様)のまわりでいたずらをしてかまわないといった。(下高田)

屋敷神は屋敷稲荷といい、この辺では屋敷神として稲荷様をまつている家が多い。

屋敷神のまつりは現在は十二月十五日であるが、もとは十二月のトリの日にまつっていた。そのときはお宮をわらでつくりかえた(柱はクリとかサクラの木)。お宮のことはオカリヤといった。

まつりのときには、赤飯、イワシ、塩、酒を供えた。むかしは、ウルチでつくつたもちを投げ、それを拾いに来たものがいた。このもちのことを投げもちといい、形は菱形である。

稲荷様のお宮の前で、赤飯を一はさみずつうちの子どもたちなどに、主人がはさんでやった。稲荷様のところから帰ってくるときには、うしろを振り向いてはいけないといった。うしろを振り向くと、稲荷様が供え物を食べないという。

なおオカリヤのわきに、平たい石をまつている家がある。その前に、二本の竹を立ててをはった。ここには赤飯だけあげて、イワシはあげない。(下高田)

屋敷祭り 屋敷神として稲荷様をまつているのがふつう。このほかに、猿田彦大神をまつている家もある。また、屋敷神の隣に平らな石を置き、屋敷祭りの日に、ここに四本の竹を立て、しめを張ってまつる家もある。(神宮一雄家)

屋敷祭りは十二月十五日。もとは十二月のいい日を選んで行っていた。石宮をつくってまつている家もあるが、わら宮をまつている家もある。これはオカリヤといって、毎年つくりかえしている。現在は赤飯とオカシラツキをあげているが、もとは、もちをつけてあげた。

棟上げをすることであるといった。このとき、近所の子どもたちを集めて、もちをなげてやった(主人がする)。もちの形はひし形である。

(上高田字山下・川幡)

家々の家例 おもな家の家例は次のとおりである。

市川 そば家例でスマシ汁にして三カ日供えた。餅は四日から六日まで供えた。

矢島 そば家例。四日にははじめて雑煮をたべる。

綿貫 そば家例。四日から餅を供え食べる。

大塚 そば家例。四日から雑煮をたべる。

神部 元日そば。二日から雑煮。四日にお供えの餅をおろして雑煮にして供える。夜はいづれも飯、オトロ(芋)を食べる。(下高田字本村)

(三) 本分家関係

本項では、本分家関係をあらわす資料を一括してみた。本分家の形と、イツケとイチマケと、特に目立った先祖祭りをとりあげた。先祖祭りは、旧高田地区に目立っているが、旧妙義地区にも、菅原など一部にはみられるものである。

本分家 ホンケ・シntaxという。シntaxのことは、ブンケともいう。

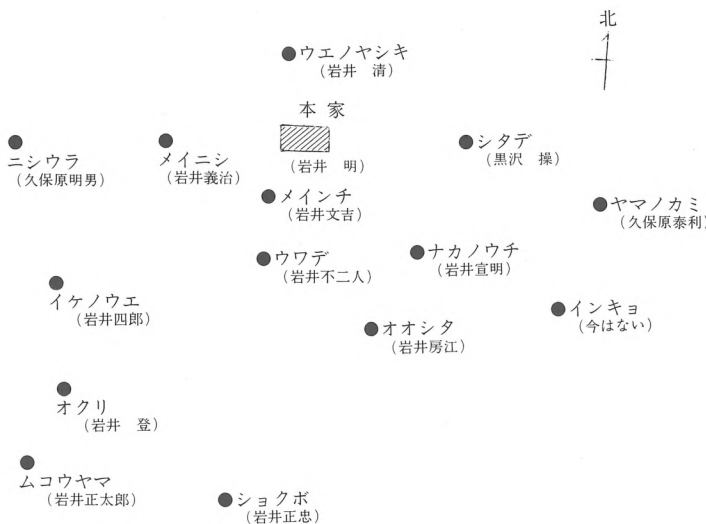
分家は、本家から、家・屋敷・耕地を分けてもらった。分家する場合に、本家の仕事を手伝った。分家する者は、後継ぎの者よりも親子の縁が薄いというので、何年か家にいさせてから出した。しかし、あまり長いとまずいというので、結婚して一年か二年くらいで分家させた。

分家は、本家からみて、下から東の方へ出すものという。本家より上に出すものではないといわれていた。

分家してから、何年間か、本家の農作業の手伝いをした。しかし、

何年間手伝わなければならぬというきまりはなかった。(下高田) **新宅** とくに新宅に出る基準のようなものはなく、財産によつて家ごとにみなちがう。家ができて、かまどの灰をうつすこともなく、稲荷をつくつても、本家から土を移してゆくこともない。長男が「かまどの灰までおれのものだ。」といつていばることがあった。(下高田字本村)

◎本家を中心とした近隣の家の呼び名 (大久保)



カマドワケ 分家するときカマドをわけるといった。然し特別のことはやらない。(下高田)

本分家のつきあい 本分家のつきあいは、末代まで続く。祝儀、不祝儀のときには、家中呼びにするし、おたがいに手伝いあう。また、普請、屋根替えのときには、手伝い合うし、土木仕事の場合には組んだりする。大事の場合には、おたがい相談相手にもなった。

分家を出すときに、土地を分けてやることをジワケといった。(菅原) イツケとイチマケ この地区では、ふつうマケといっている。イチマケともいうし、イツケともいう。

マケとは、先祖のつながりのある家のことをいう。同じ先祖のわかされということである。マケの中に、オヤジのマケ、オフクロのマケとある。父方と母方のマケということである。この地区では、伊丹マケとか藤井マケなどと、苗字をつけてよんでいる。マケはこのように、同じ苗字の家の集団のことである。マケの家は、紋所も墓地も家例も同じである。同じムラ内にいる場合にマケといい、離れたところに居住している場合には、マケとはいわない。(下高田)

マケ むかしからのつながりのある家で、ブラク(小字) くらいの範囲内で苗字の同じうちのことをマケという。いわば、むかしの本分家の関係にあった家のことである。

墓地は一カ所がふつう。マケごとに、新年互礼会とか、先祖まつりをしていく。たとえば、川幡の神宮マケでは、六軒で八幡様をまつっている。これが先祖の神様という。祭日は十月十五日。この日、赤飯、御神酒、御幣束などをあげている。供え物は一軒ごとにあげている。なお、神宮マケでは、手のあるキュウリはつくらない。

ここでは、イツケという言葉はきかない。(上高田字山下・川幡) 先祖が同じで、苗字が同じで、同じムラに住んでいる場合に、その家同士のことを、イチマケという。この家は、紋所も、家例も同じである。墓地は必ずしも同じではない。

苗字が同じでも、先祖が違えば、イチマケとはいわない。たとえば、ワラジヌギの家は苗字が同じでも、イチマケとはいわない。(岳)

市川マケ、横尾マケなどとかう。イチマケもつかうが同じ意味で、あえていえば、イチマケの方が親族関係が近いし、マケだとばくせんとしている。(下高田字本村)

ワラジヌギ 他国(他県) からきて、そこへ住みついた場合に、世話になった家で、苗字をくれたりした。これを、ワラジヌギといった。(下高田)

退転 家がつぶれることをタイテン(退転)という。退転した家のあとを継ぐ場合もあるが、そのときは、たいてん屋敷をもらったという。退転した家の苗字と墓地などを受け継いだ。なかには、自分の苗字をそのまま名乗る場合もあった。

実際は、苗字をもらったほうのマケ(イツケ)との間に行われるが、もとの家とのつきあひもする。(下高田)

家がつぶれるとか、つぶれた家のことを、退転という。子供がなく、あとつぎがいなくなると、退転するという。ふつうは、財産がなくなつて断えてしまった家のことをいう。

退転のあとを継いだ場合には、つぶれた家の姓を継ぐことになるので、形の上では分家であっても、本家とは苗字がちがう。その家は、退転した家の苗字、紋所、屋敷神、墓などを継ぐことになる。しかし、実際の本家とは、本分家の関係になつている。(岳)

先祖祭り マケごとに行つている。祭日はマケによつて異なる。山下の場合は上と下に分れていて、上には佐藤マケが二つに分れて先祖祭りをしている。下は、佐藤マケが一つ、清水マケが一つあつて、それぞれ先祖祭りをしている。

佐藤尚マケの場合をみると、祭日は三月五日、六軒でまつっている。宿は尚さんのところ。先祖様は石宮をつくつてまつっている。祭日のときには、そこに幣束をあげる。酒と赤飯を供える。石宮のところ

ご神酒を飲み、赤飯を護符として分ける。

清水マケの場合は、八軒でおまつりをしている。石宮があつて、そこに先祖様をまつっている。祭日は十月十五日。この日、宿(山下の先祖の家という丈太郎家)にあつまつておまつりをしている。参加者は線香代を包んで行く。赤飯を炊いてあげている。ご神酒もあげる。

(上高田)

マケごとに先祖様をまつっている。先祖様のお宮は、各家から離れた山の中などにある。お宮は石宮とか、オカリヤである。

祭日は、九月九日(広木家)、十月十五日、三月二十三日(山田家)、十月十七日(大塚家)など、マケによつてちがう。

山田家の場合をみると、祭日には、マケの人たちがそろつて、赤飯を持つて供え、おがんでくる。ご幣をあげる。神主は頼まない。

神として先祖様をまつっている。盆、彼岸にはおまいりをしない。正月にしつこめ(おかざり)をあげる。

むかしは、嫁に行くときとか、嫁にきたときには、先祖様におまいりした。

七夕の日に、盆迎え前で墓掃除をするが、このとき一緒に、先祖様の掃除をする。

先祖様のところの木を切ると、たたりがあるという。(下高田)

先祖まつりは一族ごとに行つていて、日どりもまちまちである。

十月九日(もとは九月九日)に広木家、伊丹家、佐藤家(もと伊丹家、養子に行つたため)がお祭りをする。

十一月十五日には藤井家、片貝家がお祭りをする。それぞれの家で、近くの山に石宮をまつっている。それが先祖様で、そこへ赤飯を持つて行つて供えてくる。交代で宿をして、一族の人たちが会食をする。これを先祖祭りといつている。(下高田)

(四) その他

イエの生活に関する小項目を一括した。

それぞれの項目については、もつとくわしい調査を行つて、項目を立てるべき内容もあるが、報告例が少ないので、やむを得ず、ここにまとめた。

家紋と家印 それぞれの家には家紋がある。

家紋は、羽織、墓石、土蔵、弓張提灯、鬼瓦、吹流し(幟)などにつける。

ほかに、家印(焼判)がある。これは、農具とか下駄に押した。(下高田)

家紋は、本分家とも同じである。(八木連)

家印は焼印を使う。焼印は金物店で買ってきたもの。むかしから使っているもので、家によつて、適当なものをきめて使ってきたものである。カネハチ、マルサン、ヤマキなど、その形をよんでいて、これが屋号のようになった場合もある。農具とか、下駄などに押している。

現在も使用している。家印のことは、コジルシとよんでいる。(八木連)

屋号 ムラ(大字)の中には、何軒か、屋号のある家がある。

むかしの職業に関連した名称を屋号としている。たとえば、鍛冶屋、提燈屋、酒屋などがある。(下高田)

鍛冶屋、車屋、木屋など、むかしの職業を屋号として、ムラの人たちが呼んでいる例がある。(八木連)

大尽 急に大尽になった家のことは、なりあがりという。

むかしからの大尽の家のことは、ねつこ大尽という。(下高田・八木連)

相談する人 何ごとでも年寄に聞けば間違いない。家に年寄が居なければ近所の年寄に聞く。本家があれば本家に相談する。特別に後見役という制度はない。(諸戸)

擬制親子関係 実際の親子兄弟ではないが、親子兄弟と同じつきあいをしている関係がみられる。次のような関係がある。

名付け親 名をつけてくれた人。身内の人を頼むことが多いので、名付け親との特別の関係はわからない。

仲人親 結婚後、初子が生まれて、初誕生のときに、仲人を呼ぶ。この席に招待して縁が切れるという。

拾い親 子供が弱い場合には、近所で、子供を丈夫に育てた経験のある人に頼んで拾ってもらう。子供は近くの辻にむしろでも敷いて捨てる。あらかじめ、拾う人を頼んでおき、その人に拾ってもらって、家へつれて行っておき、そこへもらいに行く。拾ってくれた人とは親子の、その子供とは兄弟のつき合いをする。このつきあいは一生の間続く。正月とか、祝儀・不祝儀のときに、行ったり来たりしている。

乳親 母親の乳が出ないときには、近所の知人などに頼んで、子供に乳をくれてもらった。この場合にも、本当の兄弟と同じようなつきあいをする。この関係を乳兄弟という。

産婆 産婆さんとは特別なつきあいはしない。お金を払っているの
で、産明けのときに祝いの赤飯を届けて、縁が切れる。(八木連)

族制関係の諺 諺に「大尽悲しや三代続かず、貧乏嬉しや何代も」というのがある。

「婿取りが三代続くと長者になる」ともいう。婿は一生懸命働くからという。

「嫁のつとめは十年」という。嫁にきて十年たてば、嫁はその家
者になれるということである。

「惣領十五が貧乏世ざかり、末っ子十五が身上世ざかり」という。
世帯を持って、はじめは苦勞だが、あとになると、暮しが楽になると
いうこと。(岳)

信 仰

はじめに

この項をまとめるにあたって、次のように分類し、配列した。

- 一、神社祭祀
- 二、民俗信仰
- 三、俗信
- 四、仏教民俗
- 五、念仏
- 六、寒念仏―大久保の寒行

人々の信仰が時代とともに変化してゆくことは当然のことと考えれば不思議ではないのかも知れないが、妙義信仰の具体的に出ないことにおどろいている。妙義山は、赤城山、榛名山とともに上毛三山の一つとして、古い信仰をもつとみられているが、今回の調査の中では、各地区からの報告にみるべきものが見あたらない。妙義神の古い信仰とみられている波己曾神についても断片的にすぎず、妙義講についても出て来なかった。二つ子参りはかなりひろまっていたようであるが、これも行田(松井田町)の鹿橋のハシカ除けとセットになっているものだった。これは、時間不足であったためではないことで、妙義信仰の重大な問題を示しているのではないか。

二の民俗信仰では、庚申講がかなり広く、熱心に行われていたことが各地の庚申碑や、下八木連の庚申講記録にも現われているが、若い者には忘れられていることも事実である。屋敷神は稲荷が多いが、八

幡宮を祀る例もある。しかし、倉淵村や安中市秋間地区で問題になったオシリヨウ様のえいきょうもみられ、「三十三年の枝塔婆を立てると屋敷神さまになる」と話してくれたおばあさんは、まだ屋敷神さまはなつてくれないのかという話など、注目すべき例である。

また、石尊行についての資料も明和村や千代田町など東毛地方と対比する上で重要である。上八木連の「サンゲサンゲ」も下八木連の「オノオノモ」も、近年までやっていたものである。

山の神について十二様とはいわれない山の神地帯で、十七日に祭るが、八日、十二日を大切な日としていることは注意すべきである。

三の俗信についてはごく一般的である。

四については、先祖まつりをていねいにやっている地域であると感じた。

五の念仏については、各部落にあったことが多くの事例となって報告され、しかも念仏集が五種(三地区で)百十余編も集まったことである。諸戸・日影が各二種、下十二が一種であるが、中でも兵隊和讃は日露戦後のことを主題としたものと、その後のものと二種あり、忠霊和讃も含めて、念仏の世界にも戦争のかが暗く入りこんでいたことを知る。首塚和讃は、安中市原市の首塚のことをうたったもので、昭和初年の発見になるが、郡をちがえた妙義町で念仏を申したことに、この種のものの伝播のあり方を考えさせるものがある。

六の寒念仏―大久保の寒行については、初の報告であるといつてよい。寒念仏供養塔は県下各地でみられるが、寒念仏の実態については資料がなかったが、大久保のものは、昭和十二、三年ころまで、村の

中で、村人だけで伝承されて来ていたことに意義がある。毎年、寒になると青年壮年がオデシ、コギョウ、ホウガン各二人ずつ計六人で行をくみ、きびしいきまりと独特の作法の中で修行して、門ジメ(托鉢)をして、三年に一度、行あげの寒念仏供養の餅投げをした。若者は九年の行で卒業するしくみになっている。大久保の外にも、近くの久原にも寒行があったといわれ、水行に使った水桶や、行の掛軸が大久保の寺に納められているというが、かんじんの久原では伝承は消えてしまつて今では何もわからない。松井田町九十九地区のどこかにもあったと大久保の人はいうが、不明である。なぜ大久保のように戸数三十戸ほどの小さな村だけに寒行があつて、長く続けられたのかを含めて、今後さらに調査し、検討する必要がある。(阪本英一)

一、神社祭祀

(一) 妙義神社に関するもの

妙義神社 上十二の神社は、明治期の神社合併のとき、妙義神社に合併したので、お祭りは妙義神社の祭りの日にする。上十二の氏子総代が妙義神社の祭典に参列するが、ムラの人は特別にお参りにも行かない。(上高田字上十二)

氏子総代 妙義神社の総代会は八人である。妙義が三人、古立、上十二、中里、大牛西、大牛東が各一人で、合せて八人になる。総代は



妙義大神の掛軸
(上高田字上十二)
(撮影 阪本英一)

年長者がなり、死ぬまでやるほど長くする。(上高田字上十二)
神官 破胡曾大明神の神官として、金



妙義神社の大鳥居
(撮影 土屋政江)

井丹後家に古文書が残っている。享保二年、宝暦十四年、明和六年、文政十一年などの年号があり、神官の衣裳を認められていた。(行沢)

七波己曾 波己



波己曾神社 額に「破胡曾大明神」とある。
(行沢) (撮影 関口正己)

曾(波古曾)様は妙義の下に七か所あったというが、現在では菅原、諸戸、妙義、行沢にあり、あと三か所はわからない。神社の位置は、波己曾社を拜むと白雲山を拜むような向きにつくられてあつた。菅原の波己曾社は菅原神社に合併した。諸戸の波己曾社は吾妻屋神社に合併した。(菅原)

かつて妙義を中心に松井田にかけて七ハコソがあつた。妙義神社の本殿の北側の隅に波己(または古)曾神社があり倭健命を祀るという。現在行沢に波古曾神社がある。大牛部落の波古曾神社は、神主をおくのに費用がかかるといふので、昭和初年、妙義神社からの働きかけもあつて、合併した。拝殿の建物はよそへ売った。むかしは波古曾神社の境内で獅子舞をした。(妙義)

「甘菜ノ七ハコソ」といって、妙義山のある甘菜郡に七か所のハコソ神社があるという。妙義・行沢・大牛・日影・諸戸・菅原・屋代・

吉田（富岡市）などにあるが、何の神か不明。ヤチヒコノ神という。文書には破胡曾、波己曾などと書いてある。下八木の佐藤家に文書があるという。行沢の波己曾神社は合併しないで残った。妙義神社とは関係がない。（行沢）

波己曾神社 もと村社で、石鳥居には「波己曾神社」「文化十癸酉二月吉祥日」と銘がある。社殿は石段の上方にあり、奉額に「破胡曾大明神」とある。（行沢）

災難除け 妙義神社に神道さんが四、五人集まって護摩を焚いた。

湯を煮たてた釜の中に銭を入れて、神主がつかみ出して災難除けの護符にしたことがある。回りの人の中に一人でも火戻しの法をする人がいれば、神主はヤケドをするという。（諸戸字木戸・久保）

二つ子参り 赤ん坊が数え二歳になると、妙義神社へお参りに行く。日は四月八日か十五日で、母親が赤ん坊をおぶって行く。嫁の遊びの日で、神札をうけてきたりした。（上高田）

二つ子参りには、もとは子どもが二つになるとみんな行つた。ヤケドをしないといい、弁慶橋くぐりと一緒にした。橋くぐりはハシカを軽くすませるためのお参りである。妙義神社へはオサゴや赤飯をもつて行つた。拜んでくれればよかつたが、現在は宮司に祈禱してもらうようである。（上高田字上十二）

妙義詣 日をきめて妙義神社に参詣することはないが、二歳になつた子供がいる人は参詣した。（菅原）

妙義講 旧高田村では上十二、下十二が妙義神社の氏子であるが、妙義講はここにはない。（上高田）

人形 妙義神社では、七月二十八日の石尊行のとき、大祓の人形を配る。一戸当り五〇円の祈禱料で、一人一人に人形を渡し、名前や年齢を書いて体をなでてから世話人に持つて行つてもらい、神社で御祈禱をした。（上高田字上十二）

キリスト 妙義神社を利用して、キリスト教の講習が開かれた。ま

ことの神は一人イエス様だけだと教えていた。八百万の神というのが本の当の神はイエス様だけだと盛んに教えていた。不思議でならなかつた。（妙義）

(二) 村内の神



伏見神社々殿（下高田）（撮影 池田秀夫）

伏見神社 千福寺の磨墨神社、三つ屋・久原の鹿島神社、蛇田の賀茂神社、山下の諏訪神社が合併したもので、以前は当番が順番で毎月一日、十五日に灯明をあげた。今はそれもなく、三月・十月の十五日の祭日にあげるだけになった。

この社には馬の絵馬が多く奉納されており、天井絵も全部馬である。（下高田）

熊野神社 上高田の村社で、明治

四十三年八月に無格社になった。その年台風で流された。ふつうはオク

マンサマとよび、三月十五日と十月十五日が祭りで、秋の方がにぎわう。祭りには一戸一人ずつ出て、神社で祭典がある。（上高田字下十二）

高太神社の祭り 昔は九月十五日だったが晩秋蚕をやるようになった。それから十月十五日になった。しし・かぐら・まんざいが出る。

獅子は長男でなければならなかつた。三人で、笛若干名、十六庭くらいある。主なるものは次の通り。

メジシカクシ・ツルギ・カタナ・ハンガカリ・シモフリ・ハナスリ・キリ三通り・オオニワ・ミチブエー〇種くらいあり、オコワのお礼・神社詣りなど・ニワクズシなど。

神楽の方は次の通り

戸隠し・ヒラニワ・信州カグラ・お面かぐらなど。

これらの練習には、ヤドをきめてそこで練習した。十日くらいやった。二晩やつては一晩休みしてやった。(下高田字本村)

吾妻神社 元は吾妻屋神社といひ、諸戸の金鶏山に近い上の方に



吾妻屋(あづまや)神社 破胡曾(はこそ) 神を合祀(諸戸) (撮影 関口正己)

の祭典には菅原から来た太々神楽を奉納したり、源太踊り(八木節)をしてにぎわった。信州や武州からもお参りに来た。(諸戸)

吾妻屋神社は諸戸全部の鎮守として祭る。破胡曾神社を合祀した。

(諸戸)

石神神社 上十二の村の神社で、明治の神社合併で妙義神社に合祀した。その時は妙義の御輿が上十二まで来た。その時は凱旋門のようなものをつくり、天狗さんがサシ歯をはいてやって来た。ちょうど昭和の町村合併と同じようなものだった。石神さまは女の神様で、よそへ女を出すのをいやがるといった。石も赤かった。(上高田字上十二) 石神さんの春祭りは三月十五日、秋祭りは十月十五日である。祭りといつても、妙義神社へ合併してしまつてあるので小さな祭りで、神

社の世話人四人が集まつてやる。この世話人は春祈禱(ケイヤク)の時にきめ、一年間で交代する。神社は昭和三十一年に改築して小さくなった。(上高田字上十二)

阿夫利様 神奈川県の阿夫利神社を勧請したもので、城山の頂上にある。この祭りのときは、川の深いところで水を浴び、宿でお昼と夕飯を食べ、夕食後山の上に一升酒と「奉納阿夫利神社」と書いた旗をたてにいった。火伏せの神だといふ。(菅原)

秋葉神社 火ぶせの神で、金鶏山にある。観光道路が出来てから、



秋葉神社常夜燈 (上高田) (撮影 池田秀夫)

て、これが三十五戸全戸に順番に廻り廻つてきた家が灯明をつけた。(上高田)

ジンゾウ様 火伏せの神で、十二月に子供たちが集まつて竹筒の樽を二つ吊し、中に酒を入れて奉納した。このために菅原の尾崎には火事がないのだといひ伝えられている。夜は一戸一名男衆が集まり、食べ比べをした。(菅原)

神明様 天照大神をまつる。十三夜から三日目の旧九月十六日がお祭。昔はオコモリしたが今はお祭りといつてもコワメシを作るくらい。隣に火伏せの神オタカネ様の石宮がある。(諸戸)

天神様の祭り 天神下コウチだけで祭つた。毎月一、十五日に祭つた。(下高田字本村)

代参 毎月十五日に、ムラ中順番で神社の掃除をする。当番の家には「代参」と書いた板の札をまわす。この札が来た家では神社の掃除に行くことになっており、行って来ると次の家へまわすことになっている。(上高田字下十二)

千社参り 家族が兵隊に行った時、その無事を祈ってやったこともある。多くは内緒でやったものだった。(上高田)

灯ろう祭り 昭和の初ころ、秋の祭りに二、三年灯ろうを立て、思いの絵をかいてローソクの灯りを入れた。丹生の不動さまのお祭りのまねをしたもので、灯ろうは一戸一つ作り、オウカン(本通り)から神社まで四十数戸分の灯ろうを立てた。長続きはしなかった。(上高田字下十二)

月経の忌 神参りはいけない。神さまに手を上げるものではないといい、茶も飯も進ぜなかった。風呂には入るなといわれ、入っても最後に入り、使ったら湯を払えといわれた。また汚れものを洗っても日陰にほすものとされた。(上高田)

死の忌 親子兄弟、二親等くらいは一年間の忌があり、神参りは遠慮する。従兄弟はかまわない。(上高田)

(三) 村外の神

貫前神社 村が貫前神社奉賛会に入っていて、区長さんの名前で出ているらしく、大祭のときなど寄附集めが来ることがあるが、ふだんの生活ではつながりがない。また農協から通して養蚕のお札が毎年来るが、希望者だけで、とつてもとらなくもよい。これは、一時は役場の方から区長を通して来ていた。(上高田)

貫前神社のオミトウ(十二月十二日)には行くが、氏子でもなく、ふだんは関係はない。蚕神のお札が役場を通して区長さん扱いで配られ、一戸当り五十円(いまは百円か)くらい納めているが、つきあいが入っているわけである。(上高田字上十二)

献穀 戦争前、まだ高田村のとき、貫前神社の献穀田をしたことがある。苗間づくりのときも式をやり、田植え、稲刈りともにおごそかにやった。衣裳をつくり、その費用は自分持ちで、田植えには小学校の女の子が白装束でやったし、稲刈りは男の子がやった。子どもは学校で選んだ。その度毎に貫前神社の宮司ほか三人も来たものである。(上高田字上十二)

稻含山 ひでりの時、稻含山に雨乞いの水をもらいに行った。稻含山が榛名山とけんかして大岩を投げたのが松井田下町の大石だといふ。(上高田)

稻含山は雷さまと縁が深く、雨乞いの時には荒船山と一緒に水借りに行く。

五月八日の神社のお祭りには、オマイダマをつくって持ってお参りに行き、お蚕が当るようにオマイダマをもらって来た。(上高田字下十二)

中之岳神社 中之岳神社は小坂のもの(下仁田町)なので、妙義の人達とは関係がない。(上高田字上十二)

中之嶽講 中之嶽から募集に来たので行くようになった。はじめは日帰りであったが、のちには泊り、家内安全を祈る。(下高田字新光寺) 白倉のお天狗さま 白倉のお天狗さま(白倉神社)の春のお祭りには、お参りに行ってカタナを借りて来て、翌年二本にして返す。(上高田字上十二)

荒船山 雨乞いの時荒船山に水もらいに行った。やり方はわからない。(上高田字下十二)

峠講 大正の頃、千羽鳥のお札を配った。このお札は鳥の向きによって、歯痛、眼疾に効くなどといった。その後村に世話人がいて配ったが、今ではみかけない。(上高田)

戸隠さま 戸隠の講があつて、毎年向うからお札を持って来て、直接個人の家へ配る。お札の他にオツツゲ(お筒粥)がついて来るが、

大吉はもうこの上がないから良すぎて悪いといい、吉の方がいいという人もいる。よくあたる。戸隠から来た人は、永井良二さんの家に泊ることになっている。丹生(富岡市)にも二軒(千足と竹の下)ある。(上高田字下十二)

戸隠さまへは十人位で講を立ててお詣りし、坊に泊ったものである。また戸隠様が山下の佐藤家に泊りこみできて、お札の金銭を集めていた。現在は郵便で配札してくるし、こちらの代表が金銭を集めておいた。(上高田)

伊勢参り 伊勢参りは、運定めといわれた。運のあるものは、それから良くなるし、運のないものは、帰ってから悪くなる。(菅原)

二、民俗信仰

(一) 講

御嶽講 大正の初ころまでのことで、不動さまのところに石碑がある。話に聞くくらいで、実際どうやったかはわからない。(上高田字下十二)

諸谷津に御嶽様の石宮がある。正月二日にお日待をして、佐藤源蔵宅(ナカザ)でオムベロ持って拝んでいると、御嶽様がナカザニノル。神様がのりうつった状態になって、いろいろなことをいうのを傍の人が聞いて、作物の豊凶(マユ七分、米八分などいう)を占う。次々朝、七、八人がキリハギ・神酒を持って山の神へ供えに行く。そこで神酒を少しだけいただいて帰り、佐藤宅でお茶を飲んで解散する。(諸戸字日向) 御嶽講には、先達の人があり、毎年御嶽に出かける。それで春三月のころ、近所の人や信心の人を呼んでお日待をする。よばれた人は、ワラジセンを納めてご馳走になってくる。昔はたくさん参加したが、後だんだんに減った。その先達は最後まで行った。(下高田字新光寺)

火渡り 日影部落でやったことが二〜三回ある。何れも明治時代のことであった。厄病を追い出すためだという。当日はナラ薪を二〇束(位山にして燃し、塩を一呎ほど用意しておき、火が静まったら火の山をかきわけ、塩をたくさんまいてから神主が先頭に渡った。塩を沢山まくので渡ってもそう熱くなかった。(菅原)

火伏せの神様 戦争中、回り番の宿に米一升ずつ持ち寄って十二月十二、三日ごろやった。イロリの釜で湯をわかし、煮立っていると神道さん(御岳さん)がおがむ。おがみあげるとグラグラ煮立った中に手を入れ、次に杉っ葉を入れてかんまして振り回したが、熱湯なのにその湯が少しも熱くないのが不思議だった。テンテコテンテコ太鼓をたたいたからテンテコ祭りと言った。組は五、六軒だった。(諸戸) 蚕神 松井田町新堀の虚空蔵様に、一月十三日にオマイダマを進ぜた。

絹笠様の石宮が、十三塚の下の北谷にある。(下高田)

一の宮様、利根の伽葉山で豊蚕のお札をくれた。稻含山に五月八日に登り、サルオガサをとってきて、蚕の部屋におくとよく当る。

オシラ様で、お札を神棚におき、神を重箱に敷いてこれに山盛りのオマイダマを入れて進ぜる。正月十四日前の十一日頃、メケエを逆さに竹の先につけて庭先に立て、大正月のとき座敷に張りめぐらしたお飾りの縄をもって、東西に張った。これは十四日朝のドンド焼きで燃した。(上高田)

(二) 地神・水神・山の神

地神様 一月十一日オクラビラキの日に、クワダテをして祀る。畑には松とオンベロをもって行って立て、そのときテンガに紅白の水引をしぼって持って行き、一さく切ってオサゴ、赤飯を供えて畑の神を祀る。(上高田)

麦蒔きの終った晩に地神様にご馳走を供えるといった。(中里)

テングに泥をつけて畑から持ち帰ると地神様に叱られるから、落してから仕事を終れという。なお、畑の中の石には地神様がいるから気をつけるという。ある人が石をかたづけたら地神様の休み場所がなくなつたといひ、その年その人は二回も怪我をした。(古立)

水神 水車のところに水神の石宮があり、十二月の寒い日に用水を干して魚をとったりしてから、御幣束を新しく切つて上げて、水神まつりをした。石宮は水害で流されてしまったため、その後は川の石を拾つて来て「水神」と彫つてまつた。終戦後も水車はあつたが、水車がなくなつてから水神もなくなつてしまつた。(上高田字下十二)

水神待 水車のまつりで、小さな石宮があり、新しい御幣束を上げてまつた。春まきもすんでから十二月の寒いころのことで、川魚をとつて料理するのがまじりで、水車の用水の堰を干して魚とりをした。サンマ飯を煮て食つたこともあり、鶏をつぶしてトリ飯をしたこともある。終戦後もあつたが、水車のワダチの修理に金がかかるので製米機にしてからやらなくなつた。石宮はなくなつた。(上高田字下十二)

水神様のまつりを、以前は農休みのガラの日(最後の日)にやつた。御幣束を十二本麦わらのマキダワラにさして、これを竹竿の上にさして、それにオンペロを四つずつさげた縄で三方に張つて川原に立て、オンペロが落ちるまでオンサンゲ、コーサンゲといひながら手で水をかける。この位かけてもという位かけてなおオンペロが落ちないときは、大水は大丈夫だといひ。もとは村中でやり、ノシ餅を五〜六枚、和臼の砂糖のオヒネリをつけてくれた。部落の共有田で一反歩程あつて、そこからの一俵の小作米で餅をついた。この共有田は農地開放でなくなり、ノシ餅も砂糖もなくなつて、今は五人づつ年番でやつていゝ。(上高田)

山の神 十二様とは言わない。山の神様と呼んでいる。個人の持ち山に石宮を安置して山の神様を祀っている。一月六日に、オサゴとお祓いを持つてお参りに行く。共同で山林を伐採する時に、山の祝ひ講

をして山の神様のお祭りをした。(妙義)

山の神のことは十二様とはいひない。(菅原)

山の神は、十三塚の近くの山の中に、山の神の石宮がある。その山の神を、一月十二日にまつる。それは、ブラクの子どもたちだけでまつる。順番で宿をして、その人が世話をした。十一日に各戸をまわつて、もち米をあつめる。一合はたいらにし、あとの一合は山もりにして出すのが例である。これを宿の家で赤飯にした。各戸では、メンパを持って行つて、赤飯をもらつてきた。なお、ここには山仕事で生計をたてている人はいない。(上高田字山下・川幡)

山の神様は十二講に入つてゐる人々が祭つた。講員は山仕事をする人々で、山の神を十二様とはいひなかつた。山仕事をするときケガのないように祈るためといひ。祭りは十二月に宿に集まり餅をつき、それを山の神の石宮に進げた。伐りはじめるときは、切り株にオサゴをあげた。(菅原)

山の神は十二さまとは言わない。一月六日の山入りの日に、切り餅二個とお頭つき(煮干し)とヨタレ(ペンペロともオンペロとも言ふ)を持って、山に入り、木にしぼりつけて拜んで、小正月のマイダマ木を伐つてくる。(中里)

十二様といひことは聞いたこともない。(下高田字本村)

山の神が矢をはなしたのが十七日に落ちて来るので十七日には山へ行くなといひられる。(上高田)

八木連では一月十二日に山の神のお祭りをする。(上高田)

月の八日と十二日は山に入るなといひられた。それは山の神が八日に矢を放ち、その矢が十二日に落ちて来るからといひ。その日に行くことがをするといひられた。

山の神は女性だといひ。一月六日の山入にはボクを取りに山に入るが、必ずイカを持つて行けと教えられていた。

山の木で「三本木」は切るなといひわれ、切らなかつた。(古立)

山の神は山を持つている人が個人で祭る。一般的にはあまりしない。山の神を祭る人は一月十二日にする。正月のノシモチを一枚、半分は切つて二つに重ねオゴフウにする。赤飯をふかし、ゴマメを二匹持つて行つて、オサゴとオンベロとともに山の神様の石宮の前にそなえる。山の神に供えたものは家には持ち帰らないで、途中で人にしてくれる。

(行沢)

山の神が八株にある。少年自然の家の少し手前右の杉山の中の岩の上に石宮がある。昔はオンベロとオサゴ・ゴマメ・酒一升持つて行つておがんできて、山仕事を五、六人の仲間で酒を飲んで遊んだことがあつた。毎月十二日が祭日で正月は特に祭り、八月は休んだ。板割りや炭焼き、マキ(薪)伐りの人たちがやつた。(諸戸字日向)

山の神は山仕事をする人が五、十人もまとまつて毎月十二日に山の神さまを祭る。仕事を半日休んで、一年間無事に山仕事ができるように拝む。十二講というが、十二様とはいわないで、山の神さまという。

(行沢)

山祝いは山の神まつりのことで、山仕事をする人は、大きな山を買つた時などにお祭りをして飲んだ。十二講とはいわない。(上高田字下十二)

山の神の祭りは正月十七日する。神社の手前のお堂で、当番の者が菓子を買つて来て用意しておき、学校から帰つてきた子どもたちに分けてくれた。子守バアサンにもくれる。山の神は石宮があるが、登るのが大変だからお堂でやる。費用はムラの金で、足りない時は集めて歩いたりした。十二山の神といい、秋間の十二から来たという話がある。(上高田字下十二)

山入り 正月六日が山入りで、オンベロとオサゴを持つて山に入り、拜んでから木を切つた。神さまのボクと、オイベスサマの木を切つてきた。

大桁山の山入りは十二日で、それまでは山へ入つてはいけなかつた。

ワキザシやマイダマ木を切つてきた。(上高田字下十二)

(三) 屋敷内の神

屋敷神 毎年オカリヤを作りかえ、以前は十二月十五日の祭りのとき、小さい菱形の餅をまいた。オサゴ、赤飯、餅、幣束を供える。隣に石が置いてあつて、一緒に祀り、供物も同じである。これには屋根がない。(上高田)

屋敷神は稲荷様で、毎年十二月の初午、または午の日にまつた。(現在は十二月十五日にきまつている。)お飯屋の石にも四本の竹を立て、シメ縄をはる。石を立てたものもある。お飯屋をつくりかえてグシを上げるのだからというので、コモチ(米の粉の餅)を二升分くらいつくつて、庭に来て縁側から近所の子ども達に投げてくれたこともある。ひし餅の小さいもので、拾つた者はあぶつて食べる。(上高田字下十二)

屋敷神の石宮の隣に竹四本立てシメ縄を張り回してあるが、オカリヤという。オシリヨウ様の名は知らない。(八木連字大久保)

屋敷神として稲荷様をまつる。毎年新しいワラでお飯屋を作るのがいいと言つた。古いお飯屋のワラは燃して赤飯をたく。その灰を翌日お飯屋の下に納めた。(行沢)

某家(話者)の屋敷の配置は、向つて右に稲荷の石祠があり、中央に自然石がおいてあり、左にワラのオカリヤがある。中央の自然石は、先祖様で、屋敷を守つてくれる神だといわれてきた。これがある家は、古い家に限られる。名称はわからない。オカリヤはナラの木二本を柱とし、片流れに作る。十二月十五日が祭りである。

祭りには、赤飯ふかして紙の上に載せて供える。尾頭つきも供える。お参りしていっしょに食べて来る。帰りには後をみてはいけな。お稲荷さんが、食べるのをみられるのをいやがつて、みていると食べないからという。

豆腐を菱に切つてオムネアゲとして棟に供えた。市川マケでは、赤いシメをはる。

供えものが残ると稲荷様が守ってくれねえんだから気をつけるといわれた。(下高田字新光寺)

屋敷神は以前は十二月の戌の日に祭つた。今は十二月十五日となつてゐる。藁葺のオカリヤを造り、その前で赤飯をオテノクボで食べる。供物は鯛、赤飯、あとを振向かないで帰る。山下では米の粉の餅を投げ、子供達が拾つた。屋敷神様の隣、向つて左には丸石を置いてある。ここには十五日の祭り日に竹二本立て、シメ繩をはる。(下高田)

屋敷神様のお祭りは十二月十五日、オカリヤを朝から作る。以前は餅をついて菱形に切つて屋敷神にあげ、棟上げをした。オカシラツキ、赤飯を各家の主人が供え、家族も一緒にお詣りをして、その場で赤飯をたべ、家に帰るとき後を振りかえらない。屋敷神の隣に平らな石が置いてあるが、これには前に竹を二本立てシメ繩を張り、これにも屋敷神同様の供え物をする。(下高田)

大久保の岩井家の場合、屋敷祭りを十二月二十七日に行う。(他の家は十二月十五日に行う) 屋敷神の石宮の方へは、赤飯と「オカサネ」を二かさね屋根の上に供える。オカサネの作り方は、赤飯をふかす前に、まず餅米を湯呑みに一ぱい分とつておく。それを、すり鉢ですつて、水を入れ、こねて、まるめて作る。供えるときは、竹の葉を三枚かさねて、その上にのせ、石宮の屋根に供える。

オカリヤは二つユイ(作り)、これには米粉で作つたヒシ形の餅を二枚、サカキの枝の上のせて供えた。オカリヤのまわりには、竹四本を立てて、なわを張り、オンベロを十二枚さげた。竹の間毎に三枚、オンベロは下げられるから、四間で十二枚、下げることになる。この十二という数は、一年の月の数ともいわれている。また、家によつてはオカシラツキ(いわし)も供える。(八木連字大久保)

屋敷神の祭りは十二月十五日に行つた。昔は、その年ごとに新しい

お飯屋を作つてお祭りをした。ヒシ型の米粉で作つた小さい餅を投げた。これ子どもが拾つた。今から二十年ほど前までは、この祭りをやっていた。家によつては赤飯、イワシ、トウフ(ヒシ型に切つた小さなものを、ふたかさね)をお飯屋の尾根の上に供えた。このときの赤飯は、前の年のお飯屋の古材を燃やしてふかせといわれている。(上高田字下十二)

つぶれた家の屋敷神はそのままになる。ふつうは持つてゆくだろうがそのままになつた時、本家とか身よりがあれば祀ることもある。お飯屋だからたちまちなくなつてしまふ。(上高田字上十二)

屋敷祭りをするのに戌の日はわるい。丙申など、火に関係した日はわるい。(菅原)

屋敷神さまはお稲荷さんで、そのお祭りには、鯛と赤飯を上げる。

(中里)

ワカレ塔婆 死後三十三年の年忌にはワカレ塔婆としてエダ塔婆を立てる。

話者の家で、八十八歳で、昭和三十年ごろ死んだおばあさんは、つねづね「死んで三十三年たつてワカレ塔婆を立てると、お稲荷様に合併して屋敷を守ってくれる。」といつていた。話者の家では、今、「お婆さんは、まだ屋敷を守つてくれないねえ。」といつてゐるという。(下高田字本村)

オシリヨウ様 後閑(安中市)の兄から聞いた話では、オシリヨウ様がたたるといつて神主に拜んでもらつたという。近くの他人がたたるという。妙義町ではそうしたことは聞いたことがない。(上高田字下十二)

オシリヨウサマというのが田村義雄氏宅にある。屋敷稲荷祭りの時にまつり、赤飯を供えるという。(古立)

オシリヨウ様は中里にはない。稲荷様と並んで若宮八幡がある。(中里)



屋敷神(左)右手にシノ竹4本立ててシメ縄を張る(名称不明)(諸戸)(撮影 関口正己)



オシリョウ様、ロジ(ツボ庭)の奥に祭る。(諸戸字日影 星まつ家)(撮影 関口正己)

屋敷のロジ(ツボ庭)の奥に前からオシリョウ様という石を祭っていた。左横に高さ三十センチほどの石が立ててあるが、これは不明。オシリョウ様は屋敷祭り(十二月十五日)の時、笹竹を二本立ててシメ縄をはり、オベンペロ(御幣)を立てる。三が日には供え物をする。どういふものか不明。祖父は倉渕村から来たが、その前からあった。(諸戸)

(四) 屋内の神

神棚 魚類は必ずあげる。魚と塩とオサゴ(洗米)があれば、ほかに何も上げる必要はない。(中里)

釜神さま 釜神さまのお札は大神宮さまと一緒に来るので祀る。毎年サゲ穂(初穂)をかけてゆく。正月のお松はドンドンヤキにも出さずにとっておき、雷が鳴った時に水をつけて庭に出すとよいという。(上高田字下十二)

カマ神さまのことは三方荒神といい、正月のお札と一緒にカマ神の



お勝手の流しの上の棚にある恵比須大黒(日影) (撮影 土屋政江)

ヒゲンサマ 囲炉裏の神様。餅をついた時には、三つちぎって、囲炉裏の火にくべた。子供が火傷しないように、ヒゲンサマに供えるのだと言われた。(古立)

床の間の神 床の間には天照大神宮の掛軸をかざり、オンペロ(御幣束)がある。えびす講の時は床の間へえびす大黒をかざり、その前にお膳で供えものをする。麦を一駄売った金をそっくり穴あき銭で供えたものである。小正月にはまいだまを上げる。(上高田字下十



流しの上の棚にあるカマ神様(日影) (撮影 土屋政江)

お札を配る。家の留守番や火の安全を守る。「カマ神様のルスンギョウ」ということはいわれないが、「ルスンギョウだから何かうまいものを作る」などという(諸戸字木戸・久保)

田植が終ると釜の蓋の上に御飯をおき、ヘツツイの上に供える。釜神様に供えるわけである。その御飯はあとで動物にやる。家畜も一緒ににおおごとしたからという。(下高田)

ゴキブリは釜神様だから大事にするようにいわれていた。(上高田)

ヤセウマ(トビウマ)を釜神様のノリウマといって大事にした。ゴキブリとは違う。三つ屋ではいうが久原ではいわない。(下高田)

ヒゲンサマ 囲炉裏の神様。餅

二)

土蔵の神 倉の神は土蔵に祀つてあるわけで、正月にはお松やお供えを進げ、十一日のお蔵開きの日までは開けてはいけなし、入つてはいけなしとされている。(上高田字下十二)

エビス様 玄関から入つて、人の見える所に祀る。イワシ(サンマ)さがしと言つて秋刀魚は供えない。秋刀魚は鯛より格が下がる)を供える。今は鯛を供える。ほかに銀めしとケンチン汁を供える。(中里) オエビス講、恵比須様は十一月二十日に帰ってくるので、その日金銭を樹に入れて祭る。一月二十日は年改まつて働きの出掛ける日、茶だんすの上に祀る。以前はウドンをこねるメンバ板の上に祀つた。(下高田)

(五) 道の神

道祖神 大久保の弘法池の道端にあり、男女の神さまの像がほつてある双体道祖神は、寛政五年正月吉日の建立で、土地の人たちは兄妹結婚を戒めているのだと説明している。(八木連字大久保)

道祖神は辻にあり、文字で書かれた道祖神で、お祭りはドンドンヤキで、正月十一日のモノツクリの時、ワキサシを二本ヌリデンボウ(スルデ)でつくり、ドンドンヤキで焼いてこがし、一本は道祖神に供え、

一本は家に持つて帰つて魔除けにする。

(上高田字下十二)

道祖神祭として正月十四日の晩にはドンドン焼きをする。

戦前までは、これが済むと道祖神(道陸神ともいう)のヤテ



道祖神 (大久保)
(撮影 金子緯一郎)



石 仏 (北山) (撮影 阿部 孝)



大字菅原字宿の供養塔(左)と道祖神(右)
(撮影 近藤義雄)

エが出され、また道祖神と呼ばれる一組の扮装した嫁と婿が御祝儀のあつた家やタテジ(上棟式)のあつた家を回つてお祓いをした。ヤテエは上手の宿から尾崎まで引かれ、尾崎で折り返して戻ってきた。若い衆はヤテエに乗つて太鼓・笛などでお囃子をし、世話人がカジ棒を握り、子供等が綱を引いた。道祖神には嫁も婿も男になる。この役をするに嫁が来るといわれ、若い衆が扮したが、なりのいない時は世話人同士がくじを引いて決めた。嫁は、女衆の着物を着て髪も女形にし、姉さん被りに手拭いを被り、コダカラと呼ばれる五十七センチ程の長さのヌリデンボウの太い木(男衆の道具)に着物を着せたものを抱いた。婿は、神主の装束に烏帽子を被り、カシツ葉にオンペロを付けたものを持つた。新しい嫁をもらつた家に行くと、ザシキで道祖神の嫁が抱いてきたコダカラを新嫁に渡し、婿がその前でお祓いをした。これが終ると酒肴がふるまわれた。この道祖神祭りのうちヤテエの方は戦前までにやらなくなつていたが、嫁と婿の道祖神の行事は昭和二十五年前後まであつた。盛んな時には、他の町村からの見物人で一晚

中賑やかだったという。また、この祭りを執り行なう世話人は、菅原地区内の上宿・中宿・下宿・打越・尾崎の五つの集落から毎年三人位ずつバンテンガワリ（順番）に出された。ヤドは、中宿の公会堂が使われる以前はマルヤの屋号で呼ばれる吉岡家が代々勤めており、祭日前日の十三日にはみんなが集まってヤテエを組んだり提灯などの飾りつけをやった。（菅原）

道饗祭 七月の農休みの初日、総代が神社に行つて拜んでもらい、神社からお札がきてからやるので昼すぎになる。お札を竹の皮に包み、村の境に竹にはさんで立てる。厄除けであつて、このことは小当番がやる。（上高田）

みちあい祭りといつて、七月二十八日の石尊行の日に村の入口の辻に竹を立て、お注連をはり、まん中にお札を下げた。厄病神除けである。（上高田字上十二）

(六) 諸 神

ホウソウ神 春、赤ん坊がホウソウをした時には、麻がらのホウソウ棚をつくり、赤い幣束をつけて家につるしておき、タアラッパアシ（さん俵）に馬をつくり、馬の背に俵をつけるが、この中に赤飯をつめて背負わせ、三本辻に送り出した。（八木連）

ウリ天王様 初めてとつたキュウリは、キュウリにくれた「手」の上から供えて「ウリ天王様にしんぜます」という。二つ目に取つたキュウリから食べはじめると。（上高田字下十二）

ハゲン様 ハゲン様は働き者で、片足を田圃に、片足を畑につっこんだまま死んでしまったという。あまり働きすぎて、体にトゲが一升ささっていたという。（上高田字下十二）

ヘビガマ様 ヘビが群をなして玉になっていると、これを、ヘビガマ様と呼んだ。

ヘビに姿を見せないでほしい時は、線香を立てて「姿を見せないで



左 奉納千堂供養（北山）（猫神という）
（撮影 阿部 孝）

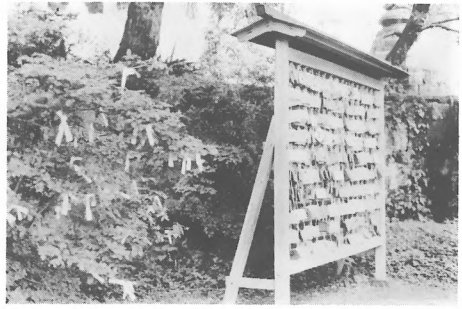
下さい。」と祈願すれば出ないという。（古立）
猫神様 三本辻に「千堂」と書かれた石が立つている。これを猫神様と呼んでいた。
猫が死ぬと三本辻に埋めることになつていた。
「猫も杓子も」といって、その上に杓子を立てた。（中里字北山・菅原）

猫の墓 三本辻の端に埋めて汁杓子をたてておいた。（下高田字新光寺）
鼠 ネズミは大黒様のご眷族だから、大黒さまの前でネズミの悪口を言うと、鼠にかじられる。鼠があばれて困る時は、盃に爪がたたぬくらいしつかりご飯をつめて、「鼠をしずめてくれる」と言つて大黒さまに上げると、鼠が静かになる。（中里）

(七) 祈 願

百本旗 病気が重くなると、近隣の人が百本旗をつくつて高太神社の石段のところを立てておいた。それを見たことがあるが、最近はない。（下高田字本村）

橋参り 赤ん坊が数え二歳のとき、妙義神社へ二つ子参りに行く。



妙義神社のおみくじと絵馬
(撮影 土屋政江)

その時西横野の別所(松井田町)の橋くぐりをして来る。橋には鹿の足あとがあるといわれ、ハシカが軽くすむというので連れて行くもので、そのついでに妙義へ行って来るともいえるという。十年くらい前までは行っていた。(上高田字下十二)

雨乞い 大久保の雨乞いは、年番が荒船山へ水もらいに行く。「水借りに行く」といい竹筒に入れてもらって来るが、途中でおろすとその地へ雨が降るといっているので、都合と迎えの人が持つて来る。この水は弘法の池にあける。

雨乞いには村人がみんな出て、池の前で酒を飲み、弘法さまの像を持ち出して池の水へ浸し、堀の水も出す。堀を切って流し出したものだという。

それでも降らない時には、正法寺の龍池山に登って、てっぺんで大火を燃して拜む。

こうすると大体降ったもので、降るまでやったものである。休んでは降りそうになるとまたやった。雨乞いの酒は村勘定で出した。榛名神社や貫前神社とは関係がなかった。(八木連字大久保)

北山では妙義神社の後の「大の字」まで出かけた。古立では荒船山まで水貰いに行ったこともある。行沢は七十年前に堰を引いたので、水は不便利じゃなかった。(行沢)

石尊行をすると、帰りが忙しいほど早く雨が降ってきた。(行沢)
日照りが続いて、作物が枯れそうになると、「大の字」へ行って雨乞

をした。祭り世話人が大太鼓をかつぎ上げて、大火をたき、「雨降れ降れ」と大声で叫びながら、太鼓を鳴らした。握り飯を炊き出しさせて、昼夜ぶつとおし、雨が降るまで太鼓を鳴らしつづけた。火をどんどん燃して、その炎が上に大きく上がるほど効果があるという。酒を飲みながら太鼓を鳴らすのは楽しいものでもあった。戦後は雨乞いをしなくなった。(妙義)

雨が降らなくて、待ちに待って待ちぬいてから、集落にフレを回して集まって雨乞いをするようになった。(諸戸字日向)

雨乞いは吾妻屋神社の奥の院(金鶏山ろく)に村中の人が集まって、酒を飲んで雨乞いした。奥の院の大岩の頂上で大火を焚いて、ホラ貝を鳴らして拜んだ。「雨雲コッチコイ」と呼んだりした。(諸戸字日向)

金雞・金洞の間に湧き水が出て一、二坪の水たまりが二十も三十もある。そこへ諸戸全体の者が登って、淵に石をぶつこんで水を押し流すと、一時に水が流れ出し、ヤマメ、カジカなどの魚が取れた。それを「山沢ザライ」といって、雨乞いの最初にして神社を怒らせた。区長が六尺ふんどしを振り回して音頭を取って、ワーワーと喚声をあげ、唱え言をした。「アーレニ見エル雨雲、コーレニカル夕立」という。多少でも必ず降った。(諸戸字日向)

雨乞いときは榛名山へ水借りに行き、竹筒に水を入れて、途中どこでも休まないで持つて来た。休めばそこに雨が降ってしまうという。五里くらいの道のりを自転車で行ってきた。(諸戸字日向)

雨乞いは大正の初めの頃伏見神社でやったことがある。各家から麦わらを持つて行って火を燃し、煙が上って雨が降るといった。荒船山から水をもたらしてくるともいう。昭和の初め妙義神社に祈願したことがあった。農休みがくるのに田植えが出来ず、さんざ雨乞いしたら八月中旬に夕立が降り、これで田植をしたが、そのあと雨がなく、田の草取りもなかったことがあった。(下高田)

雨が降らないと田圃をしつづけるのに困る。そんなときは阿夫利神社



石尊行をした高田川 (撮影 阪本英一)

にお参りする。

お天気まつりはやらない。(菅原)

雨ごいには神社で火をもした。毎戸から麦がらを集めてもした。みこしが出たこともあった。寺(生寿寺)にオライレン様があつて、そこへみこしがゆくと雨が降った。そのとき次のように唱えた。

アールの山の雨雲

コーレへきてまける(下高田字本村)

石尊様 大山石尊行といい、農休みすぎの七月二十七日、橋のたもとに竹を立て、水を浴びて行をした。(下高田)

大山石尊行といって、七月二十七日にボンデンを二本ずつ橋の所に立てて水をかけて祝う。お行ともいう。(行沢)

昔は七月土用、二十日ごろ、麦わらで俵の径二〇センチくらいのをつくり、紙でまいて長い竹にさしてオボンデン(御幣)をさげ、川の流れに立てて、まわりから水をかけて、「サンゲ サンゲ ドッコイ サンゲ」などと唱えた。オボンデンは川原においてくる。本村全体で

やった。そのあといっしょに飲んだり食ったりした。(下高田字本村)

石尊行はもとは七月二十八日にやった。熊野神社に宮司を招き、祭典をやったあと川原に注連を立てて、サンゲサンゲで水をかけた。八木(連)の人はふんどし一つでやったが、下十二の人はいくらかやったぐらいである。宮番が四人いて、その中の大きな家を宿にして、味噌か漬物の肴で酒を飲んだ。魚は使わなかった。近年は農休みの翌日(農休みガラという)にするようになった。

(上高田字下十二)

石尊行は七月二十八日にやっていた。高田川に出て、川の向うとこちらへシメをはり、裸になってフンドシ一つで川に入り、川上に向って並び「サンゲサンゲ六根清浄 大山石尊大権現、大天狗小天狗」と唱えながら水をかけた。しまいにはお互いに水かけあいになったりした。石尊行がなくなる前は当番の者だけでやるような年もあった。

(八木連字上八木連)

石尊行を十年ほど前までやっていた。七月二十八日のことで、竹竿の先の方にわらを束ね、御幣束をさして川原に立て、川をせきとめるようにシメをはり、男衆がフンドシ一つで川に入り、行を三回唱えて水をかけた。祝詞は「オノモオノモコイノミマツリ カケマクモカシコキ大山阿夫利大神 大山祇大神 前ノ社ハ高竈大神 奥ノ社ハ大雷神 守リ給ヒ 恵ミ給ヒ アワレミ給ヒ 事ウマラニミシルシヲタテシメ給ヒ サキワヒ給ヒトカシコミカシコミ申ス」と三回くりかえして川上の方へ水をかけた。これをすますと道あえ祭りにうつった。(八木連字下八木連)

三、俗 信

丑の刻参り 話に聞くぐらいで実さいには見たこともない。(上高田)

祈りくぎ 高田のあたりでは見たこともないが、カラス(松井田町)の神社で、ご神木の杉に人形をつくって打ってあったことがある。(上高田)

生れかわり 人が死んだとき、しるしをつけてやると、その時生れたどこかの子にそのしるしが出るといふ。誰さんの生れかわりだといふが、具体的なことはわからない。(下高田字本村)

人魂 人魂は赤いような、青いような色をしている。丸く、尾をひ

いている。二十歳までに見ないと一生見ないという。また二十歳前に見ると出世しないという。(下高田字新光寺)

大荷場の下へ犬をつれて猟に行つて夜になつた時、径二尺ほどの大きな火の玉がこつちに向けてころがつてきた。犬には見えないのか平気だった。よっぽど鉄砲を打つかけようと構えてみたが、あとがおそろしくて打てなかつた。ころがつてきて丁度目の前にきてパタツと消えたが、ほんとに気味が悪かつた。きつねのワザだつたらう。(諸戸) 狐つき 急におとなしくなつたり、変なことをいふと狐がついたといつた。またつかれた人が屋根を飛び廻つていたとかいふ。(上高田) キツネにまやかされるとそこいらをおし歩いた。またコバからコバに飛んだり、屋根から屋根に飛び移つたり、飛び上つて高い所に止つたり、それでよく折れないものだど驚いたものである。十二の人で医者やオガミヤさんに連れていつた。(下高田)

十二の人は、きつねつきになつて物干竿の上にとびあがつたり、屋根の上に立つていたりしたという。

オーサキ 飼うとだいじんになれる。米でも粉でもからだにつけてもつてくる。月に一度、赤飯をふかしてたべさせる。おひつのふちを叩くとやつてきて食べる。こんな話はあるが、現実には被害にあつた話など聞いたこともない。(下高田字本村)

茶わんや釜の端などたくとオーサキがくるからするものではないといわれた。某家で神棚のところを飛び歩いてたといふ話を聞いたことがある。(上高田)

家で飼っているオーサキがいるといわれ、ノラオーサキは群をなしているといふ。また畑にも出てくることあるともいふ。大きさは二・五〜三・〇寸位の小さい動物だといわれている。人間に憑いたことは聞いたことがない。(上高田)

四、仏教民俗

(一) 寺・堂

正法寺 大久保にあるお寺は、竜池山正法寺といい、真言宗豊山派で、いまは無住のため松井田町の不動寺が兼務している。この寺は昔、弘法大師が諸国をまわつた時この地に足を止め、草庵をつくつて数カ月住んで村人に法話をしてくれたが、別れにあつて村人の願いを聞いて、坐像を彫つて与えたので、これを本尊として寺を建てまつた。後小幡城主の祈願所となり、中之岳神社への道筋で休み所としても使用していたといふ。明治年間に火災があり一切を焼失したが、後再建して今日に至つていふ。いつの頃から無住になつたか、昭和初年ころは、ワトウ坊主といふ諸戸の人がいて、少しはお経を唱えることをしたが、その人の後は全くの無住になつた。檀家だつた岩井イッケが坊さんとけんかして丹生の金乗寺へ移つてからは、黒沢・久保原の人々が十四戸ほど守つていふ。(八木連字大久保)

随応寺 天台宗の寺が妙義小学校の裏手にある。墓地には堂もあり、山門には不動様を祀る。(諸戸)

随應寺は小学校裏にある寺で、山門は明和二年(一七六五)妙義神社の石垣を積んだ余りを持つてきて積んで山門の石垣を作つた。(諸戸字日向)

随應寺はもと妙義神社のところにあつた。明治のはじめ神仏分離で菅原へ移つた。

明治五年の神仏分離の打こわしのとき、菅原上宿の石の塔がこわされたり、地蔵様も倒されたりした。(菅原)

寺の土地 金鶏山陽雲寺は曹洞宗の寺で、以前は国から払い下げた六十町歩の山(実際は百町歩位)もあつた。竹田福松外六三名の書類



随応寺山門 内部に不動尊を安置する。
(諸戸) (撮影 関口正己)



菅根堂 (中里) (撮影 阿部 孝)

になつていた。(菅原)

薬師様 随応寺にある不動様の電気を引くために念仏組の人達で毎月五銭ずつ積み立てて電気をひいた。(諸戸字日向)

薬師さまはお堂に入っている。目の神様で四月八日がお祭り、目の悪い人がオガンシヨをかけて、オガンシヨバタシに半紙にその人の年の数だけ「め」の字を書いて進げる。昔はかなり上つていた。(上高田字下十二)

薬師さまが村にあり、馬に乗つてふうかぶり(ほほかぶり)して通つても、薬師堂の前では馬から下りて、手ぬぐいをとつて拜んでから通つたものである。(上高田)

菅根堂 阿弥陀如来をまつている。葬儀道具を入れておく。毎年十一月の農閑期には念仏説教があつた。遠く碓氷の方からお参りする人があつた。

なんたら阿弥陀様と呼んでいる。この脇に胎児の墓地がある。(中里)



馬頭観音 (寛政5年) (中里)
(撮影 阿部 孝)



安産の観音さま (上八木連)
(撮影 阪本英一)

(二) 観音信仰など

北向きの観音様 厄除けで有名。竹松にあり、一月一八日がお祭。共有田ができた時からお祭りをしている。昔競馬をした頃はこの観音様をモッコに入れて四、五人でかついで行って競馬場に立てておくとケガがない、と言つて運んだものだった。参詣者が沢山いて五十六年にはオサイ銭が十

万円も上つた。陽雲寺の坊さんがおがむ。「ハチムネ(八棟)造りの屋根でないと燃えてしまう」といったが乞食でも火を出したかもしれない。

今は方形作りだが火事にもならない。オサイ銭で「厄除北向観世音」のお札をつくり、ミカンなどをオゴフにする。(行沢)

安産観音 八木連集落センター西隣りの石仏の中の観音さまは、安産の観音さまで安産の祈願をする。(八木連)

馬頭観音 埼玉県上岡の馬頭観音を信仰していた。陽雲寺に、この観音の分霊がまつられている。ここではお札は出さなかつたが、四月一日と二月十八日には馬を連



絵馬堂（陽雲寺）（埼玉県上岡観音勸請による）
（撮影 阿部 孝）



ショウヅカノバアサン・ジイサン 墓地の入口にある。カゼの時真綿の帽子をかぶせて拜む。（諸戸 随応寺裏の墓地）（撮影 関口正己）

れてお参りをした。埼玉の上岡の観音にも安全祈願に行きお札を受けたり、笹の葉を貰って来て、馬の腹に与えることもあった。（中里）菅原の陽雲寺に馬頭観音があり、お祭りに馬を連れていった人もいるが、下十二からは連れていかなかった。（上高田）
下十二の川原に松の木があり、その下に馬頭観音を祀ってあった。馬捨て場といったところで、荷鞍が古くなるとそこへ祀った。正月二日に馬を曳いて行き、一年中けがのないように拜んで来た。

馬をオトシテ（死なせて）埋めると個人で馬頭観音を建てたりした。（上高田字下十二）

馬の神は馬頭観音さまで、埼玉の上岡の観音さまや、菅原の陽雲寺から絵馬をもらって来て、馬小屋の柱の左側にくぎでぶつけておく。牛になつては牛の絵馬もできた。オソウゼム様ということは開かない。

（上高田字下十二）

ショウヅカノジイサン・バアサン 随応寺の墓地の入口に、ショウヅカノジイサン・バアサンの石像がある。風邪をひいた時に、真綿の

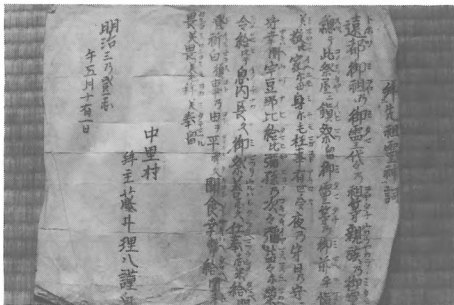
帽子をかぶせると頭痛がなおるといふ。（諸戸字日向）
お滝 ツメビキ不動・トゲヌキ不動がお滝の上にある。お滝にかかれば病気にかからないという。（行沢）

（三）先祖まつり

先祖祭り 大久保の岩井家では、先祖祭りを九月十五日に行った。墓地にある先祖祭り用の石祠に、赤飯、煮しめなどを供え、線香をあげて拜んだ。また、石祠のそばに先祖祭りの旗を立てた。旗はダブル幅の長さは九尺ぐらい。紺地に文字が白く染めぬいてあった。文字は、何んと書いてあったか思い出せない。先祖祭りは岩井家でも、この旗を持つているうちだけが「うちつきり」でやった。時には他の岩井家のものと呼んだこともある。旗を持つている家は二軒ある。（八木連字 大久保）



墓地にある先祖まつりの石宮（大久保・岩井家）
（撮影 金子緯一郎）



先祖霊神の祝詞（明治3年）（中里）
（撮影 阿部 孝）

(八戸)は十二月十五日。宿は順番、以前は先ず十時頃先祖様(各家とも石宮がある)に詣り、帰ってコワメシ、ニシメ、酒などで祝宴をする。須藤家は藤井家から婿に行った関係から、藤井家は藤井・須藤家の両方の先祖祭祀をする。(下高田)

清水姓のものと永井姓のものがある。十月十五日に十二タレの御幣束を新しく進げて、マケの人たちが集まって拜む。煮つけもの、赤飯、酒一升を供え、その場で飲むマケとがある。(上高田字下十二) 仏壇 赤飯は上げない。おかしらつきや、魚の切り身など、魚類もあげてはいけない。天ぶら(精進揚げ)類はあげてもよい。(中里)

五、念 仏

(一) 念 仏

念仏組 昔は年よりが念仏組を作っていた。鉦や座布団や本などもある。鉦をたたいて念仏を唱えた。和讃はない。(行沢)

念仏 随応寺にある不動様の畳を作る目的で念仏しながら浄財を集めた。法眼(念仏の師匠)が頭で年寄りの女の人ばかりが入っていた。念仏は「四日・八日に十二日」といった。十二日は薬師様、十六日は



念仏供養 銘己3月日女人
(古立)(撮影 阿部 孝)

大日様の十六日念仏など、こういう日に宿を回って習ったり申したりした。春彼岸・秋彼岸には托鉢に出て米を集めた。(諸戸字日向) 今は葬式とか年回の時にやるが、あま



不動明王
随応寺山門内に祭る。戦時中に木剣奉納。
毎月28日が縁日。(諸戸) (撮影 関口正己)

りしなくなった。伝統を絶やすなど五十代の人も入っている。昔はイモの煮ころがしや沢庵なんかでお茶をのんだり習ったりした。今は二百円から五百円ぐらい包んで念仏に行くと御馳走してくれて、引き物など出ず家もあつて具合が悪くなつてあまりしなくなった。(諸戸字日向)

大久保の念仏 寒行の念仏とは別に、女衆のやる念仏があり、毎月十六日に宿をきめてやつたので十六念仏ともいった。ちよつとしたものをつくつて、お茶を飲んだ。女衆の話し合いの場になつていったが、戦争中にやめになり、そのまま終つてしまった。(八木連)

葬式の時、男衆が念仏をした。輪まわしにして「ナムマミダブツ(ナムアミダブツ)」をくりかえしているもので、太鼓と鉦で拍子をとった。線香を一本立てて(代表が立てて)これが終るまで唱えている。一本終ると何か茶がしが出で一休みし、更に線香を立てて唱える。線香が終るとやはり何か茶菓子が出された。こうして三本目が終るとキヨメの席になった。岩井文吉さんの父がなくなつた時にやめた。太鼓や鉦のたたき手がなくなり、おおごとになつてきたので施主の申し出で止めたが、その後はやっていない。(八木連字大久保)

イヌの念仏 菅原にはあるがこちらにはない。(下高田字本村) 二十二夜様 ムラの裏山に二十二夜様を祀つてある。昔、この村ではお産でなくなる人が多かつたので、それまで放つておかれたお堂を直して、毎月二十二日を二夜様の日ときめてお参りし、宿で念仏を唱



二十一夜様の道具 (下十二)
(撮影 阪本英一)



二十一夜様のオコシ (下十二)
(撮影 阪本英一)



二十一夜様の掛軸
(下十二)
(撮影 阪本英一)



二十一夜塔
「回向女人講中 弘化五申二
月吉日」と銘あり。
(諸戸 随応寺門前)
(撮影 関口正己)

えてお祭りをするようになったところ、お産でなくなる人がいなくなつたと伝えられている。近年まで毎月二十一日の昼間、宿をきめて掛軸をかけロウソク(長ロウソク)や線香を立てて拜んで念仏を唱えてお祭りをした。このロウソクは短かくなるととっておき、お産の近い人がもらうて行つてこのロウソクを燃やすと、ロウソクの燃えきらないうちに産ませてくれるといつて方々からもらいに來たりした。また晒布などで小さいオコシ(腰巻の小さ

集まつて念仏を唱えている。掛軸や道具とかオコシなどは部落の集會所に保管してある。

二十一夜様の念仏

婦妙頂來 ありがたや

二十一夜まち まつ人は

しみづあらため 身をきよめ

心の悪心 持たずして

しんじんけんごの 身を持ちて

菩薩を押し 給うべし

女人 菩薩の ごがんにほ

あまた女人の 身代りに

血の池地獄へ 落ちるおり

すでに入らんと したまえば

あらありがたや ふしぎやな

池より蓮華が 現れて

左右の御手で みどり子を

いだきあげさせ 給うべし

右の御手で 招きつつ

われを念ずる 人なれば

いもの)があるものでこれも一緒に借りて行くことになっており、お礼にはもう一つオコシをつくつてお返ししたり、菓子をお供えたりする。二十年ぐらい前までは、ムラの嫁とか、嫁ぎ先の娘たちのお産の時は、きちんと念仏を唱え、集まつてきた子ども達に菓子を分けてくれたりもしたものである。

現在は年一回になつたが、それでも

血しゃく けっかい 血のやまい

長血 白血の やまいでも

薬効能 ましまさば

たちまち快気 いたすべし

子のない女人に 子を授け

産前産後の 大難も

安産にして えさすべし(上高田字下十二)

二十二夜様の掛図があった。宿は順番で掛図、鉦も順に廻った。寄つて念仏を唱えたが、後には念仏を唱えることもなく、お茶飲みの話をするだけになった。(下高田)

二十二夜様は女だけの集まりで、宿は順番、お念仏を唱えた。(下高田)

二十二夜坊主 二十二夜様を拜みに歩いて坊主がいた。これを二十二夜ボーズと呼んでいた。オサゴをくれてやった。むかし、二軒在家の寺から来たという。(大久保)

二十二夜様は五、六十年前にやったらしい。ヤドを決めて、としよりにたちが集まっていた。(下高田字本村)

二十三夜 男子のみ参加して女衆には手を掛けさせないで馳走を作って食べた。お粥を作って食べて解散した。



寒念仏 (中里)

(撮影 阿部 孝)

ここには十六夜、十九夜はなかった。二十六夜という話があった。夜明けまでお籠りするので大へんだったという。(古立)

寒念仏 寒に申す

から寒念仏という。

今はしないが昔は諸戸の中で信じる年寄が出てやった。(諸戸字日向)
中里では、寒念仏はなかった。(中里)
大久保には久原の寒念仏の道具が正法寺に納めてあるといっているが、久原では寒念仏をやったという話は伝わっていない。(下高田字久原)

(二) 諸戸念仏集 I

四方がため

ほとけをたのめ みなせじよう

ほとけのじようどを おしえべし

東はとうほう るりこなり

やくしによらいの じようどなり

南はなんぼう ふだらくの

かんのんさつたの じようどなり

西はさいほう ごくらくの

あみだによらいの じようどなり

北はほつぼう こんごうの

しゃかむによらいの じようどなり

天はしみせん よをてらす

下はくほんの じようどなり

じつげつほしの じようどなり

さほどのせかいに うまれきて

おね仏もうせよ みなせじよう

花わさん

きみようちようらい はなわさん

たまのようなこをもちて

ちようよはなよとそだてしが

むじょうのかぜにさそわれて
ついにむなしくなりたもう
あまりわがこがかわいさに
ふうふ三年しゆぎようして
いくせのひとをみたれども
わがこににたるひとはなし
めぐりきたぞよはなでらに
寺のしよえんにこしをかけ
はなをつくづくながむれば
ひらきしはなはちりもせず
つぼみしはなのちるをみし
すなわちわがこもあのごとく
いごはいうまいなげくまい
とりはふるすへかえるとも
わがこのかえるたねはなし
おちるなみだはこの寺の
いけのはちすのつゆとせん
おねぶつもうしてかえるべし

四十九日

七日七日の七七日

四十九日のそのうちは

おねぶつもうしたえとくには
ふしぎあるぞよくらくに
みだのおのりのおむしぶね
さんずの川まででむかえに
これのほとけのなかにのせ
みだのじょうどにいりにけり

やくしさま

きみようちようらいやくしさま
やくしのほんじをたずぬれば
やくしのほんじはこれここに
いちのきだはしのほりあげ
にのきだはしながむれば
からかねわにぐちかけそろえ
またもそのおくながむれば
あややにしきをかけそろえ
またもそのおくながむれば
十三ばかりのおんちごが
あまのはごろもめしたまえ
えりにはぶだいのじゆずをかけ
むらさきすずりにゆえんずみ
ひだりのおんてにおりがみを
みぎのおんてにふでをもち
すみたふたふとふくませて
四日八日と十二日
二十二日のどうさしゆう
のこらずおちようにおつけあり

高野山

きみようちようらい高野山
こうぼうだいしのいにしいは
くにをもうさばあわのくに
びようぶがうらにておたんじよう
なはくうかいともうすなり
しんごんしみつをひろめたり

しよしよくにぐににめいしよたて
いまはこやにてらをたて
にほんいちなるめいざんと
みなひとびとがまいるなり

じぞうさん

きみようちようらいじぞうさん
これぞめいどのいちのきど
じぞうぼさつのおんまえで
ゆかいちようじてみをきよめ
づたつかんむりえりにかけ
わらじはばきのひもをしめ
こんごうづえを手にもちて
しでのやまじをのぼるとき
あとふりかえりながむれば
こいしきしやばはとわくなる
いやなめいどいちかくなる
けさまでそいしおやこでも
わかれてゆくのは世のなられ
たのみまするじぞうさん

善光寺

きみようちようらい善光寺
によらいのほんじをたずぬれば
によらいはもとよりてんじゆくの
がつかいちようしやのごこんりゆう
とうと日本のごらいこう
もりやのだいじんあんしんで

えんぶだごほんのほとけおぼ
なんばがいけへとしずみおき
みはことに心はしなの善光寺
みちびきたまえよみだのじょうどへ
そのときほんだのよしみつが
もりたてまつるがしなのなり
かはななじまえんちして
ひとたびまいるともがらに
みだのごはんをいただいて
みらいのごえんをむすぶべし
日本一なるみだによらい。

親わさん

きみようちようらい親わさん
はかばじるしのいこいの木
うえてそだてて花さかせ
その実をとりてじゅじゅにして
じゅじゅくるたびに親おがむ
親はこのよのみだによらい

親わさん(春)

きみようちようらいおやさまの
はかばじるしのこぼくうめ
えだはここのえはなはやえ
すえのこえだにうぐいすが
にしをむかいてほけきようよむ
さぞやほとけもうれしかる。

①

彼岸念仏(てんとうさま)

きみようちようらいてんじゅく
てんとうだいにちによらいさま
あまのいわだにひきこまり
しじゅうせかいがやみとなり
にようやくなんによにいたるまで
なげかぬものはさらになし
あまた神々あつまりて
ちようのむかぐらまいられて
いわとのとびらのすきまより
かげさしたまうありがたや
とかくさまがかけよりにて
いわとのとびらをひきはなし
てんとうさまをつれかえし
むかしがいまにいたるまで
てらさしたもうありがたや。

②

彼岸念仏

きみようちようらいまいとしの
おひがんさまとて春と秋
これぞほとけのかよいみち
ひがん七日のそのうちは
ごせんぞさまもごゆさんで
ちやとうちやむけもおろかなく
ここのけむりでうかぶべし
ついぜんくようをいたすべし
しそんはなおまたすえながく
守らせたもうありがたや

法事

きみようちようらいこの家の
これの仏じをながむれば
ごせんぞ祭りか大法事
一家もんじが集まりて
いつせさんせのおんとうば
たてて子そんがほんじようする
その人けんごですえながく
守らせたまいのありがたや。

十三仏様

ふどう しゃか もんじゅ ふげん
じぞう みろく やくし かのん
せいし あみだ あしく だいにち
こくぞう おたすけなされよ十三仏よ
さんずのしよぼさつなむあみだ

ただいま申したお念仏は
まことにそのばいのぞいては
十年となえるひまもなし なむあみだ

さいのかわら

もののおわれはここにまた
これはこのよのことでなし
さいのかわらのものがたり
二ツや三ツや四ツ五ツ
十よりうちなりおさなごが
さいのかわらにあつまりて

小石をひろうてとうにくくみ
 いちじゅうくんでは父のため
 にじゅうくんでは母のため
 三じゅうくんではふるさとの
 きょうだいわがみのえこうして
 じごくのおにがあらわれて
 つんだるとうをおしくずし
 またつめつめとせめければ
 おさなごあまりのかなしさに
 ここよかしことなきあるく
 じぞうぼさつがあらわれて
 なにをなげくのおさなごよ
 なんじが父母しやばにあり
 めいどの父母われなるぞ
 けさやころもにつつみしが
 かやばのようなひぎをたて
 もみじのような手をあわせ
 我がみはならくに落るとも
 しやばの父母たすけたまえ
 じぞうさん
 ああありがたやじぞうさん
 ふどうさま
 きみようちようらいふどうさま
 みねよりおちるたきの水
 むすびとどめるひとあれど
 じようどうさだめるいのちおぼ
 むすびとどめるかみはなし

なんとちぎりしおやこでも
 じようめかわればおそろしや
 いちやのやどもかさどして
 いそげのべえとおくりしが
 のべまでもするひとあれど
 のべからあなたへただ一人
 あめかせあらしでみてみえじ
 なみだおさえてつじにたち
 たすけたまえふどうさま

おくり念仏

- 一 なむだいしよう ふどうみようおう
- 二 なあむ しゃかによらい
- 三 なあむ もんじぼさつ
- 四 なあむ ふげんぼさつ
- 五 なあむ じぞうぼさつ
- 六 なあむ みろくぼさつ
- 七 なあむ やくしによらい
- 八 なあむ かんぜおん
- 九 なあむ せいしぼさつ
- 十 なあむ あみだによらい
- 十一 なあま あしくによらい
- 十二 なあむ だいにちによらい
- 十三 なあむ こくぞうぼさつ

(三) 諸戸念仏集 II

先言
 我昔所造諸悪業皆由無始貧瞋癡從身口意

之所生一切我今皆懺悔功名返上念仏
 修業せつしうしや

終り言葉

願くは此の功德を以て あまねく一切に
 及ぼし 我等を世上と皆共に 仏道を成
 ぜん事を

おふた

只今申したお念仏を
 黄金のお盆に積み上げて
 綾や錦をうちかけて
 弥陀様あなたに差上げて
 極楽浄土へおさむべし
 おいとま申していざもどる

三回

初夜の初め

宵にお念仏 夜中に法華経
 明時成仏 ナムアマミダー 三回

終り

只今申したお念仏を
 最後の除念とおぼしめせ
 誠にその場にのぞみては
 重念となえるひまもなし

ナムアマミダー 三回

穴ばた念仏

帰妙頂来 六地藏

野辺の細道 ふみわけて

ききょう かるかや うえたまえ

花をたよりに 極楽へ

ナムアミダブツ

ナムアミダー

地藏さま

帰妙頂来 地藏さま

これぞ冥土の 一のきど

湯がいちようずで 身を清め

わらじおぐきの ひもをしめ

づだかんむり えりにかけ ナム

金剛杖を 手に持ちて

死出の山路へ のぼるとき

後ふりかえり ながむれば ナム

恋しきしゃばは 遠くなり

いやな冥土へ 近くなる

今朝までせいし 妻や子に ナム

別れてゆくのが 世のならい

助け給へよ 地藏さま

弥陀の浄土へ 急ぐなり ナム

不動尊

帰妙頂来 不動さん

峯より落つる 滝の水

むすびとどめる 人あれど ナム

浄土定まる 命をば

むすびとどめる 神はなし

何とちぎりし 親子でも ナム

しょうめ変れば おそろしや

一夜の宿も かさずして

急げ野辺へと おくられる ナム

野辺まで供する 人あれど

野辺よりあなたへ ただ一人

六道さいごで 行くけれど ナム

雨風あらしで 道見えず

涙おさえて 辻に立つ

助け終へよ 不動さま ナム

弘法大師

帰妙頂来 高野山

弘法大師の 古へは

国を申さば 阿波の国 ナム

びようぶが浦に 御誕生

幼い時より 出家して

名は空海と 申すなり ナム

真言ひみつを 広めたり

これより諸国を 修業して

所々国々に 名所たて ナム

今は高野に 寺を立て

日本一なる 名山と

皆人々が 参るなり ナム

花と紅葉も 一盛り

思へば人も 一さかり

散りにし花は 根に返る ナム

二度と帰らぬ 死出の旅

死出の旅路に 向いては

誰もともらう 人はなし ナム

たのむは弥陀の おん近く

観音勢至の 弥勒尊

三世の諸菩薩 もろともに ナム

弥陀の浄土へ 急ぐなり

善光寺

帰妙頂来 善光寺

如来の本寺を たずねれば

如来は元より 天竺の ナム

「身はここに 心は信濃の 善光寺

みちびき給へよ 弥陀の浄土へ」

がつかい長者の 御建立

とうとう日本へ 御来光

もりやの大臣 悪心で ナム

えんぶだごんの 仏をば

なんばの池へ しずめおき

その時本田の 善光寺が ナム

池のほとりを 通りこし

本田本田と お呼びある

善光不思議と 立ち止まり ナム

池の中より 御光さし

その時本田の 善光が

池の中より すくい上げ ナム
守り奉るが 信濃なり

川中島へ 安置して ナム
一度参る ともがらに ナム

弥陀の御判を いただいて
未来の御縁を 結ぶべし

日本一なる 弥陀如来 ナム

親和讃

帰妙頂来 親様の

墓場じるしの えごえの木
植えてそだてて 花咲かせ ナム

その実をとりて 珠数に
珠数繰るたびに 親思い

親はこの世の 弥陀如来

薬師さま

帰妙頂来 薬師さま

薬師の本寺を 尋ねれば
薬師の本寺は これここに ナム

一のきだはし のぼり上げ
二のきだはしで ながむれば

白がねづくりの 御堂たて ナム
白がねづくりの 御前に

からかねわにぐち かけそろえ
又もその奥 ながむれば ナム

綾や錦を かけそろえ
又もその奥 ながむれば

十三ばかりの おんちごが ナム
天の羽衣 召し給い

えりにはぼだいの 珠数をかけ
紫硯に ゆえんずみ

右の御手に 折紙を
左の御手に 筆を持つ

すみたふたふと ふくませて ナム
四月八日と 十二日

二十二日の どう者衆を
のこらず御帳に おつけある ナム

法事と讃

帰妙頂来 これへ来て

これな座敷を ながむれば
先祖まつりか 大法事

花や塔婆や 盛りもので
一家もんじが 集まりて

お経づくしの ありがたや
立てて子孫が 繁昌して

その人けんごに 末長く
守らせ給うの ありがたや

観世音

帰妙頂来 観世音

大悲の御徳 深きこそ
代々の仏も およばれず ナム

如何なる願を おこすとも
いちいち利益 あり給う

現在無福の 人々も ナム
朝夕忘れず 祈るべし

福寿の海は 深けれど
無量の福も さずかりて ナム

此の世ゆたかに 未来まで
たりぬ事こそ なかりける ナム

四十九日念仏

七日七日の 七の七日

四十九日の その間
お念仏申した 得とくには ナム

不思議あるぞよ 極楽へ
弥陀のおのりの 御召舟

三途の川まで お迎えに ナム
これの仏を 中にのせ

弥陀の浄土へ 急ぐなり

彼岸

帰妙頂来 毎年の

お彼岸様とて 春と秋
これぞ仏の 通ひ日 ナム

彼岸七日の その中は
御先祖さまも 御遊山で

茶とう茶むけの おろかなく ナム
追善供養も いたすべし

香の煙で うかぶべし

四方がため

- 1 南無大聖不動明王 エエナンマイダ
- 2 南無釈迦如来 //
- 3 南無文珠菩薩 //
- 4 南無普賢菩薩 //
- 5 南無地藏菩薩 //
- 6 南無弥勒菩薩 エエナンマイダ
- 7 南無薬師如来 //
- 8 南無観世音 //
- 9 南無勢至菩薩 //
- 10 南無阿弥陀如来 //

11 12 13

- 11 南無あしく如来 //
- 12 南無大日如来 //
- 13 南無虚空蔵菩薩 //
- お助けなされよ十三仏よ //
- 三世の諸菩薩南無阿弥陀仏 //
- お中日念仏
- 婦妙頂来 天竺の //
- 天とう大日 如来さま //
- 天の岩戸へ ひきこもり ナム
- 世上世界が 闇となり //
- 老若男女に いたるまで //
- なげかぬ者として さらになし ナム
- あまた神々 集まりて //
- 千代のみかぐら 参られる //
- 岩戸のとびらの すき間より ナム
- かげさし給うの ありがたや //
- 戸隠様が かけよりに //
- 天の岩戸を おし開き ナム
- 天とう様を つれもどし //
- 昔が今に いたるまで //
- 照させ給うの ありがたや ナム

正一位

- 婦妙頂来 正一位
- いなりの礼前 新たなり
- 此の神何部の 生命は ナム
- 三国一の えき者なり

右と左に 妻や子を
抱いて寝る夜の むつ事に ナム
手習字問 精出して
どうりで狐の 子じゃものと
人に笑われ くれるなよ ナム
とはいうものの 可愛いやな
涙ながりに わかれ行く
(出でて)

賽の川原

もののあわれや ここにまた
これは此の世の ことならず
さいの川原の 物語り ナム
一つや二つや三つや四つ
十より内なる 幼子が
さいの川原に 集まりて ナム
小石を集めて 塔をくむ
一重くんでは 父恋し
二重くんでは 母恋し ナム
恋しくと 泣く声に
かしゃくの鬼が 立ち出でて
組んだる塔を ふみくだき ナム
まだ積み積めと せめられて
悲しや悲しやと 泣く声に
地藏菩薩が 現れて ナム
何をなげくぞ 幼子よ
しゃばに父母 あるにせよ
冥土の父母 我なるぞ ナム

袖や衣に 包みして

ようじのような ひぎを立て

かやばをみるよな 手を合せ ナム

我身は奈落へ 落ちるとも

しゃばの父母 助け給へよ

地藏菩薩様 ナム

施餓鬼念仏

婦妙頂来 ありがたや

木れん様の 母上は

根がよこしまの 心にて ナム

餓鬼の責苦に あいにけり

呑まんとすれば その水は

炎となりて 燃え上がり ナム

山の木の実も その枝も

剣となりて身を切りぬ

木れん様は ひと目見て ナム

赤子のごとく 泣きいだし

東に走り 西にとび

救い出さんと あせりたつ ナム

やせおとろえて 釈迦様の

前にこのこと 申しける

一人救うは 難からん ナム

皆を救いて その中の

母を救うが 仏道と

施餓鬼の法を つたえけり ナム

南無阿弥陀仏

大し尊

婦妙頂来 大し尊

中天竺より 下られて

金山ひここのの 御命 ナム

指金定規 持つ人は

士農工商 へだてなく

皆この金を 念ずべし ナム

花和讃

婦妙頂来 花子さん

花のようなる 子を持ちて

蝶よ花よと 育てしに

無上の風に さそわれて ナム

ついにむなしく なりたまう

余り我子の 恋しさに

これより諸国を 修業して ナム

いく世の人に 会うなれど

我が子に似たる 人はなし

めぐり来たぞや 花の寺 ナム

寺の所縁に 腰をかけ

花をつくづく 眺むれば

開きし花は 散りもせず ナム

つぼみし花の 散るを見つ

すなわち我子も あのごとく

鳥は古巣へ 帰るとも ナム

我子の帰らぬ たねはなし

以後はいうまい なげくまい

落つる涙を この寺の ナム

池の蓮の つゆとせん
お念仏申して 帰るべし

一代の守り本尊

婦妙頂来 一代の

守り本尊 たずぬれば

子の年 千手観世音 ナム

丑寅虚空蔵大菩薩

同じ菩薩は卯の守り

辰巳の人は 普賢尊 ナム

午年勢至大菩薩

羊と甲は 大日よ

戌亥 八幡大菩薩

これを念ずる 人々は

諸悪災難 のがるべし

ナムアミダブツ

十六日念仏

婦妙頂来 月々の

十六日に 集まりて

念仏修業 いたすれば

死んで冥土へ 参る時

極楽浄土の 四方門

一度にさらりと 打ち開き

すぐに浄土に 参るべし

南無阿弥陀仏

二十二夜様

婦妙頂来 二夜様の
二十二夜様 まつ人は
水火をあらため 精進し
永血白血の わずらいも
又は産後の 病にも
二十二夜様 拝むべし
南無阿弥陀仏

首塚念仏

婦念頂礼 群馬県
碓氷郡は 原市の
築瀬村にて 名も高き
百年千年 其の昔
築瀬城の 有りし跡
如何なる 訳か 知らねども
首と胴とが はなされて
八万平に うずめられ
宝の塚とは 云い伝い
くわしき 履歴も なき故に
よもや首塚 ゆめ知らず
現われました 昭和なる
六年三月二十日にて
実にその首 数知れず
お彼岸様の ご命日
不思議や この日に出ずるとは
供養せよとの 知らせかや
これを見る人 聞く人よ

いづくの人と 思わずに

めいめい達の 御先祖と

思うて供養 諸聖衆

六宮の名号 もろともに

唱えてゑこう いたすべし

死なば念仏 後のため

あまり遺骨が ふびんさに

所の人が総出にて

ゑこう三字の 花ふりて

幾十万と かぎりなく

諸国の人が 参詣し

花や線香の 絶えまなく

香の煙で うかぶべし

南無阿弥陀仏

婦妙頂来 首塚の

保存会をば 組織され

辺の人々 先立ちて

町の議題と なり給う

町長様や 議員様

其他有志の 皆様が

御賛助致し 下されて

御堂建設 意味深き

趣意書作りて ありがたや

如何なる 訳か 不思議にも

四月八日の 芳名誌

出来たることは 何故か

お釈迦様の 引合せ

手柄首とは 言いながら

前世でなしたる 事ならば

之を見る人 聞く人よ

海のはてより 山の奥

我も我もと 御慈悲心

多大お恵み 山となり

御堂を建てて その前で

年々彼岸の 命日に

念仏唱えて 未長く

遺骨の回向 いたすなり

南無阿弥陀仏 ナムアマミダー

無常和讃

婦妙頂礼 遍照尊

かすみにまがう 桜花

にしきおりなす 紅葉は……ナム

夜半の嵐に さそわれて

色は匂へど 散りぬるを

流れ静かに 行く水と ナム

人の命の 定めなく

呼べど帰らぬ かしまだら

我が世たれそ 常ならむ ナム

あやめもわかぬ よみの道

一人の旅と 思いにしに

大悲の御手に みちびかれ ナム

ういの奥山 けふこゑて

うれしやこは みつごんの

浄土なりけり あな尊と ナム

諸仏菩薩に 守られて

あさき夢見し ゑひもせず ナム
南無阿弥陀仏

秋和讃

婦妙頂礼 あき和讃
春の桜に 夏のせみ
秋泣く鹿に 冬は雪 ナム
今はこの世の 人々よ
夕の嵐に さそわれて
今朝はけむりと なり果てる ナム
可愛いこがれた 妻や子も
捨てて冥土へ 行は
壁も柱も 戸障子も
鬼の姿と 見えにけり
死んで身につく 物はなし
きよう帷子を せなに負い
さんや袋に 珠数茶わん
永の旅路の 路銀には
六文銭を いただいで
耳も聞えず 眼も見えず
行方知らずに 唯一人
暗き道をば とぼとぼと
三途の川の 端までも
往けばふるさと あとにして
親兄弟や 妻子ども
思えばせめくる 血の涙
赦し給えと 手を合せ
疲れなきよう あしらいて

仲睦しく 暮されよ

先立つ人の 追善に

念仏回向 ある故に

七日七日に まねきよせ

百万遍や 念仏を

おこたりなしに 唱うれば

あら有難や ありがたや

死ねば念仏 あと供養

若きばかりは いつもなり

これを思えば 皆人の

めいめい達の ためなれば

仏のためと 思わずに

六字の 名号 もろともに

唱えて 供げんを 送るべし

ナムアミダブツ

(四) 日影念仏集

I

花和讃

婦妙頂礼花和讃
珠のような子を持ちて
蝶よ花よと育てしが
無情の風に誘われて
ついに空しくなり給う
あまり我が子がかわいさに
夫婦三年修業して
いく世の人を見たれども
我が子に似たる人はなし
めぐりきたぞよ花寺に

寺のしよえんに腰をかけ
花をつくづく眺むれば

開きし花は散りもせず

つぼみし花の散るをみし

すなわち我が子もあの如く

以後は言うまい嘆くまい

鳥は古巣へ帰るとも

我が子の帰るたねはなし

落ちる涙はこの寺の

池のはちすの露とせむ

お念仏申して帰るべし (日影)

四十九日

七日七日の七七日

四十九日のそのうちは

おねぶつ申した会得には

不思議あるぞよ極楽に

みだのお乗のおめしぶね

三津の川まで出迎えに

これの仏の中にのせ

みだの浄土に入りにつけり (日影)

薬師様

婦妙頂礼薬師様

薬師の本寺を訪ねれば

やくし本寺はこれここに

一のきだはしのほりあげ

二のきだはし眺むれば

からかねわに口かけそろえ
またもその奥ながむれば
十三ばかりのおん稚児が
天の羽衣めし給い
衿にはぶたいのじゆずをかけ
紫すずりにやえんずみ
左の御手に折紙を
右の御手に筆を持ち
墨だぶだぶと含ませて
四月八日と十二日
二十二日のどうさしゆう
残らずお帳におつけあり (日影)

四方固め

仏をたのみ身はせじよう
仏の浄土を教えべし
東は東方るりこなり
南は南方ふだらくの
観音さつたの浄土なり
西は西方極楽の
阿弥陀如来の浄土なり
北は北方金剛の
釈迦むに如来の浄土なり
天はしみせん世を照らす
下は九品の浄土なり
日月星の浄土なり
さほどの世界に生れきて
お念仏申せよみなせじよう (日影)

不動様

帰命頂礼不動様
峯より落ちる滝の水
結びとどめる人あれど
浄土定める命おぼ
結び止める神はなし
何と契りし親子でも
縄目変ればおそろしや
一夜の宿もかさどして
急ぎ野辺へと送りしが
野辺まで供する人あれど
野辺からあなたへ唯ひとり
雨風嵐で道見えず
涙押えて辻に立つ
助け給え不動様 (日影)

賽の河原

ものの哀れはここにまた
これはこの世の事でなし
賽の河原の物語
二つや三つ四つ五つ
とうよりうちなる幼子が
賽の河原に集りて
小石を拾いて塔に積み
一重積んでは父のため
二重積んでは母のため
三重積んではふるさとの
兄弟我が身の手向する。

地獄の鬼が現れて

積んだる塔を押し崩し
また積み積めと責めければ
幼な子あまりの悲しさに
ここよかしこと泣き歩く
地蔵ぼさつが現れて
なにを嘆くよ幼な子よ
汝の父はは沙婆にあり
冥土の父はは我なるぞ
ケサや衣に包みしが
かやばのようなひさを立て
もみじのような手を合せ
我が身は奈落に落ちるとも
沙婆の父母助け給え
地蔵尊
ああありがたや地蔵尊 (日影)

親和讃

婦命頂礼親和讃
墓場印のいこいの木
植えて育てて花咲かせ
その実をとりて珠数にして
珠数くる度に親おがむ。
親はこの世の弥陀如来 (日影)

親和讃春

帰命頂礼親様の
墓場印の古木梅

枝は九重花は八重
末の小枝にうぐいすが
西を向いては法華経読む
さぞや仏もうれしかる(日影)

① 彼岸念仏(てんとう様)
帰命頂礼天竺の
天とう大日如来様

天の岩戸にひきこもり
しじゅう世界が闇となり
老若男女に至るまで
嘆かぬものは更になし
数多神々集りて
ちようのみ神楽まいられて
岩戸のとびらのすき間より
影さし給うありがたや
戸隠しさまがかけよりに
岩戸のとびらを引きはなし
天道様を連れかえし
昔が今に至るまで
照させ給うありがたや
帰命頂礼年毎の
お彼岸様とて春と秋
これぞ仏のかよい道
彼岸七日のそのうちは
ご先祖さまもご和讃で
ちやとう手向けもおろかなく
香の煙で浮ぶべし

追善供養といたすべし
子孫なおまた未長く
守らせ給うありがたや(日影)

法事

帰命頂礼この家の
これの仏事をながむれば
ご先祖祭りか大法事
一家もんじが集まりて
一世三世のおん塔婆
たてて子孫が繁昌する
その人けんごで未長く
守らせ給いのありがたや(日影)

高野山

帰命頂礼高野山
弘法大師のいにしえは
国を申さば阿波の国
びようぶの裏にてお誕生
名は空海と申すなり
真言秘密を広めたり
所々国々に名所たて
今は高野に寺をたて
日本一なる名山と
みな人々がまいるなり(日影)

地藏尊

帰命頂礼地藏尊

これぞ冥土の一の木戸
地藏ぼさつの御前で
ゆかいちようじて身を清め
づたつかんむり衿にかけ
わらじはばきのひもをしめ
金剛杖を手に持ちて
死出の山路を登る時
あとふり返り眺むれば
恋しき沙婆は遠くなる。
いやな冥土へ近くなる
今まで添いし親子でも
別れて行くは世のならい
たのみまする地藏尊(日影)

(五) 日影念仏集 II

大正拾年拾月

念 仏 集

持主 清水アキ子(日影)

御真言

さんげ奉る がしゃくしよじょう
しよがくごうかい ゆうむしとんちん
四十しんごん四回じょう 一切がんに
かい さんげ奉る

御真言

孝むきいぶつ なむきいそう
なむきいはあ しよじんぼさつ

かんけによらいぶつじん
しゃかむにによらい
先祖代々 ごだいのため
おねぶつ申し上げたてまつる

庚申様

きみようちようらい こうじんの
やないをしごなす かみなれば
きよきさんじよの みはらいで
あくまをはらいたまうべし
しそんはんじよう すえながく
まもらせたまい ありがたや

廿二夜様

きみようちようらい ありがたや
廿二やまち まつひとは
しみづあらため みをきよめ
こころにあくしん もたずして
しんじんけんごに みをもちて
ほさつへはいしたもうべし
によりんぼさつの 五がんには
あまたのよにんの みがわり
ちのいけじごくえ おちるをり
すでにいらんと したまいば
あらありがたや ふしぎやな
いけよりれんげが あらわれて
さゆうのおんでで みどりごを
いだしあげさせまもうべし

みぎのおんでで まねきつつ
われをねんずる ひとなれば
ちじやくけつかい ちのやまい
ながちしらのやまいまで
くすりこうのうましまさば
たちまちかいき いたすべし
このないによにんにこそさずけ
さんぜんさんごだいなんも
あんざんにして えさすべし

後おさえ

がんにちくどくせう一さいほつば
だいしおじようあんらく

南無阿弥陀仏(三回唱える)

母のはさん

きみようちようらい わがおやの
はかばじるじにえごえのき
うえてそだててみをならせ
そのみをとりにつづにして
づづくるたびにおやおがめ
おやは三十のみだによらい

一七日

きみようちようらい ほとけさま
あはれなるかやはや七日
しよじんしよぼさつのまえに立ち
おねぶつ申したりやくには

これなるこしにのせられて
みだのじようどへうかびゆく
(つきたもう、ともある)

四十九日

きみようちようらい あはれさや
しゃばを別れた其のときは
めいどのみちはしんのやみ
しゃばのしそんがえこうして
四十九日になりぬれば
百八とうがおつきある

おもはずれんげにのりたもう
あみだによらいのありがたや

御法事

きみようちようらい このおんえ
せんぞまつりかだいほうじ
ごいちまいちがあつまりて
とこのまがかりをながむれば
十三仏をかけおいて
さんぎとうばを立てそらい
ほだいのししぎをまねきよせ
おきようずくしでありがたや

十三仏

ふどう。しゃか。もんじ。ふげん。
じぞう。みいろく。やくし。
かんのん。せいし。あみだ。あしく。

だいにち。こくうぞう。

ふた

十まんおくの十三仏

三げのしょぼさつありがたや

ただ今申したおねぶつは

さいごのじよねんとおぼしめし

まことにそのばにのぞいては

十念となへるひまもなし。

一日もうしたおねぶつは

黄金のおぼんにつみあげて

あややしきをうちかけ

みださまあなたにさしあげて

おいとま申していざもどる。

善光寺

おいもわかきもみなよりて

こころしづかにききたまひ

善光寺わさんにひいてゆく

みわここにころはしなの善光寺

みちびきたまひやみだのじょうどに

によらいのとはてんじくの

がつかいちようじゃのおこんりゆう

えんぶだごと申すなり

御たけ一寸八分なり

七日七夜さふきにかけ

光はでれどもとけはせず

もりやのだいじんあくしんで

なんばが池いしずめつつ

そのときほんだよしみつが

いけのほとりへきかくれば

ほんだほんだとよびかくる

ほんだふしぎと立よりて

そのときほんだがすくひあげ

もりたてまつるしなのなり

かわなかじまへ寺をたて

三國一のみだによらい

じようねんぶつを申すなり

さいのかわら

さいのかわらの水かがみ

一つや二つや三つや四つ

十より下のおさなごわ

ひろきかわらにあつまりて

こずなをよせてつかをつき

こいしをひろふてとうをくみ

一りんくんでは父のため

二りんくんでは母のため

三りん四りんとつみあげて

きようしきようだいわれがため

これほどごえこうなされても

おにほどじゃけんなものはない

くろがねのべたるほうをつき

ついたるつかをかきならし

くんだるとうをつきくやし

父よ母よとなくこえに

じぞうぼさつがごらんじて

てめらが父母まだしゃばに

ここでの父母われなるど

みだれしかみをなであげて

たすけたまひやじぞうさま

のりのみち

きみようちようらい のりのみち

これぞまことのみちのくの

めいどへおもむくそのときは

じぞうぼさつのおんまいで

わらじはばきのひぼをしめ

づたやかんもりえりにかけ

こんごうづえをてにとりて

しでの山じをのぼるとき

あとふりかへりながむれば

こひしきしゃばはとはくなり

いやなめいどへちかくなる

いやなめいどへ一人たび

一人ゆくさのさむしさよ

あとをみれどもつれもこず

さきにたつのはかげばかり

いろよきはなとてみそはぎの

みずのたむけのあわれさよ

御てんとう様

きみようちようらい だいにちが

あまのいわとにひきこまれ

そのときせじようがとてやみで
じつめつあつえのまくをはり
ぎやくめ ゆらくのはたを立て
三日三夜のはなかくら
そのときとびらをおしひらき
とびらはしなののがくしよ
いまの世までも世をてらす

中日念仏

きみようちようらい ちゆう日の
大日によらいのごらいこう
うつむきおがむみづかがみ
日の入るまでのおねぶつを
もらしうめそろありがたや

四方がため

きみようちようらい いませかい
おししづまりてききたまい
四方がためのさんをひく
ほとけのじょうど おしえべし
ひがしはとうぼうるりこうの
やくしによらいのじょうどなり
みなみはなんぼうふだらくや
かんのんぼさつのじょうどなり
にしはさいほうごくらくの
あみだによらいのじょうどなり
きたはほつぼうこんごうの
しゃかむにによらいのじょうどなり

天にじつめつすみせんを
てらさせたまえやありがたや
とうりてんにのぼりてん
にじゅうはつしくとうりてん
したにはくほんのじょうどなり
さほどのじょうどにうまれきて
なげにごしよをつくらない
おいもわかきもみなよりに
おねぶつ申せやいませかい

はなはさん

きみようちようらい はなはさん
はなのようなるこをもちて
ちようよはなよとそだてしが
十五と申すあけのはる
むじょうのかぜにさそはれて
ついにむなしくなりにけり
りようしんおせさまてにあぎれ
あまりわがこがこいしさに
ふうふ三年しぎようして
しこくさいごくまはれども
わがこににたる人もなし
わがこにかはる人もなし
めぐりきたぞやはなでらに
てらのしよえんにこしをかけ
つくづくはなをながむれば
さいたるはなはちりもせず
つぼみしはなのちるをみて

不動様

きみようちようらいふどう様
みねからおつる瀧の水
むすでとどめる神あれど
ぎようどきよめたいのちをば
むすびとどめる神はなし
なんとちぎりし親子でも
しよめかればおそろしい
一夜のやどもかさずして
いそげのべえとうくりだす
のべまでともろう人あれど
のべからさきえはただ一人
ごしよのくもでめもあげず
たすけたまひや不動尊

御茶はさん

きみようちようらいこれいきて
御茶のちそうにあづかりて
御茶のおれいになにあげよう
子だますいてもあげようか
こかげさんのおんまむり

たまのてばこえ入れをいて
ねのとねの日を念ずれば
夜ものもつかず火にまげず
かいは年上あたり

きみようちようらいこの御茶は
うじかみくぼかこはの茶か
たびのつかれでのみしれず
やどへかへりてものがたり

薬子^師様

きみようちようらいやくし様
やくしはこれにおたちやる
一のきだはしねり上げて
三のきだはしでながむれば
さくらいろしたちごたちが
ひだりのおんてにをりがみを
みぎのおんてにふでをもち
月の八日や十二日
二十二日のどうしやしゅう
のこらずおちようにおつけやる

十五夜様

きみようちようらい十七が
したんのこふくにこしをかけ
ながさきたはこのまつばぎり
やつぎのきせるにつぎこんで
ひとふきふけばふじのやま
二ふきふけばつくばさん

今ひとふきとこのまれて
十五夜お月にみだれほし

お寺をくり

きみようちようらいおてら様
のべのほそみちふみはけて
ききようかるかやうへおいて
花をたよりにごくらくへ
きみようちようらいお寺様
寺の大門ながむれば
うめとひちくをうえませで
ひちくのみにはなにおなる
ねんぶつくようがなりさがる

白金

きみようちようらい ごくらくの
うじいの舟が うかびくる
舟は白金 ろは黄金
はしらは金の まきばしら
じぞうぼさつが かじをとり
かんのんせいしが さわのやく
しゃかのみぜしが みちびきで
今のほとけを 中にのせ
なむの六字を ほに上げて
ごくらくじようどい うかびゆく
きみようちようらい 大師様
大師様

おにはごかいの さがり松
前にれんげの いけもあり
ながるるさきまで ありがたや

親の日

きみようちようらい 親の日は
あさおきなされて そうじして
こう花立てて ちやとうして
わが身はならこい しづむとも
両親おやさま ごくらくい

七つの山の名

きみようちようらい こうずけの
七つの山の名山は
一に黒瀧 二にはるな
三に赤城のしづがたけ
四には沼田のかしよう山
五には南のいなふくみ
六には妙義の中の嶽
七に伊香保の二つ嶽
高野の山にたる山
ついに一度はまいるべし。

おざはさん

きみようちようらい このおざに
なごりのたねは まかねども
なごりをしさや ふじの山
まいのこぎくに ほととぎす

をもうきれいきれきれとなく
南無阿弥陀仏。

おしゃかさん

きみようちようらい てんじくの
さやかむにによらいがあまりだる
なにがしがんであまりだる
あまりせじようがじゃけんさに
おねぶつすめにあまりだる
おねぶつすまうしたそのにはい
てんからひやくよのはながふる
まことはなかとでてみれば
はなではあらじみなるくじ
南無阿弥陀仏

野辺の送り

きみようちようらい わが親の
野辺の送りのみごとさや
四十九りんや玉のこし
どらみようはちをうちならし
はたてんがいをさしかけて
四つはながこい金銀を
入れてちり行くなに立
すまんのこいやお念仏
うかびたもうと申すなり
南無阿弥陀仏

十六日

きみようちようらい 毎月の

十六日にあつまりて
念仏興行なしたもう

念仏申したいとくにわ

死でめいどに行とぎに

ごくらくじようどの四方門

金銀ちからであかばこそ

南無の六字でさらとあく

十のれんげをさしあげて

りようなくなんどいたるべし
南無阿弥陀仏

善光寺

一番には埋れて南波ヶ池のみだによらい

世界こがれて本多義光

二番には心こそ国は信濃の善光寺

うすいすへおくこれざびしき

三番には 身はここに心は信濃の善光寺

みちびき給うみだの浄土

四番には雲りなく身は晴れやらぬ善光寺

御恩いたたく極楽の院

五番には山谷はるばるこそば善光寺

あの夜此の夜の土産けち脈

六番には義光がやよいの花を親と子に

ついで人ならんほとけなるがん

七番には遠くとも一度はまいる善光寺

すくいたまいやみだのせいがん

八番には若きとて末をはるかに思ふなよ

むじようの風は時をきらわす

九番には一たびは死ぬる命と思ひなば

ごしようねがえや後の世の為

十番には生まれ来て一度は死ぬる身を持ちて

悪を作るな先の世の為

十一番にはごくらくのみどりの舟に乗たくば

胸の間の波をしずめよ

十二番にはいそがましく迎いる人は待てしばし

其の日の時とさぎめおくなり

十三番にはねごうて早くごくらくよ

如来の前で御礼申せよ

十四番にはとのぐればここに居ながら

ごくらくよ仏の数に入るぞうれしや

十五番には先立てば後れる人も待ち合せ

花のうてなに共に浄仏せんと南無阿弥陀仏

きみようちようらい ひのものと

せまきにほんのくになれど

ひろきろしやをてきとして

あさひのみはたをおしたてて

かたにてつぼうこしにけん

たまやあられのそのなかを

いさみいさんでりよじんこう

つかへのしろをうちとりて

べきんのしろをうちやぶり

金銀たからをいださせて

かたせたもうありがたや

ばんみんいちどによるこんで
これにほんがだいしより
それかみよのおかげなる

こうじんわさん

きみようちようらいこうしんの
こうしんとうのたつときは
さるがふすべのひちこだけ
いせからからまつかいあげて
それをたれきになさいまし
じようござさんがかやかりで
二十三夜かやあげで
かつら男かはりさしで
ふいてしもうてむね見たら
こうしんさんがをたちやる

御やしきかみさま

きみようちようらいうじかみの
むかしかみよのそのときに
やしきいなりとまつられて
ねんに一度のまつり日を
ほかぞと思はずまつるなら
かいこぶさく十ぶん
守らせたまひやありがたや

一すいき

きみようちようらいこのたくで
きたるこんにち御年かい

いつけしんるいまねきよせ
をねぶつなかもあつまりて
とてのまがかりをながむれば
十三仏をかけをいて
さんぎとうばをかけをいて
すまんのこゑやおねんぶつ
うかびたまふと申すなり

いはいもらい

きみようちようらい此の宅で
親のかいみようもらいきて
これが仏の仲間入り
念仏仲間もあつまりて
南無の六字で仏段へ
申し上りてありがたや
香のけむりで浮ぶべし
あみだによらいのありがたさ

忠霊御和讃

きみようちようらい日本の本
国のまもりのいくさびと
よるずのたみのみのかわり
空に海に又陸に
大和心のいさぎよく
さいたばんだの花となり
忠こんぎたんむねにてり
又百れんのてつとなる
ただきみのおんためくのため

命をささげみをすてて
にくだん花とさけてちり
やまいをおしてうちたをる
きじんもなげくばかりなる
きえてとおときたまのおの
いさはよよにのこるらん
ほまれはちよにかをるらん
ゆるぎなくにのいしづえと
はしらともなりて
とおときいのちなりけり

(六) 下十二念仏集

昭和四十五年五月 下十二婦人会念仏集

御しんごん

さんげたてまつる
がしやくしよじょうしよあくごう
かいゆうむしとんじんち
じうしんごいしししようしう
いつさいがこんかいさんげ

こうじんさま

きみようちようらい こうじんの
やないをしごなす かみなれば
きよきさんじよのみはらいで
あくまをはらいたまうべし
しそんはんじょうと すえながく

まもらせたまいや ありがたや

忠霊御和讃

きみようちようらい 日のもと
くにのまもりの いくさびと
よろずのたみの みのかわり
そらに うみに またりくに
やまとごころの いさぎよく
さいたばんだの 花となり
忠こんきだん むねにこり
また百れんの てつとなる
ただ君のおんため くにのため
いのちをささげ みをすてて
にくだん花と さけてちり
やまいをおして うちたおる
きじんもなげく ばかりなる
きえてとうとき たまのおの
いさおはよよに のこるらん
ほまれはちよに かおるらん
ゆるぎなくにの いしづえと
なりてとおとき いのちなり

二十二夜様

きみようちようらい ありがたや
二十二夜まち まつ人は
しみずあらため みをきよめ
心にあくしん もたずして
しんじんけんごの 身をもちて

ぼさつをはいし たまうべし
によいりんぼさつの ごがんには

あまた女人の 身代りに

血のいけじごくへ おちるおり
すでに入らんと したまえば
あらありがたや ふしぎなや
池よりれんげが あらわれて
左右のおん手で みどり子を
いだきあげさせ たまうべし
みぎりのおん手で まねきつつ
われをねんずる 人なれば
血しゃくけつかい 血のやまい
なが血しら血の やまいまで
くすりこうのう ましまさば
たちまちかいき いたすべし
子のないによんに 子をさずけ
さんぜんさんごの 大なんも
安産にして えさすべし

野辺の送り

きみようちようらい わが親の
のべのおくりの みごとさや
四十九りんや たまのこし
どらみようはちを うちならし
はたてんがいを さしかけて
四つはながこい きんぎんを
入れてちりゆく ともに立ち
すまんのこえや お念仏

うかびたもうと 申すなり

親わさん

きみようちようらい わが親の
墓場じるしに えごえの木
植えてそだてて 実をならせ
その実をとりて ずずにして
すずくるたびに 親おがむ
親はさんずの みだによらい

一七日

きみようちようらい 仏さま
あわれなるかや 早や七日
しよじんしよぼつの 前に立ち
お念仏申した りやくには
これなるこしに のせられて
ごくらくじょうどへ うかびゆく

七七日

きみようちようらい あわれさや
しゃばを別れた そのときは
めい土の道は しんのやみ
しゃばの子孫が えこうして
四十九日になりぬれば
百八とうが おつきある
思わずれんげに のりたもう
あみだによらいの ありがたや

一年忌

きみようちようらい このたくで
きたるこんにち ごねんかい
いっけしんるい まねきよせ
念仏仲間も 集まりて
床の間がかりを ながむれば
十三仏を かけおいて
さんぎとうばを たておいて
すまんの声や お念仏
うかびたまうと もうすなり

善光寺

老いもわかきも みなよりにて
ころろしずかに ききたまえ
善光寺和讃 ひいてゆく
「身はここに 心は信濃の 善光寺
みちびきたまえや みだのじよう土へ」
によらいのものは てんじくの
がくかいちようじゃの ごこんりゆう
えんぶだごとと 申すなり
おんたけ一寸 八分なり
七日七よさ ふきにかけ
ひかりはでれども とけはせぬ
もりやのだいじん あくしんで
なんばが池へと しずめつつ
そのとき本多 よしみつが
池のほとりに きかかれば
ほんだほんだと 呼びかける

ほんだふしぎと たちよりにて
その時ほんだが すくいあげ
もりたてまつる しなのなり
川中島へ寺をたて
さんごく一の みだによらい
じよう念仏を 申すなり

のりの道

きみようちようらい のりのみち
これぞまことの みちのくの
めい土へおもむく そのときは
ちぞうぼさつの おんまえで
わらじはばきひの ひもをしめ
ずだやかんむり えりにかけ
こんごうづえを 手にとりて
しでの山じを のぼるとき
あとふりかえり ながむれば
こひしきしゃばは 遠くなる
いやなめい土へ 近くなる
いやなめい土へ ひとりたび
ひとりゆくさの さみしさよ
あとを見れども つれはこず
さきに立つのは かげばかり
色よき花とて みそはぎの
水のたむけの あわれさよ

お寺送り

きみようちようらい お寺さま

野辺のほそ道 ふみわけて
ききようかるかや 植えおいて
花をたよりに ごくらくへ
きみようちようらい お寺さま
寺のだい門 ながむれば
梅とひちくを 植えませて
ひちくの実には 何がなる
念仏くようが なりさがる

不動さま

きみようちようらい 不動さま
峯から落ちる 滝の水
むすびとどめる 神あれど
じよう土のきよめに いのちをば
むすびとどめる 神はなし
何をちぎりし 親子でも
しょうめかわれば おそろしや
一夜の宿も かさずして
いそぎ野辺へと 送り出す
野辺までもろう 人あれど
野辺からさきは ただひとり
ごしよの雲で めもあけず
たすけたまいや 不動さま

おしゃか様

きみようちようらい てんじくの
しゃかのお庭の 八重ざくら
一の枝から 二の枝へ

三のこ枝へ ほととぎす
花をちらすな 枝おるな
それほどだいじな 花なれば
そよ吹く風に ふたなされ
花はだいじや なけれども
みだいさまに あげるはな

さいの川原

さいの川原の 水かがみ
一つや二つや 三つや四つ
十より下の おさなごは
ひろき川原に あつまりて
こずなをよせて つかをつき
小石をひろうて とうをくみ
一りんくんでは 父のため
二りんくんでは 母のため
三りん四りんと つみあげて
きようしきようだい われがため
これほどごえこう なされても
おにほどじゃけんのものはない
くろがねのべたる ぼうをつき
ついたるつかを かきならし
くんだるとを つきくやし
父よ母よと なく声に
じぞうぼさつが ごらんじて
てめうがちちはは まだしやばに
ここで父母 われなると
みだれる髪を なであげて

たすけたまいや じぞうさま

薬師さま

きみようちようらい やくしさま
やくしはここに お立ちやる
一のきだはし ねり上げて
二のきだはして 眺むれば
さくら色した ちごたちが
左のおん手に 折紙を
右のおん手に 筆をもち
月の八日や 十二日
二十二日の どうしやしゅう
残らずおちように おつきやる

鎮守さま

きみようちようらい 白はとの
前のとりいに 羽をやすめ
はしをそろえて こえごえと
氏子はんじようと 鳴きわたる

お彼岸さま

きみようちようらい 毎年の
ひがんさまとて 春と秋
これの仏の かよいには
ひがん七日の そのうちは
御先祖さまも 御ゆさんで
茶とう茶むけの おろかなく
ついせん供養 いたすなり

香のけぶりで うかぶべし

中日和讃

きみようちようらい 中日の
大日如来の ごらいこう
うつむきおがむ 水かがみ
日の入るまでの 御念仏
申しうめそろ ありがたや

位牌もらい

きみようちようらい このたくで
親のかいみよう もらいきて
これが仏の 仲間入り
念仏仲間も 集りて
南無の六字で 仏壇へ
申しあがりて ありがたや
香のけむりで うかぶべし
あみだによらいの ありがたや

ふた

ふどう しゃか もんしゆ ふげん
じぞう みいろく やくし かのん
せいし あみだ あしく だいにち
こくふどう
十万億の十三仏 三げのしよぼさつ
ありがたや
只今申した お念仏は
さいごのじよねんを おぼしめし

まことにその場に のぞいては
じゆねんとなえる ひまもなし
明とき夜あけに 西見れば

三つのみださま お立ちやる

一に香立て 二花立て

三にしきびの おり枝を

おがむとすれども 雲かか

雲はじゃけんじゃ なけれども

わが身がじゃけん でおがまれぬ

心なおして おがみたい

一日申した お念仏は

黄金のおぼんに 積み上げて

あやおりにしきを うちかけて

みださまあなたに さしあげて

おいとま申して いざもどる

後おさえ

かんにちくどく せい一さい

ほつぼだいし おうじょうあんらく

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

なむあみだぶつ

これは昭和四十五年五月 下十二婦人会がまとめた
「念佛集」を写したものである。一部漢字を入れて
しまったところもあるがほとんど原文のままであ
る。

六、大久保の寒行

妙義町八木連字大久保では、昔から大寒と小寒の間、正法寺の前にあつた行屋で、寒念仏とか、寒行とよばれる行が行われていた。村の人だけで組織され、代々傳承されてきたもので、近在にもあつたというが、他地区での調査では一言の傳承もなく、大久保だけのものという感じがするが、由来を語る資料はないようである。

寒行の歴史 大久保の寒行の歴史については記録がなく、昔からやつていたという傳承しかない。起源についてはわからない。菅原や上高田の明治生れの人たちは、大久保のカンボウサマの餅投げに出かけたことを話しており、寒行三年目ごとの餅投げを通して近在に知られていくことが知れる。終りは、昭和七年の二月一日に餅投げをして翌年現役召集で軍隊へ入つた人がおり、この人が三年満期除隊して帰つて来たから寒行がなくなつていったということから、昭和十年ころ終りになつたのではないかということである。大久保の人の話では近在では他にもあつたとのことであり、同じ高田村（現妙義町）地内の久原は、大久保よりも少し前にやめて、その時の道具や掛軸が大久保の寺に納めてあつたという。寺は正法寺といい、この寺の石段下に寒行をした

行屋があつたわけである。

寒行の時期

寒行の名の通り、大寒と小寒の間（一月二十日ころから二月三日、節分までの間）になつており、



寒念仏供養塔 享和元年
(大久保)
(撮影 阪本英一)

お弟子になつての最初の年は一週間ときまつており、あとの年は節分までとなつていた。

寒行の期間の変化 昔は寒行というのは一回の行の期間が十五日であつたというが、昭和になつてからはだんだん日数が短くなり、しまい頃には一週間ということになつた。そのため、昔は、水行は夜だけであつたが、日数が減つたのでその分早くかぶるといふので朝晩になつたやうで、一期十五杯のダンナの水を一週間でかぶるので朝晩かぶるやうになつたということである。(八木連字大久保)

参加の資格 大久保の生れの男子で、学校を卒業した年から参加できる。長男でなくてもよかつたが、次三男は外に出たりするので前後九年間もの期間を全部やれることが少ないので、どうしても長男にかざられるやうになつた。しかし、お弟子、古行をすませて奉願になつたとしても、次三男の者はワキ奉願ということだつた。やつていゝうちに兵隊にとられてしまえばしかたないが、ふつうは九年続けてやつた。なお「奉願」については、「法眼」ではないかと考えられるが、地元伝承に従つて「奉願」とした。

寒行の年数 寒行は十二年かかる。内訳は、お弟子が三年、古行三年、奉願を三年つとめ、そのあとは隠居といつてこれも三年、都合で十二年という長い期間がかかつた。隠居といふのは、お弟子、古行奉願をすませた者で、寒行の始めに手伝いをする程度のことであるが、人数の少ないときにやつたともいふ。

人数 寒行の人数は、お弟子、古行、奉願ともに二人ずつで合せて六人で行われる。

寒行のオデシ 大久保は、正法寺が無住なので松井田町の不動寺が兼務寺であるが、昔岩井姓の者がお寺さんとけんかして上丹生のお寺の檀家になつてしまつたため、二十八戸が二つに分れてゐる。しかし、寒行には、正法寺の檀家でも、そうでない家のものも区別なくオデシ(お弟子)になつて行に入ることが行われて来た。(八木連字大久保)

コギョウ 古行と書くともみられるが、三年のオデシ(お弟子)の行を終つた者が、次の行の時はコギョウとよばれ、三年間の行をする。

念仏教習の實際の指導をしたり、食事の指図といふやうなこともする。オデシと直接つながりを持ち、ホウガンとの間に位置する。いかえるとお弟子三年、古行三年、合計六年の行をした者がホウガン(村の人は奉願と書いたが、法眼と書くことも考えられる)になる。二人いる時は話し合ひできめる。一人が長男で、他の一人が次三男のときは長男の方がホウガンになり、次三男はワキホウガンになる。ホウガンになる人が兵隊にとられていなくなつた時は、下の者がホウガンになる。だからコギョウの途中でホウガンになることもあつた。極端な場合は、お弟子からホウガンになることもあつた。

ホウガンは寒念仏の行の親方であるが、ふつうの行はコギョウにまかせておく。念仏もコギョウがお弟子に教えて、お弟子とコギョウで唱える。夜も早く寝てゐるので、晩の水行のときは起きてもらつてカズミズもきめてもらひ、水行をした。

寒行は階級がはっきりしてゐた。

先代に聞いてもホウガンによつて行のやり方もいろいろで、どうにするかはホウガンの権限でいろいろにやつていたやうである。

隠居 ホウガンのあとの年に隠居といふことになる。隠居は行をやる人の世話をすることになつてゐて、行には参加せず、行中も一般人としての生活をすればよい。行に入る日に行がための時の風呂をわかつ仕事をしてやること、風呂の湯をころがしてあけることが一番大きな仕事である。

行屋 正法寺石段右下に行屋があり、九尺二間ほどのわらぶきの建物で、家の中はふた間になつており、入つて左よりにいろいろが切つてあり、中央に仕切りがあつて、奥が信心するところ、手前のいろいろのあるところが生活するところだつた。六人全部が寝られないので、二人くらいは正法寺で寝たこともある。行屋には阿弥陀如来の軸を掛け



寒行の行屋跡（大久保）（撮影 阪本英一）

て拝んだ。西の方に足を向けては寝なかつた（オデシは寺で寝た）。

行に必要なもの 道具としては水行のとき水をかぶる桶、ダンナの木の桶、柄杓などで、生活する用具として鍋、茶わん、箸がある。どれも寒行の用具としてきめられたものがあつたが、箸は古くなると時々新しくした。そんな時は、塩をふつてきよめた。

下高田の久原の名の入つた水をかぶる桶と阿弥陀様の掛軸が、正法寺に納められていた。（八木連字大久保）

残っている道具は阿弥陀様の掛軸と他の掛軸が二つ、茶わんは昔から使つて来たものが人数分はある。（八木連字大久保）

行がため 行のはじまる日は大寒と小寒の間の日、夜、隠居の手で風呂をたてて、娑婆のあかをおとす。この時は着物を着かえて行屋に行く。木綿が主で、毛のものは一切身につけてはいけない。越中ふんどしをつける。爪をはぎり、灯ろうに上げ、風呂に入る。入り方はふつうの風呂と同じで、あかをおとす。出ると行屋へ行き、灯りを消してシャガンデじつとしていると、隠居が風呂の湯を突きころがして流し、風呂を貸してくれた家へ返す。隠居の仕事はこれで終りとなる。湯を流すことにより俗界と分れて行に入る。その夜はカタメといつて魚を食べるが、以後は行が終るまではナマグサは食べない。それから、ことばも、作法もちがい、まちがうと夜ザンゲをして、罰としてカズオケという水をかぶる。行がためためのキヨメの水は、七、八升くらい入っている桶の水をかぶる。

行に入る時は、夕食前に行屋の前に来て行がためのことをする。すぐには行屋に入らず、インキョがたててくれた風呂に入り、行屋の中に入つて絆天を頭からかぶつてじつとしゃがんでいる。もちろん部屋には明りはつけない。これが俗界との境であろうという。そうしているうちにインキョがせきばらいして来て、風呂の水を突きこぼし、「よろしゅうございます」といって、風呂を背負つて帰つて行くが、途中まで行つて風呂を置いて戻つて来ると、「これで終りました」と外で挨拶して行つてしまふ。このあとはホウガンの指図にしたがつて行に入る。

先ず阿弥陀様の掛軸のところへ行つて、きまりにしたがつて御祈禱を上げる。この時オデシは知らないから黙つて聞いている。ご祈禱どおりの念仏がすむと、一同イロリのそばによつて、ホウガンが行のいろいろのことについて話して聞かせる。この時はまだ夕食は食べない。話が一区切りしたところで、フクチを使つて火をつけ、お粥を煮て食べる。お粥は白がゆで、やや固いもので、これがすむと再びホウガンの話が続けられて時を待つ。ヒチジョウケン（北斗七星）が五つぐらい見えたころ、行場へ行つて水をかぶる。この日は初めてだからバツミズはないので、ダンナの水を一杯だけかぶればよい。これが行がためのである。（八木連字大久保）

水行 毎日、朝と夜、水をかぶつて行をする。朝は精進水をかぶればよいが、夜はザンゲによつて奉願がきめた罰の水、カズミズをかぶる。食事の時米一粒を落してもカズミズ一杯、ことばをまちがつたり、作法をまちがつたりすると何杯というように申し渡し、行の二日目からカズオケをかぶる。ひどいのは六十杯というのがあつたというが、夜半近く、シチジョウケン（北斗七星）が五つ見える頃（十一時ころ）奉願を起してザンゲしてからカズオケを申しあげられてかぶる。ダンナの水とよばれる精進水のほかにカズミズをかぶる。朝は太陽の出る前に精進水をかぶることになっている。



弘法井戸周辺 建物のところが井戸
(大久保) (撮影 阪本英一)

水をかぶったあと、体を拭いてはいけぬ。裸のまま芝の上で、どいんどいと跳びはねて水をきり、体温で体が乾いたところを着物を着る。不思議なもので風邪をひくことはなかった。

水行はスイギョウは、今の修験の人や修業僧がやる修業と同じもので、朝晩ダンナの水をかぶるが、晩には、昼間のことでザンゲして罰をうけるとカズミズをかぶる。多い時は六十杯というのがあったというが、三年間にダンナの水を四十五杯かぶることになった。二年ではふつうはかぶりきれないが、閏年で節分がおくれた年はかぶりきれないようにしていた。

精進場 寒行で水をかぶる場所は精進場で弘法井戸(いまの寒井戸)のところにつくる。コジックメ(小さいシメ)でしばって、わらで囲いをつくり、俗人に見られないようにつくられた。

行中 行の間、ふだんは行屋にいて阿弥陀様の掛軸の前で念仏を習った。また行屋のいろりで燃す薪切りにも出た。薪切りはカンボウサマの山(共有山)があり、そこで切つて来て、薪割りもした。しかし、指から血を出しても罪、尻もちをついても罪、木の枝で頭をなげられても罪というので夜ザンゲの材料になり、パンミズをかぶることになった。女性に出会って笑いかけられても罪となつたという。

行 朝晩の水行のほかは、行屋の中に阿弥陀様の掛軸をかけ、灯明を上げ、線香を立てて念仏を唱える。これがオツトメで、お弟子は奉願から教わりながらやる。いろいろの唱え言があり、

教わるわけだが、かつては教本があったと思われるがそれは伝わらず、奉願は唱え言の二言、三言くらいで、あとはゴニョゴニョと口ごもってはつきりは教われなかった。全部で四十はあったが、毎晩のことなので、ひと晩に三つくらいやってやめたりする。

行中の日に念仏の本を見せたことがあったが、それを書きとることはできなかったといわれる。

念仏 行の間、オツクベ(正座)をし、線香をたいてやるもので、あらたかな念仏だから俗界ではやるなどいわれた。念仏は高い山へ行つたときはやつてもよいが、ふだんは忘れろといわれ、行を終るとき「忘れてしまえ」といわれた。だから、行が終ると実生活では寒念仏のときの念仏は唱える機会もなく、書きとめておくこともなかった。

念仏には

門付けの道中和讃

蚕和讃(絹笠さん)

杉森和讃

檜森和讃

幼子和讃

十七和讃

榎森和讃

お茶ぼめ和讃

五色山

行人どうしが出合った時の仁儀の和讃などがある。

道祖神の和讃は、門付けの時「道祖神、宿世結びをめぐりて、道に立ち候」というもので、道祖神の前でもやるが、門付けのとき最初に唱えるものだった。また別のものは「峯にはサンコの下り松、前なるお池に蓮華咲き……」というものもあった。

幼子和讃は子どもが死んだときのもので、十七和讃は娘が死んだと

きのことを唱えたもの。すべて口伝えに教えられるものである。
幼な子と讃 小さい子をなくした時に祈つてやる和讃で大要次の通り。

婦妙頂来幼な子や

親のみよも送らずに

サイの河原にすておかれ

世の時昼の時

十二が時の苦しみは

小砂を寄せて砂あそび

小石を集めて塔をくみ

一輪くんでは父のため

二輪くんでは母がため

三輪くんでは我がため

くみさえすればつきかえし

塔さえくめばかきちらし

何を歎くや幼な子や

冥土の父母はおれじゃとて

六尺によじゆんの錫杖で

日さえくれればかき集め

衣の袖にとやどらせて

父よ母よと泣く声は(以下思い出せない)

上はヨジュンの雲までも

下は鳴門の底までも

ひびきわたりて限りなし

十七和讃

婦妙頂来 十七の

花のようなる 子を持ちて

ちようよはなよと 育てしが

無常の風に さそわれて

ついに冥土へ 引きとられ

あまりわが子が ふびんさに

寺のしお屋に腰をかけ

つくづく花を眺むれば

開きし花の 散りもせず

つぼみし花の 散るを見て

ああわが子も このごとし

鳥は古巢へ帰るとも

わが子は再び帰るまじ(以下若干不明)

蚕和讃

婦妙頂来 日の本の

蚕の由来を たずぬれば

天竺帝のおん娘

玉よの姫と 申せしが

じゃけんのカイホの手にかかり

うつろの舟にうちのりて

銚子が浦へと流されて

村人これをあわれみて

不ぶんなものよとかいほして

(この間若干あるらしい)

地上の難苦を救わんと

蚕の虫に なりたまう

今の絹笠明神は

大慈大悲の観世音

蚕の円満祈るには

絹笠観音 念ずべし

念仏の本 念仏を書いた本は、餉箱の中へ入れたままで正法寺に納

めておいたが、雨もりがして本がはりついてしまい、どうしようもなく、固まったものを餉箱ごと燃してしまったという。そのため寒行の念仏は今では一冊もない。

門付け 行に入って翌日門付けに行く。大字八木連の内、門付けは門付け祈禱念仏をいって歩く。念仏は七つあって次ぎ次ぎにいって歩く。下八木連は地藏尊のある家、上八木連は小島さんの家では、座敷に上つて接待をうけることになっている。その家ではむしろを敷いておじいさん以下家族で迎えるが、カンボウさん達一行は縁側から上つて奥の間に入り、御祈禱してから、用意されているものをいっただいて休息する。酒や肴（生臭は出さない）も出されるが、この時家族は別の部屋にいて顔を出さない。出された料理には手をつけたものは全部食べなければならぬことになっている。ある時、奉願が酒に手をつけたが、その時の奉願は酒は飲めないでお弟子が飲めとるので飲んだところ、あとで「酔って赤くなつたから」というので罰にカズミズをやらせられたこともある。

下十二の岩井さんの家にも門付けに行く。八木連以外ではこの家だけである。この家は大久保から引越して行った家である。

この外、家の希望により御祈禱によることもある。

御信心 行に入っている時、門付けをしたりしてものをもらう時「御信心です」といってもらう。オデシがもらつてゲ箱の中に入れるが、古行はだまつて見ている。

寒念仏供養の餅投げの時に、ハナを持って来てくれる人がいるが、これも「御信心です」といっていただいでおく。

お参り 行中には三年に一回、碓氷峠の剗石山にある爪引き地藏かまたは黒瀧山不動寺のどちらかへお参りに行くことになっていた。両方は行かず、一方だけでよい。この時はカンボウの手ぬぐいをかぶり、奉願、古行、お弟子の順に一行になり「寒念仏」と書いた頭陀袋を首にかけ、古行かお弟子がカネを叩いて行列をしてゆく。外出する時は

六尺以上前方を見てはいけなないので下を向いて歩くことになっている。ある時の行のお参りの時、碓氷峠の爪引き地藏にお参りに行くので行列をつくつて横川（松井田町）の町を歩いていたところ、その異様に巡査に呼びとめられて取り調べられたことがあつたという。そんな時は奉願が応待することになっていたが、わかつてもらうのに苦労したという。

御祈禱 行の期間中、病人が出れば、病気の平癒のための御祈禱をする。時でもない時（期間中でない時）は、特別に行を立てて二、三日行をして御祈禱に行く。ある時キツネツキが出たことがあつたが、その時も頼まれて行をつくり、祈禱したことがある。どういふ方法でやったかは知られていないが、その当時の人は御祈禱の方法を知つていた人がいたわけである。

下丹生にキツネツキがあつた時は、行の期間ではなかつたが、臨時に行を三日間開いてやり、それから問題の家へ行き、祈禱した。棒を持ってゆき、病人をなぞってサワリを追い出した。その時五臓ザンゲという念仏を唱え、キツネがいるところのないようにして追い出したら「オツカネエ」と叫んでキツネが逃げ出したという。

行中の学習 行中には特別の本を読むことも、字を書くことや、經文を写す写経などのこともなく、念仏を習うことだけだつた。

中行 寒行のまん中の日を中行の日といい、この日には、お弟子にも念仏の本をみんな見せた。しかし、書き写すことなどはしなかつたし、させもしなかつた。

行に入る身仕度 行に入る時は、袷か綿入れの木綿の着物を着てゆく。絹のものはよいが毛のものは一切身につけてはいけないうことになっている。股引きをつけることもだめで、下着は越中ふんどしときまつていた。

お衣 寒念仏の行をするときに、いつもかぶるのがおころもとよばれる手ぬぐいである。晒の白布を切つてつくる。いつでもかぶるか、

首にかけ、首より下に下げることはいけない。行屋から外に出る時はかぶつて出なければならず、かぶり方はトウナスカブリ(ほほかぶり)にした。寺の坊さんの袈裟と同じもので行屋でイロリで燃しているから黄色くなったり茶色になつたりしてしまふが、新しくはしない。

寒念仏の行の時の手ぬぐいは、行が終つてもとつておいたもので、死んでゆく時は、この手ぬぐいを出して頭にかけてやつた。半分ずつにして、夫婦がかぶらせたので、どんなに古くなつてもとつておいた。股引き 碓氷峠の爪引き地藏さんへお参りに行くことを「旅に出る」というが、その時だけは股引きをなくことを許された。しかし、股引きはく時かかたとを通さなければならぬからかけがれるとして、行つて来ると(帰ると)キヨメの水をかぶつた。

食事 寒行の食事は二食で、お弟子が煮る。お粥で、菜大根、汁だった。用意のオサゴが足りなくなると、家へ戻つて米を持つて来る。この時は、家の前でセキ払いして来たことを知らせる。家族が出てくるから用事を伝え、米を出してもらふ。家族は米を出すすすぐ家の中へ入つてしまふから、持つている塩で清めてから行屋へ持つて帰る。食べるものも行なので、つくつたものは全部食べなければならなかつたので、お弟子は苦労した。

食事の用意をする時、五人で五合のところを古行の人が「もう少し入れろ」といって米の量をふやすので、そのまま煮るから残るのは当然だが、ホウガン、古行が食べたあとお弟子が食べると余つてしまふ。小行は余つていても知らん顔をしているので、どんなことをしても食べなければ次の行に移れない。また一粒でもこぼすことがあると、これも晩にカズミズをさせられる。

米にこうじなどができていて、炊いたお粥に黒いものが入つていたりすると「蚕糞が入つていた」といって奉願が棚の上へ上げてしまつて食べないで、その日は朝飯をぬいたりした。蚕糞は汚物だから、お

弟子はそれを食べてしまえばキヨメの水をかぶらなければならず、晩飯までがまんしなければならなかつた。

行中の作法 ふだんの生活とはちがひ、いろいろのきまりがある。手のひらを下につけない。前をつく時は、拳にして指をつくようにする。

道を歩く時は六尺より向うを見ない。

小便をする時は性器をオガラの箸ではさんで用を足す。

大便はオガラの棒でふき、紙を使用しない。手がけがれないようにするため、用便後は大便を見てはいけない。

行をしている間は風呂には入らない。水行をしているから入らなくともよい。

血が出るようなことがあると、紙で押してふきとることを何回でもやつて血をとめるが、その回数分だけカズミズをしなければならぬ。

行中、道で女の人に会い、笑われたり、笑いかけられたりすると、夜のザンゲでカズミズを申しつけられる。

ことば 行中はことばにもきまりがあつて厳しく守られる。火、水、塩は変わらない。

米 ボサツという

虫 コヤマ

魚 カタメ

腹 薬師のツボ

手 胎蔵界

足 界蔵界

目 ガン

獣 イシ

火 寒行のときは、フクチ(ホクチ)で火をおこし、一日中いろいろの火は絶やさず、行が終るまで火を絶やさなかつた。

村の人 寒行に入ると村の人も承知していてだれも声をかけない。

姿を見ればかくれるようにして会わないようにする。用事があつて自分の家へ来ても家の中にははいれないし、口もきけない。このことは行が終了するまできびしく守られた。

行と祝儀不祝儀 行中は、家で不幸がおきたのはかまわない。ブツ(仏)だからであるが、赤ん坊が生まれるような祝儀事はよくない。一般的にいつて祝儀はよくないといわれてきた。

変がわかる 行をしていると、家族に異変があつた時は、知らせを受けなくてもわかつた。行に入っている者の兄弟に赤ん坊が生れたのが、行人にヒブクレが出たことでわかつた。また、行に出ている者の家で、魚を行の間に食つたこともわかつた。

あらたかなものである。

大施界 三年に一ぺん大施界をした。カンボウサンの餅投げといわれている行事で、近在に門付けをしてオサゴをためておいて、お金も含めて全部餅米にして餅をついて餅投げをした。多い時は五俵分投げたといわれたが実際には二俵半ということだった。それにしても量は多かつた。

餅は節分前の二月一日に投げる。招待状は出さなくもわかるから大勢やって来た。餅の用意は、行に出ている者の家が中心となり、大久保中で三軒に一軒くらいの割合で餅をつき、ひし餅につくつて「ハンギリ」に入れて行屋へ届けてくれた。行をしている者たちは、行に入っていない村の人の手伝いをうけながら、踊りのやぐらのようなものをつくり、その上から投げることになる。

行屋の前の方にシデモリで拝むところをつくり、ごぎを敷いてそこで拝んでからやぐらの上を上り、四方固めのオガミをやり、上棟祝いと同じやり方で餅を投げた。おわりには全部投げきらないうちにハンギリをひっくり返して、この分は後片づけをする村人の分として残しておいた。餅を投げるのは行人だけである。

カンボウサンの餅投げでは、投げすぎてムラから苦情が出たことも

あつた。

招び状 餅投げの時の招待状は、村の人とホウガンが相談してきめて出したもので、来てくれる人はオハナを持って来てくれるので、この人には餅を包んでお返しをした。

行のおわり 行のおわりの日は、朝まではふつうにやり、夕方はいれでお別れだといつておわりになる。

寒行の終り ある人が三年のお弟子を終つて昭和八年に出征し、翌九年の末に帰つて来たが、十年の寒行はやつて、この年だか翌十一年に餅投げをしたが、その後はもち投げはできなかったということから、昭和十二年か十三年に終つたまま、再び復活しなかつたのではないかというが、このことについて昭和十六年に結婚した人が、その時には行屋があつたが、行の話はなかつたといつていることから確かめられよう。行屋は戦後すぐに取りこわされ、掛軸などは寺に納められた。

寒念仏と村のくらし 村にいる男子は、一度は寒念仏の行をするのを例とし、特に長男の場合はみんなやつたが、お弟子、古行、奉願の計九年間の行をやつたことが、その後の村の生活と直接結びつくことはなかつた。寒行の中ではきまりは厳しく、奉願のきめたことには服従して行としたが、奉願、古行、弟子という関係が行を終つて日常生活の中で師弟の関係とか、特別の上下関係になることはまったくなかつた。

寒念仏の行中にやつたことが、日常のくらしの中で直接何らかの形で出ることにはなかつた。大久保の男衆はオツクベ(正座)をするのが強かつたが、これが寒行のときの名残りだつたかも知れないが、寒行のときおぼえた念仏も、日常生活、特に仏事の際の念仏とはならなかつた。行が終るときには、行中におぼえたことはみんな忘れろとまでいわれたということである。

寒念仏供養塔 正法寺石段の上り口右側に寒念仏供養塔が建てられている。記年銘により享和元年十二月吉日に土地の者が建てたもので

享和元 西十二月吉日
寒念仏供養 右寺詣入 三人

階花主 同行 十三人
内新城 三人

が何かもわからないが、あるいは寒行でいうところのオデシにあたる者のことをいつているのかも知れない。

寒坊さま 正法寺参道にある仏像が寒坊さまとよばれている石仏で、一見阿弥陀如来像のこととみられる。寒行の時は特別にお参りするともないが、平常は寒坊さまとして信仰され村人に親しまれている。またいろいろの病氣などでオガンシヨをかけ、大願成就の時には寒行の餅投げのときオガンシヨバタシを持って来たものである。

正法寺 寒行する行屋の上が龍池山正法寺で、真言宗豊山派の寺である。いつのころからか無住になり現在は松井田の不動寺が兼務している。小幡様（小幡藩）の中の岳神社への参詣の休み場といわれているが、過去二回火事にあい、建物は二回目のものである。この寺に久原（下高田）の寒念仏の道具が納めてあったという。また大久保の寒



寒坊さんの像（大久保）
（撮影 阪本英一）

念仏についての書きつけもあつたらしいというが、燃やしてしまつて現在は残っていないという。
寒念仏と葬式念仏
寒行の時の念仏は約四十ほどあつたが、これは行中だけに限

あることはわかっているが、具体的な人名は出ておらず、同行十三人がどんな人達だったかはわからない。また「内新城三人」ということについても、新城

あることはわかっているが、具体的な人名は出ておらず、同行十三人がどんな人達だったかはわからない。また「内新城三人」ということについても、新城

られ、葬式のあとの念仏の時は一切出さなかった。俗界に出たら行のことをいわないようにいわれ、念仏もまた申すことはなかった。葬式のあとの念仏は別のものがあつた。（注 以上は、岩井四郎・岩井文吉・黒沢操氏よりの聞き書きである。）
寒坊さんのオガンシヨ 正法寺の参道北側にある寒坊さんに、体の弱い人とか、病氣の人が、丈夫になるようにといつてオガンシヨをかける。オガンシヨバタシは、寒行の行上げの日の餅投げの時、いくらもお金を包む。（八木連字大久保）
寒行 大久保の寒行の人たちは八木連の方にも托鉢でまわる。音がするので「寒坊さんが来たからかくれろ」といい、米を出しておいてすぐ家の中に入っていた。佐藤弘さん宅は法印屋敷ともいわれ、地神さんのまつつてある家だが、この家ではゆつくりして行つた。（八木連字下八木連）

寒坊さん 十二にも寒坊さんがお念仏に来る家があつた。大久保から出た岩井助平さんの家で、寒坊さんは、縁側から上り、縁側から下りた。座敷へ上ると八畳間みしめきつてお念仏をし、家で用意したお茶菓子を食べたりしたが、岩井さんの家族は、お茶やお茶菓子をだし、お供だけで、会うことはしなかった。それがきまりだつた。（上高田）
寒坊さんの餅投げ 大久保の寒坊さんの餅投げは上高田の方からも拾いに行つた。ひし形の小さい餅で、あまり大ぜいで拾えなかつた。カヤの木のあつたところの一段上の平らなところでやつていた。（上高田）

民俗知識

はじめに

民俗知識とは何か。文化庁編集「民俗資料収集の手びき」によると「いわゆる生活の知恵ともいうべきものである」としている。語りつがれた知恵は、私達の祖先が失敗をくり返し試行錯誤を重ねながら、よりよい方法をさぐり、少しずつ訂正を加えながら伝えてきたものだろう。我々の暮しがモノの面で豊かになるにつれて、このような身近な知識が生活様式の変化で価値を失ない、伝えるすべがなくなつてしまった。今の社会状況は昔を語ると若い人に喜ばれない傾向があり、高齢者はつい口をつぐむ風があるが、これでいいのか考えさせられる。今回の調査による報告ではバランスを欠くが民間医療の資料が多かった。このような資料の中には現代でもそのまま通用するものが少なくないといえよう。

妙義町は雪が少なく住みいい所だという。三束雨のことばは各地にあるが、ここでは「妙義の三束雨」また大桁、中之岳の三束雨という。麦や麻を三束たばねないうちに降ってくる雨足の早いものであつたが、このごろはこの男性的な夕立や雷が少なくなつたといつてゐる。ヒヨウが降り始めた時、鉄砲にタマをこめて黒雲めがけて二、三発打つ込むと、雲が切れて不思議に降り止むという（木戸・久保）珍らしい話を聞いた。かれこれ五十年前、明治初めに生れたおじいさんがこうしていたとのことである。

「郭公がテッコハッコと鳴くころが豆のまきしん（旬）」「麻まき桜

（山桜）が咲く頃が麻のまきしん」と曆にこだわらず、季節をよく知っている動植物や、身近なものに例をとつて、まだ文字が普及しない時代の人でも分りやすく具体的に教えていることなど先人の知恵に感じ入るのである。（土屋政江）

一、しつけ・作法・禁忌

(一) 家庭生活に関するもの

赤飯 赤飯に汁をかけて食べると、御祝儀の時に雨が降る。御祝儀に雨が降るのは、降りこめるといつて、そのうちに長くなるのでいとされてゐる。（菅原）

食べものの形 お供え餅の形は丸型。切り餅は一升ますを八つに切つた形。投げ餅と節供餅は菱形。掘り米はまん丸形である。（大牛）
川神様 川に小便をする時、「川神様、ごめんない。——（自分の名前をいう）が、ねぼけてしまった」という。（菅原）

三月がかり お産の時など実家に戻つた時、三か月にかかると、三月がかりは身をつくといつてよくない。（菅原）

左と右 鰻針をつける縄は左ない。農作業に使う縄は右ないであり、葬式の縄は左ないである。

普通の食事膳は右膳、葬式の膳は左膳である。

着物の衿は普通は右前、葬式の仏さんは左前に着る。
左手を使うとクロボトキンと言われた。日露戦争直後のことである。

（大牛）

鉄の釜 鉄の釜はかたぎの釜でも使つてやれという。（行沢）

貯金 金を残すなら食い物から残せといい、食物はおごるなといわれた。（上高田）

しつけ 小学校六年になると田んぼで働らかされた。「七つ泣き鼻ど

り」と言い、小学校低学年から馬の鼻どりをさせる家もあった。田の草とりにつたつたっていると「今からカカシはいらねえぞ」とどなられた。学校へ行く前に草を一かご刈ってくる。かごのまわりに丈の長い草を入れて、中に短かいのを入れてごまかして一ぱいに見せかけても、背負ったかごをおろすと、兄きか手をつつこんで「このやる、もう一度刈ってこい」とどなられた。「学校におくれらあ」と泣き泣き再び草を刈ってから学校へ飛んで行った。門を入ったとたん鐘が鳴ることもしばしばであった。小学校を卒業して、一人前の仕事ができないと「仕事は半ばで飯はメンパだ」と言われた。(大牛)

田の草取りに子供が使われる。疲れて立っていると「今からカカシはいらねえぞ」とどなられた。(大牛)

(二) 禁忌事項

禁忌作物 田村家ではトウナス(南瓜)を作れない。先祖がトウナスのつるにひっかかって怪我をしたからといわれている。

黛イツケはトウノイモ(からの赤い里芋)が作れない。ヤツガシラもいけない。

大塚イツケはエクサ(ゴマの一種)が作れない。先祖が弓の自慢をして、エクサめがけて弓を射た。ところがエクサ畑の中にオビクサマ(尼さん)がいて、これに命中した。「今後絶対にいたしませんからかんばんしてください」と言ってあやまった。以後エクサを作らない。

(古立)

清水三十郎さんの家はナスが作れない。

大塚マケはキュウリをつくってはいけない。(上高田字上十二)

神部さん方ではカボチャとブドウは作れないことになっているが、いまでは作る。ことしブドウの棚をなおそうとして怪我したのでやめてしまった。おのぶさんがカボチャを作っても何のこともなけりやあいい、といっついて作つたら娘をなくしたことがある。矢島さんの

家では、ジュズク玉と鶏頭は作れない。

一般的に屋敷に植えては悪いものに山椒がある。山椒はうなり声が好きだという。(下高田字本村)

田村姓 モロコシをつくってはいけないという。

竹田姓 キュウリ、ゴマ。もしこれに違反すると赤痢病になるとい

う。(菅原)

その他の禁忌 犬の日に田植をしない。犬は大食いだからという。

鬼門の木を伐るものではない。便所を作ってもいけない。

三角屋敷に家を建てるものではない。三角屋敷の家は没落する。

左ズマイ(左勝手)の家を建てるものではない。家が栄えない。

ビワを屋敷に植えると、病人がたえない。

ケードに直面したところに玄関を設けてはいけない。ケードから玄関が直結すると、その家は栄えない。(古立)

髪を燃すものではない。髪の毛を燃すと蝮が寄ってくる。(大牛)

師走えびすはするものでない。

梅の実の中には、天神様がねているから食べるな。

ネエバワラ(稲の苗を束ねたわら)の中に苗を植えるとコウデになるから、植えた方に投げろ。(ヒウソウになるともいう。)(古立)

彼岸と社日の日は土をいじってはいけないといわれた。(上高田字下十二)

ネギ 土用ネギはかたき(敵)にもくれるな。(行沢)

ねぎ畑で、ハゲン(半夏)様が死んだので、北向きに植えてはいけない。(菅原)

四日・八日 ヨッカ・ヨウカはよくない日だ。大げたに行っちゃいけない。変なことがあった。野菜の種おろしも、この日は避ける。(菅原)

しな・くな 死な苦なといっつて、四月九月には、野菜の種まきを忌む。ごぼうまくのは三月五月、四月ごぼうは枕ごぼうともいう。(菅原)

原)

二、医療・衛生・保健

(一) 薬物療法

頭痛 ハッカ、梅干をつける。(下高田字本村)

腹痛 センブリを干しておいて、腹痛の時に煎じて飲んだ。昔は山に自生していた。(諸戸字日向)

胃痛 タロツペの根を煮出した汁を飲む。また南天の葉をかんで汁を吸う。(大牛)

下痢止めにはゲンノショウコをかげ干しにしておいて煎じてのむ。

(大牛) (下高田字本村)

打撲 小麦粉を酢でといて患部にぬる。(大牛)

イシヤゴロシという草をはる。(下高田字本村)

カゼ 卵酒をのむ。また生ネギを刻んで少し味噌にくるんで三度三度食べる。(大牛)

卵がけがよい。梅干の黒やきを飲む。メメズをせんじてのむ。しその葉を生のまま牛乳に入れて飲む。呪としては、大豆をいって家中で

食べて残りを紙に包んでよその家の桑の木に下げてくる。三本辻でもよい。こうすると風の神が追い出されるといふ。(下高田字本村)

咳止め 大根を刻み蜂蜜につけておいてのませる。

熱病 オオバコを煎じて飲むと熱が下る。(大牛)

ヤケド 卵の白身をつけた。ヤケドは仏のたたりとも言った。(行沢)

冷やす。また味噌をつける。(大牛)

ウルシかぶれ カニをとってきつてつぶしてつける。(大牛)

癩の虫 クサギの木にたかる虫(鉄砲虫に似ている)を串にさして

焼き、一串ずつ食わせる。(大牛)

暑気あたり 胡瓜の葉をよくもんで、両足の裏にはる。タライに頭

を入れて上から冷水をかける。(大牛)

胎毒 ドクダミを煎じて飲む。(大牛)

ブヨ ブヨに食われた時は塩をすりこむといふ。(行沢)

オデキ ゴボウの種子をのむとよい。(下高田字本村)

あせも 桃の葉をとり煮出したお湯で洗ってやる。(行沢)

アカギレ アカギレには、杉ヤニをとってきつて、火箸の先を焼いて

つけると、ヤニがとけて傷口をふさぐ。(大牛)

ヒビ ユズの中身を出して酒と一諸に広口ビンに入れといひびにつける。(行沢)

切りキズ みそ汁で松葉を煮たものを、キズにつけておくとなおる。

(上高田字下十二)

ムカデ をとってビンに入れておいて、ムカデから出る油をとってキ

ズ薬にした。(行沢)

ヨモギ と三種の草をもんではる。(下高田字本村)

鎌で手や足などを切った時には、モチグサやオオバコなど野草の葉

を三種類もんでつけると、血が止まり、化膿を防ぐこともできる。

ニワトリの卵 ニワトリの卵を妊婦に食べさせるとお産が軽くす

む。(八木連字大久保)

寝小便 コオロギを二〜三匹小十能で焼き食わせる。(大牛)

ドクダミ よく干して煎じて飲むと何にでもきく。ヤカンではなく

土びんで煮る。戦時中、学校で子供にとらせたので、干して学校へ持っ

て行った。(行沢)

乾燥させて風呂に入れる。冷えや痔にきく。白根だけ煮出してのむ

と胃病にきく。(諸戸字日向)

咽喉のケガ 生卵を割って白身をぬる。(大牛)

歯痛 ほほに梅干をはる。(大牛)

赤痢の薬 「ヒキ蛙の皮をむいて裸にして焼いて食うと赤痢病の薬

になる」といった。(諸戸字木戸・久保)

マムシ酒 マムシをしょうちゅうの中に漬けておくと、傷・やけど・痔の特効薬になった。(諸戸字日向)

ヤマニンジン 杉山に生えるが、白根をしょうちゅうに漬けてこむ。万病にいいという。(諸戸字日向)

オンバコ 干しておいて胃病の時煎じてのむ。(行沢)

アロエ 何にでもいい。痛い所へもみ出した汁をつける。飲む時はすり下して蜂蜜に入れて飲む。胃の薬にもなる。(行沢)

土用丑の日 萱と蓬をとって来て風呂に入れて入浴する。丑湯とって、夏まけない予防である。(大牛)

薬草等 クサギの木の幼虫はカンの虫の薬になる。焼いて食べるとよい。この虫が、蝶になった時、鱗粉を^{ちゅう}痔にふりかけるとよいともいう。

ソテツの実を黒焼きにして、古釘などふんだ傷につけるとよい。みみずは風邪薬になる。熱さましに効く。干しておいて煎じて用いる。(中里字北山・菅原)

クコ 煎じて茶にして飲む。(下高田字本村)

ゲンノシヨーク 下痢にきく。(下高田字本村)

カキの葉 茶にして飲む。(下高田字本村)

イチジクの葉 痔によい。(下高田字本村)

カゴシマソウ 煎じて飲むと腎臓によい。(下高田字本村)

ホウノミ 胃弱にきく。(下高田字本村)

ドクダミ ふきでものによいが、何にでもよいという。(下高田字本村)

(二) 呪的医療

ロクサンよけ 数え年を九で割った余りの数によって体のどこがロクサンかが分る。一・三手足、四腹八股、九が頭、二・六脇、五・七が肩で総身六・三と数える。

ロクサンかな、と思いついただけでもいい。何でも仏様をおがんで治してもらおう。

米を自分のとりの数だけ井戸でも水がめにでも上げ、この米のほとびないうちに治して下さいとおがむ。

南天の葉をとって体をなでて三本辻に置いて線香を上げる。

茶わんの糸尻に水を汲んで流しの棚に進せておき、こういう所が痛いから治して下さいとおがむ。治ったら茶わんをおこして水をいっぱい入れてお礼を言っておがむ。(諸戸字日向)

年だけの米を包んでからだ中をなでて井戸に投げこむ。この米がほとびるうちになおしてもらいたいという。お線香を仏壇にあげる人もある。もえきるまでになおしてもらいたいという。(下高田字本村)

お線香を二本上げて、お線香のとほり切らないうちに治して下さいと頼む。ほんとにとほり切らないうちに治る。(諸戸字日向)

コウデ 障子の穴に、手をつつこんで男なら女に木綿糸でしばってもらおう。(菅原)

両親揃った子に、障子の穴から手を出して痛い所を木綿糸でしばってもらおう。(行沢)

男なら女の、女なら男のシマイツコ(末っ子)に、障子の穴、葉缶のつるなどに痛む手を通して手首を糸でしばってもらい、糸の切れるまでになおしておくれという。また次の唱えごとをいう。

朝日さす 甲手の山のやせ男(女)

まねくとするところをやませる

アブラオンケンくくく(下高田字本村)

メツパ ものもらいが出来た時は、井戸にふるいを半分見せ、直つたら全部見せる。(菅原)

フルイを井戸に半分見せて、治つたらみんな見せますという。治してもらつたらみんな見せる。井戸に限らず水がメでもいい。(諸戸字日向)

豆を年の数だけ水にひたし、ほとびたらなおる。(菅原)
籠をかぶるとなる。フルイを井戸に少し見せ、治してくれば皆見
せると言う。

はやり目 「やんめ大売出し」と書いて電柱にはる。最初に見た人
にうつる。(大牛)

メツパができたとき、井戸神様にふるいを持って行って、なおった
らみんなみせますと行って、半分だけ見せてくる。(下高田字本村)

薬師様に一把線香をあげます、と行ってお願生かける。このあたり
ではフジ薬師というところへ行つた。生の茶の葉を煮てこしてそれで
目を洗う。目にホシができると白南天の実を一日に一個ずつ食べると
いい。山椒の実でもよい。(下高田字本村)

目のゴミ 目を開いたまま、へら(舌)で鼻の下をなめる。「天道様、
天道様、ゴミが入ったから、つき出してくれ」という。(菅原)

はしか はしかが軽くすむようにするには旧西横野村八城(現松井
田町)の弁慶橋をくぐらせるとよいと行って、二歳子を背負って行っ
たものである。この橋には鹿の足あとがあるといわれていた。(八木連)
北流水の川の橋をくぐる。富岡市丹生の原、一の宮の宇田、松井田
の二軒在家などにこのような橋があった。(下高田字本村)

八城の辨慶橋にはシカの足跡がついていた。子どもにこの橋の下を
くぐらせるとハシカにならないといわれた。(上高田字下十二)

疱瘡 オガラでオ棚をつくり、なおってホシケテから三本辻に送り
出す。オ棚には、わらの馬にオコワ(赤飯)を背負わせる。あらかじ
め作って家につけておいて、ホシケテから出すのである。

百日咳 クツミリのかせという。キンカンをせんじて飲ませる。(下
高田字本村)

夏やせ ムエン仏に供えた牡丹餅を、人に知られないように盗んで
食べると夏やせしない。(下高田字本村)

しびれ 背中からオツツクベエして、足の先を見る。つばきを額に

つけ、「しびれ、しびれ、なおれ、なおれ」という。(菅原)

しびれたら額につばをつける。(菅原)
しゃっくり 箸を逆さに頭に立てると治る。茶碗に箸を十文字に置
き、その間から水を飲むと治る。

アカギレ 黒の木綿糸を割れ目にふた回りぐらい巻いてしばつてお
いた。膏薬を貼つてもちよつくら治らない。(行沢)

うちぐるみ うちぐるみは急所だから、蟻にも這わせるな。(菅原)

虫歯 亡くなつた伊藤梅吉さんがやつてくれたのは、親ゆびでおし
て何か唱えごとをしていた。よくなおつた。(下高田字本村)

ソコマメ ソコマメが出来たとき、ソコマメのところへ筆で字を書
いて直す。ふつうの墨でよくすつたものを筆につけ、マメの上へ筆で
略字を書きながら唱え言を唱える。このときはにぎやかだったり、気
がのつてこなければうまくできない。精神統一を必要とし、うまくいっ
たときは字を書いていて息をするのがセツチヨウ(苦しく)になる。

(八木連)

ヤケド ヤケドをしたら「サルサワの池のオロチがヤケドして、ハ
レもタダレも、ピリツキもせず」と唱えて、ヤケドのところを吹くと、
ヒブクレにならない。(上高田字下十二)

イノゴ 包丁をあぶつて、イノゴのできたところ(例えば、わきの
下)に入れておくとなおる。(上高田字下十二)

耳だれ 菅原の阿弥陀様に新しい腹がけをかけますとお願生する。

(下高田字本村)

石神さまの吹竹は、ひと節でつくり二本組んで水引きでゆわえて進
めた。これで耳を吹くとミミダレが直るといわれた。(上高田字十二)

蜂さされ 蜂にさされた時は歯つくそをつける。(下高田字本村)

中気 かからないおまじないとして、檜でつくった風呂の初湯に入
れてもらおうと中気にかからない。(下高田字本村)

ウルシカブレ ウルシにかぶれたときは、左繩をなつて、カブレた

ところをこすり、それをイロリに燃やすと、「すごい音」がして、カブレがなおった。(上高田字下十二)

こぶ 「チチンパイパイ、いてえとこ、向う山へすつとべ」という。(菅原)

水ムシ 水ムシができたなら、サワガニをとってきて、榛名湖に放つとなおる。このとき榛名神社を遙拝して「ただいま、サワガニを放流します」と唱える。(上高田字下十二)

イボ 中里の「お菊さま」の石をかりてくるとイボがなおる。なおつたら石を倍にして返す。(上高田字下十二)

お女郎ぐもの糸を、まきつけると直る。(菅原)

唱えごと「いほいほわたれ、一本橋わたれ。」(下高田字本村)

子どもの夜泣き 「縁の下のすすばらいをしる」といわれた。(下高田字本村)

(三) その他

セーサーヤツカン 葉売りの行商人。アコーデオンをひき、唄をうたいながらやってきた。頭痛の時に、こめかみにはる葉りて薄荷の類であった。(古立)

毒消し売り 新潟から来た。三人ぐらいで組んで、農家に泊って行商した。「毒消しやいらんかねえ」と言いながら家々をまわった。(大牛)

三、卜占・まじない

卜占 洪水の夢を見ると、悪いことがある。

下駄を「天か雨か」と言いながら投げて、表が出れば晴れ、裏が出ると雨。

月がかさをかぶると雨が降る。(大牛)

月占い 昔、三ヶ月様に線香を供えて、月占いを行なった。よこに見えるると不景気、たてになつているほど景気がよい。(妙義)

三日月が立つと白いもの(糸・米・繭)があがる。横になると下がる。(下高田字本村)

雷除けの呪 遠くの桑原、遠くの桑原と唱える。大きい雷がなるごとに、釜神様の松に火をつけて外へほおり出す。初雷のとき、節分の豆をたべるとへそをとられない。その豆は、カギ竹につるしておいた。(下高田字本村)

線香をたく。蚊帳に入る。(菅原)

煎った豆をとつておいて、始めて雷が鳴つた時に食べる。(行沢)

盗難よけ どびん(鉄びん)の口を、たつみに向けると、泥棒が入らない。(菅原)

失せもの つばを手のひらにはき、別の手のゆびでたたくと、散つたツバの方向(?)に品物がある。(下高田字本村)

呪術 柵の枝を戸口に下げておくと魔よけになる。

蛇のぬけがらを財布の中に入れておくと、お金がたまる。(大牛)

刃物 死体の上に刃物を置くのは魔よけのためで、猫が死体を飛びこえると、死んだ仏さま(遺体)が動き出すという。鳥よけのためともいう。鳥は人間の腐肉が好きで、人が死ぬとおいでわかる。だから鳥が入ってきて、仏さまがつつかれないように、刃物を死体の上に乗せへおく。(中里)

ほととぎす 左の耳で、はじめて聞くといいが、右の耳で聞いた時は、「ほととぎす、今日初音と思うたが、昨日も聞いた、今日も聞く、あびらおんけんそわか」と三度唱える。(菅原)

害虫防除 七夕かざりの竹の頭を折って、菜種を蒔いた(七夕が菜・

大根の種の蒔きしん)所へ立てておくと、虫よけになる。(妙義)

光りもの 二十前に見なけりゃ一生見ない。不思議に見る人がある。(菅原)

三本三つ股 山の神様、天狗様の休む木なので、切る時は、ほかの木を持って来て、これが山の神様の木ですといって、代りに植えてから切る。(菅原)

三つ股の木は、天狗様の休む木なので切らない。(菅原)

オオサキ お鉢をたたくと来るといふ。飼っている人があつて、お蚕様があがると、袂に入れてくるんで来た。蚕が当っていると話すと、オオサキがまゆをもって来たりした。(菅原)

オトカよめどり 狐の嫁入り。遠くの方に、あかりがちらちら見えるのを、オトカの嫁ドリといった。(菅原)

四、天文・気象

天気予報 役場で毎日天気予報の旗を上げた。白い旗は晴、曇りは赤、雨は青、という風に旗を替えて上げた。蚕の時はこの旗が頼りで一生県命見た。役場の小使いさんも中里、北山など四、五ヶ所を回って旗を取替えたから忙がしかった。(諸戸字日影)

天気予報の旗を立てた。白が晴れ赤が曇り、青が雨のしるし。あまりあたらなかつた。松井田の役場から、ラジオの天気予報を聞いて旗を立てた。(大生)

天気予知 蝶が家の中へ飛びこむと雨。妙義の金鶏山に雲が右へかかる時は翌日雨。反対の方向に動くとき晴れ。横川方面(北西)の雲が切れるとき晴れる。信越線の汽笛がよく聞える時は天気かぐずれる。荒船の三束雨。(妙義)

とんびが朝とぶと雨が降る。夕方だとつぐ日天気になる。

峠(碓氷)に雲がかかると雨が降る。

妙義に雲がかかると雨が降る。

青大将が出ると雨が降る。

台所が湿つてくると降る。乾くと天気になる。

ウムス(むす)から夕立になる、という。

稲舎の三束雨。南からの夕立は早い。麦を三束丸けないという。

北なりの雷は大きいし、おつかない。

アリのひっこし、雨。

ネコの耳ごし、雨。

雷がなるとつゆがあける。

月がカサカブツタから雨。中に一つ星があると、雨が一日向うへ行く。中に二つあると二日向うへゆく。カサに破れたところがあればヤ

ブレカサだから大丈夫などという。

夜あかりはまたすぐ降る。(下高田字本村)

ツナミ 東から西に吹く風をツナミという。ツナミ(東風)が吹いてくると雨が降るようになる。西風は天気になる。(日影)

夏のツナミ(東南の風)は明日は雨が降る。

秋西に春ツナミは天気が変わる。秋の西風と春の東南の風が吹くと

きは天気が変わりやすいということである。(上高田)

松井田のポウがよく聞える時は(東風なので)天気が悪くなる。(諸戸字日影)

三束雨 「妙義の三束雨」「大桁の三束雨」という。麦を三束まるか

ないうちに降ってくる。(諸戸字日向)

「中之岳の三束雨」という。妙義のクボツタマへ降ってくる時と麦束

三束まるかないうちに降ってくるといった。「妙義の三束雨」ともいい、

以前はよく夕立がした。(諸戸字日影)

「中之岳の三束雨」という。(上高田字下十二)

妙義から来る夕立は、麻を三束たばねないうちに来る。南からの夕

立は茶を煮て待てという。(菅原)

妙義から来る雨は麦束三束まるかないうちに降ってくる。(行沢)

白雲山からくる雨は早く逃げようがない。春先にはヒヨウも降つ

た。(諸戸字木戸・久保)

夕立 時世が変わると天候も変わる。昔は雷が多かったが、今は稲光りがしても音はあまりしない。(諸戸字日影)

夕立は馬の背を分けて降る。(諸戸字日影)

北ナリ (北方で鳴る) の夕立は、たいしたことはない。南西や西北の方向からくる夕立はひどくなる。「ナリ場がいいからくるぞ」などといった。(上高田字下十二)

雷 一つがみなりは水のもと。雷が一つ大きく鳴る時は長降りがある。(菅原)

風 妙義の観光道路の所にハトムネという所がある。ここから吹き下す風が「ハトムネツ風」で砂ぼこりを巻き上げて先が見えないほどひどかった。観光道路ができてから風がうちばになった。(諸戸字日影) 妙義の吹きおろしは強い風でまともに歩けず学校から帰る時は後向きになって歩いてきた。(諸戸字日影)

大雨 妙義の中之岳の天狗畑の花を取ると大雨が降るといふ。(諸戸) 金洞山の頂上に雲がかかると、多かれ少なかれ雨が降る。(諸戸字木戸・久保)

大桁山からくる雨雲は雨は長いがヒヨウにはならない。(諸戸)

春先にツムジ (旋風) が吹き、屋根が飛ばされることもある。三月から四月下旬にかけて、西風が吹く。(妙義)

アサマツ 浅間山から吹きおろして吹く風で、強く吹くので、家の屋根をいためる。「アカギレがいたむからアサマツが吹くぞ」といふ。(大牛)

いwash雲 いwash雲が出ると、半日か一日のうちに、雨が降る。(菅原)

雪 祖父が西行ぶちだったのが、各地をめぐる歩いて「ここは雪が少なくて住みいい所だ」といって住みついたそうである。(諸戸字日影) 雪は少ししか降らない。種類としてはミゾレ、フッコシ、アラレと

か、化粧雪などがある。(中里)

ヒヨウ 夏、雷雨と共に急に冷えこみヒヨウが降り出した時、祖父は裏庭へ鉄砲を持ち出して「みてろ、いまこれを打つと雲が切れてヒヨウが止むから」と言つて実弾を二、三発、黒い雨雲めがけて打ち込んだ。どういう訳かたちまち雲が切れて、ヒヨウが止んだ。明治四年生れの祖父がこうするのを何回か見たが、子ども心にとでも不思議だった。かれこれ五十年近く昔のことである。(諸戸字木戸・久保)

通り日 雲の切れ間から、一部分だけ日が当るのを、通り日という。通り日が当ると、その日のうちに雨が降る。(菅原)

自然暦 麻まきざくら (山ざくら) が咲く頃が、麻のまきしん。郭公が、テッコハッコと鳴く頃が、豆のまきしん。

黒ばらの咲く頃が、豆のまきしん。

遠山 (赤城・榛名など) に雪がある時が、松の植えしん。

杉の苗は、あぶあたまが植えしん。

かなかなが鳴く六月初旬が田植え時。

竹八月の木六月。どちらも切るしん。

七夕には菜、大根を蒔け。しかし年によつては早すぎて、大きくなりすぎる。

りすぎる。

野茨が咲いたら豆を蒔け。(妙義)

けやきの芽が早くふく時は豊作。(妙義)

妙義のイチヨウが黄色くなったところが、麦の蒔きしん。(諸戸字日影)

桑畑の手入れ 土用布子、寒かたびらという。(菅原)

五、数 理

奇数と偶数 神に供え物は奇数、仏の供え物は偶数。人にものをやる場合は奇数。(大牛)

畑の広さ 一駄ジリ——二畝「五駄ジリ一反」といった。ヒトツカ

二畝。(中里)

広さ 一升まき——一畝。ヒトツカ——二畝。一駄マキ又は一駄シリ——二畝。五駄シリ——一反歩。(中里)

砂利運び 昔は、よく道路の砂利を運んだ。正油樽六ばい×三回で一つの山を作った。

道ぎわにあった一升枒(コンクリート作り)には、六尺×六尺のところまで六〇駄の砂利が入った。五合枒だと三〇駄だった。

砂利運びは馬の足にきいたので、休けい時間は川の中に立たせておいた。その場合の飼料は大麦を煮て呉れた。大粒になったものを与えた。この外ふすまとか川原のヨシを細く切って食べさせた。荷鞍で石も運んだ。(中里)

一人前の仕事 桑原うないは一人一日八畝から一反歩。(諸戸字日向)

田植 苗を取ったり植えたりで、一日五畝。

稲刈——夜なべで五〇ヒロ。

縄編み——一日四俵。

ミナガワ(蓆) 編み——一日二〇枚。

蓆織り——二日で一枚。

六、動物・植物

(一) 動物の種類、名称、性質、利用等

猫 でかい猫になると大尽げになるもので、大きくなると大尽になるといつてほめる。(八木連)

猫が死ぬと三木辻に埋める。(八木連)

猫が一貫匁の大ききになるとお祝いするという。ねずみ除けに飼うといい、死ぬと三本辻に埋め、飯しゃもじの墓標を立ててやった。猫の肉を食うと七年たるというが、七年くらい忘れられないくらいうまい味だという話である。(上高田字下十二)

猫が死んだら、三本辻へ埋める。

蛇の夢を見て、夢の中に出てきた蛇のいた場所へ行ってみると、お金が落ちてくる。ただし、人にしゃべるとだめである。

夢を色つきで見ると、山の上にもるい月が出てくるとか、日が照って美しい景色を見ていい気持ちになると、何か良いことがある。(大牛)

鶏の病氣 ネギの白根を火にあぶり、中の芯の部分、くちばしをあけて、のどへ入れてやる。(大牛)

縞蛇 食うには縞蛇が一番いい。薬になる。おおく食べ過ぎると、目があかない。(菅原)

青大将 下に水車があつた。車に米麦をついたり粉に引いたりして行く、ばかに眠くなった。こりや蛇がいるのかっていったら、青大将が梁にいた。人間の血を吸う。くずやだから、屋根にいる。取ってくれないっていわれても、命がけでなくては取れない。蛇ににらまれると眠くなる。(菅原)

マムシ 足の脛に生えているナナツゲという毛にマムシが食いつく。(菅原)

ヒキガエル ヒキガエルにねらわれると自分から蛙の口の中にとびこむそうだ。軒下に巣を作った蜂でも、地面に居て蛙が口をあけたら

んび蜂が蛙の口の中にとび込むそうだ。(諸戸字木戸・久保)

タケノフシ ナナフシというカマキリに似た茶色の虫で足が長いもの。足が切れ易くてその足に毒があるので、見付け次第に焼き棄てる。

(諸戸)

ナナフシ 竹のフシともいうが、この細い足に毒があるので見つけたらいつでもとって殺す。(諸戸字日影)

しじみ 十二前の川にたくさんいた。いつだか知らないが放流したのがふえたものだということだった。(上高田)

妙義のサル 以前はサルが妙義の山に居ても見なかったが、今は五十頭ぐらいいるのではないか。サルの通るコースは決まっていて、百合根や山いもなどみんな食い荒して、シイタケやクワの芽まで食う。

観光客がサルの写真なんか喜んで撮っているが、あと何年かして子ザルが大きくなったら困ったことになるのではないか。(諸戸字木戸・久保)

(二) 植物の種類、名称、性質、利用等

カシグネ 妙義は西風が強いので、垣根は西側に作る。防風林として檜の木を植える。檜は火を吹き返えすと言ひ、防火林としても役にたつ。(妙義)

お茶の実 しぼった汁は頭髮につける油になる。(古立)

クズ粉の作り方 クゾフジの根を秋に掘って、洗ってたたいて大桶に水と一緒に入れとく。上ずみを捨てて、水をかえて何度か晒すと底に白い粉がたまる。これは本もののクズ粉で、これだとクズをかいてからさめても水にならない。(諸戸字木戸・久保)

諺 「アワ作るより百合を掘れ」といふ。(諸戸字木戸・久保)